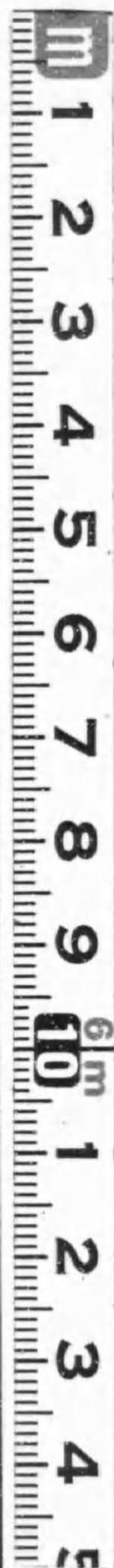


特219

206

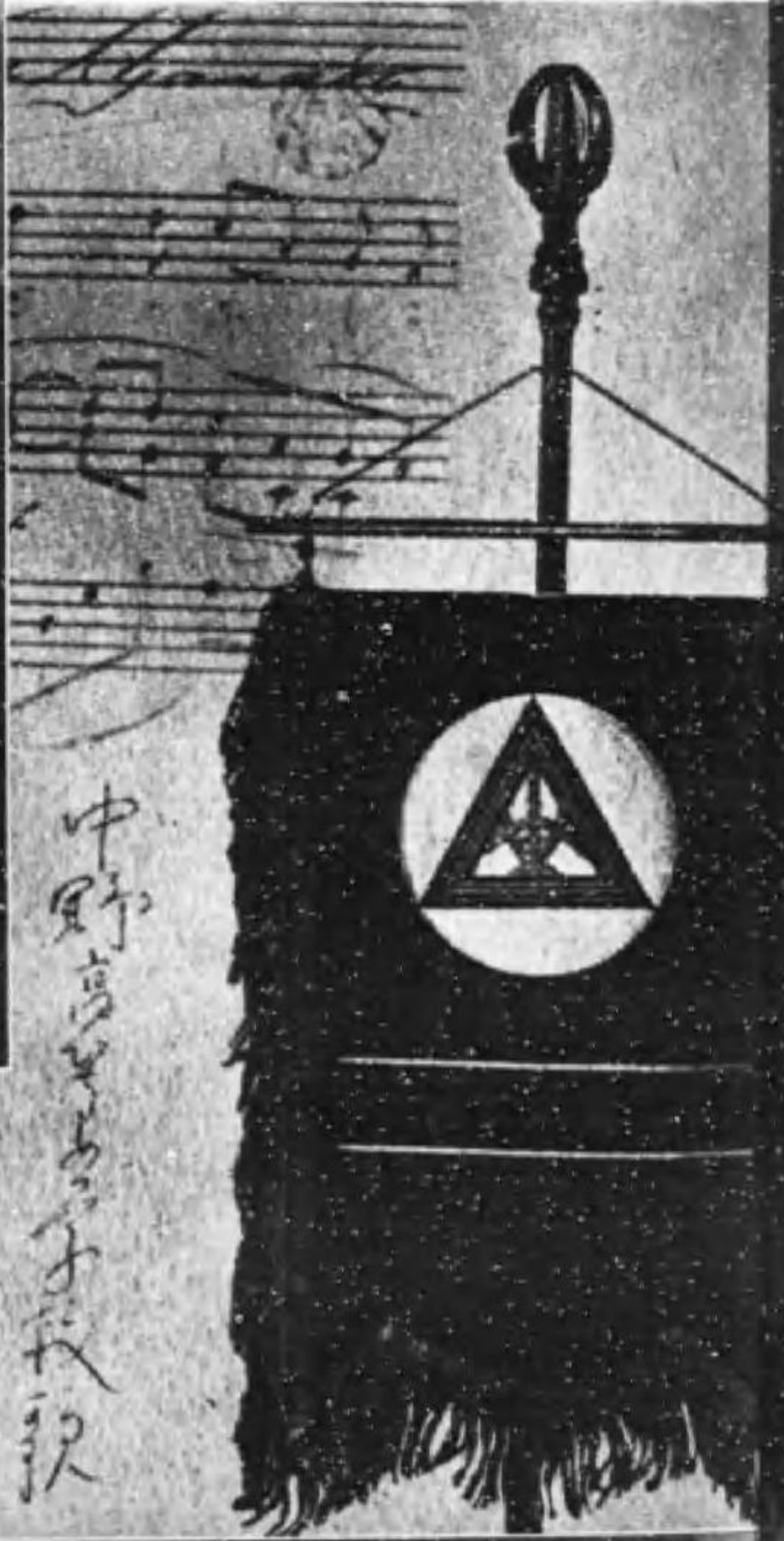
おまへのついで



始



校
長



校
旗・校
歌



拾
年
勤
績
者

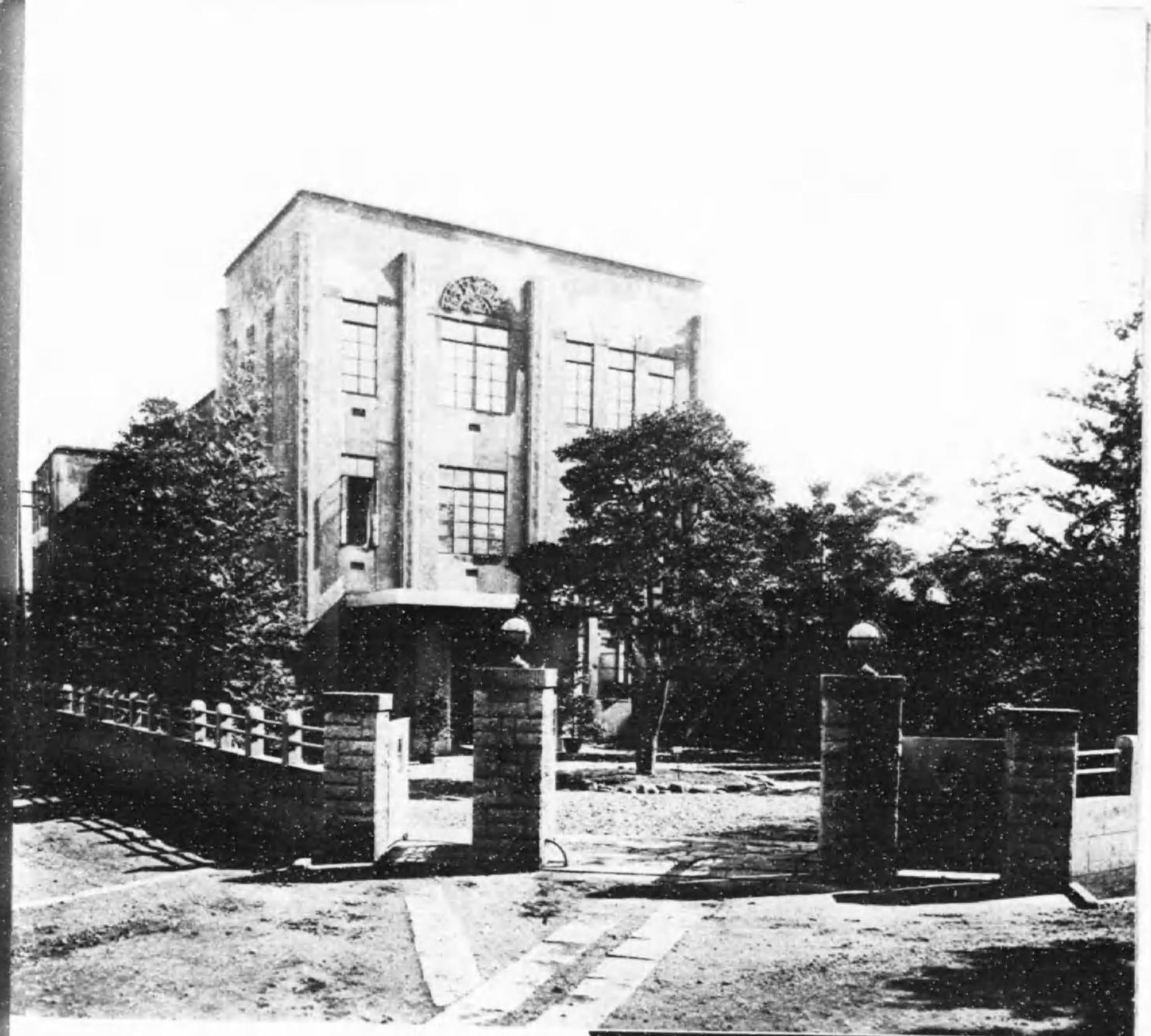




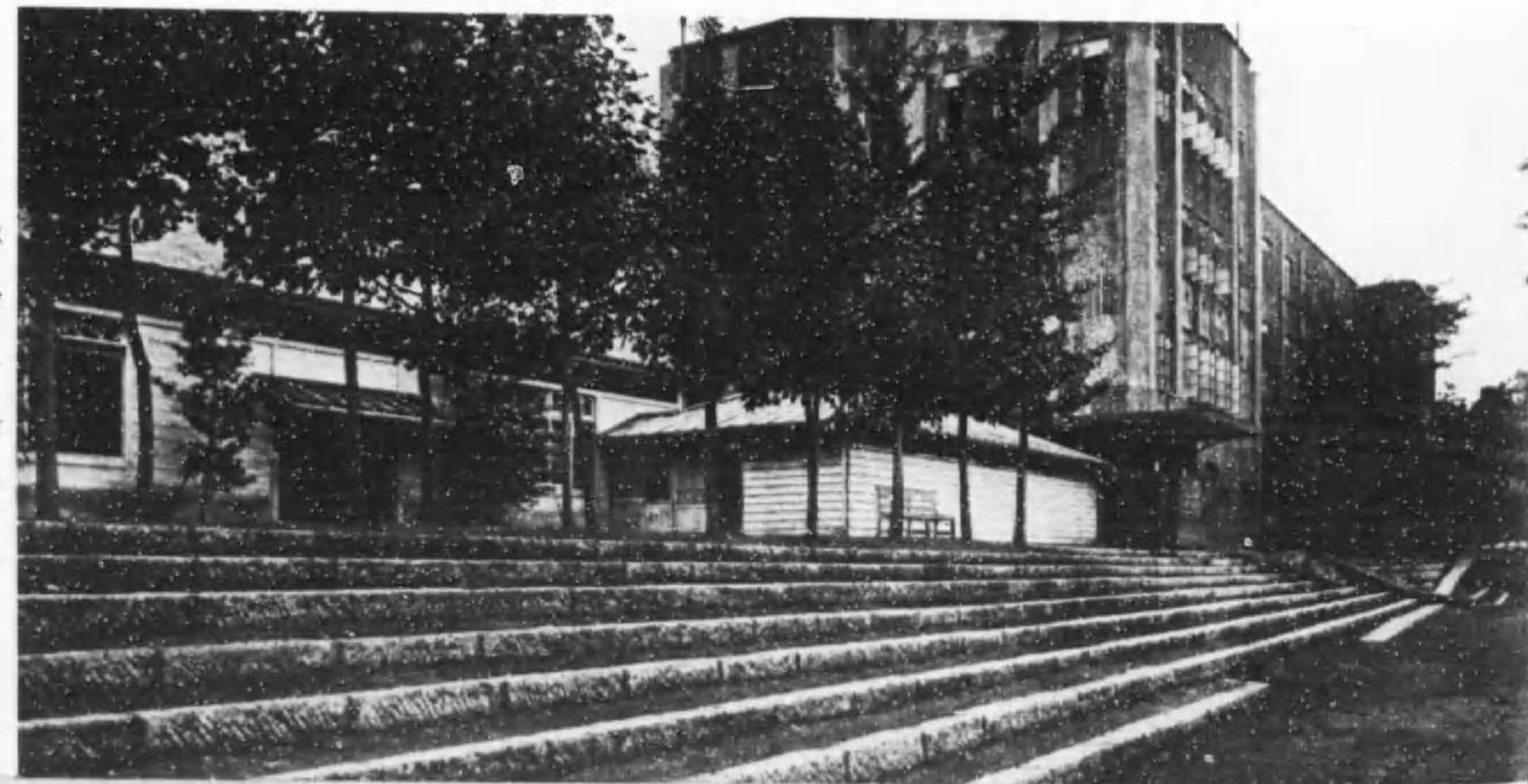
棚 藤



葉 青



面 正 舎 校



ス
タ
ン
ド
よ
り



玄
關



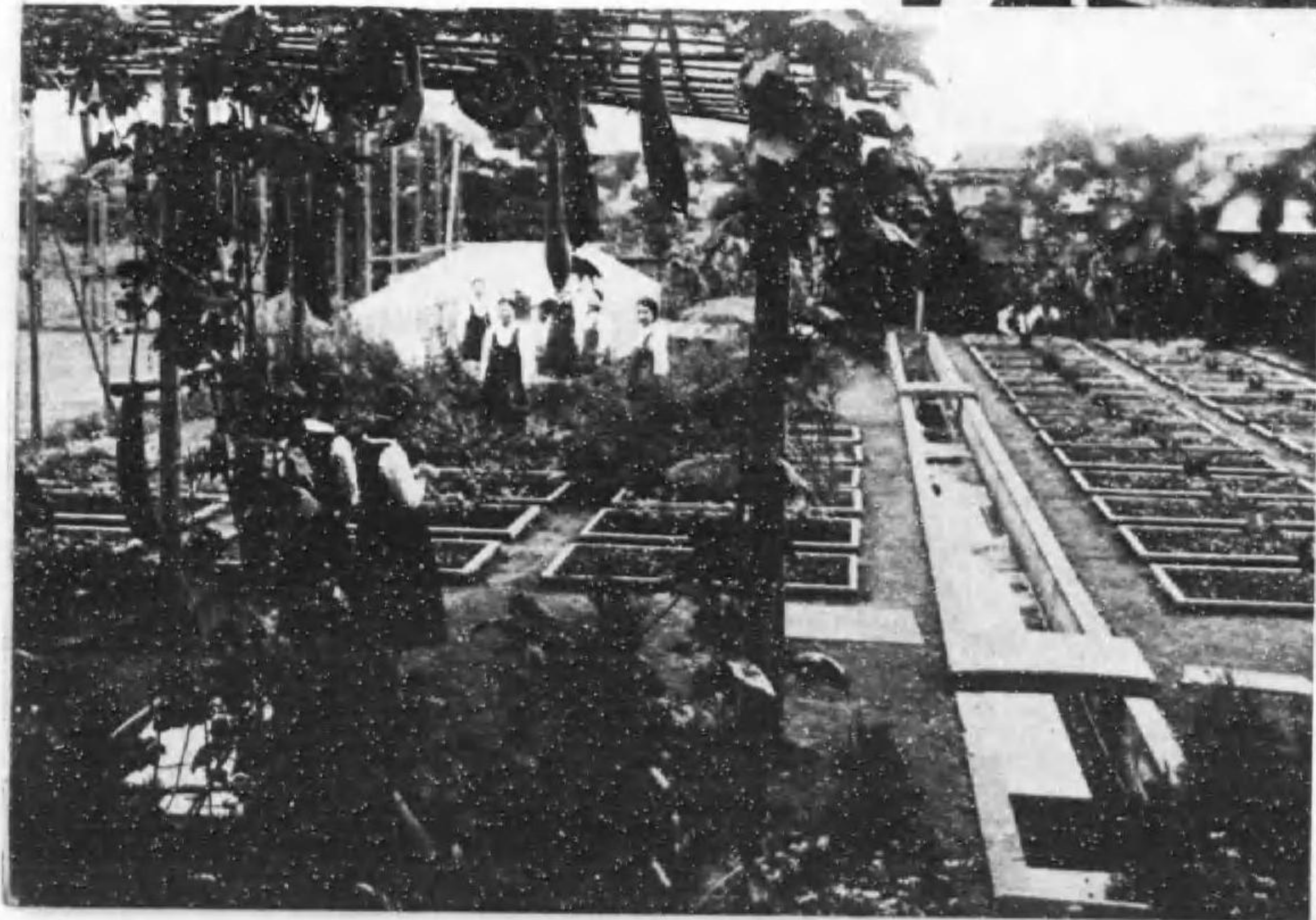
旅行



樂水莊



湖寮室



園藝場



祭魂



理科室



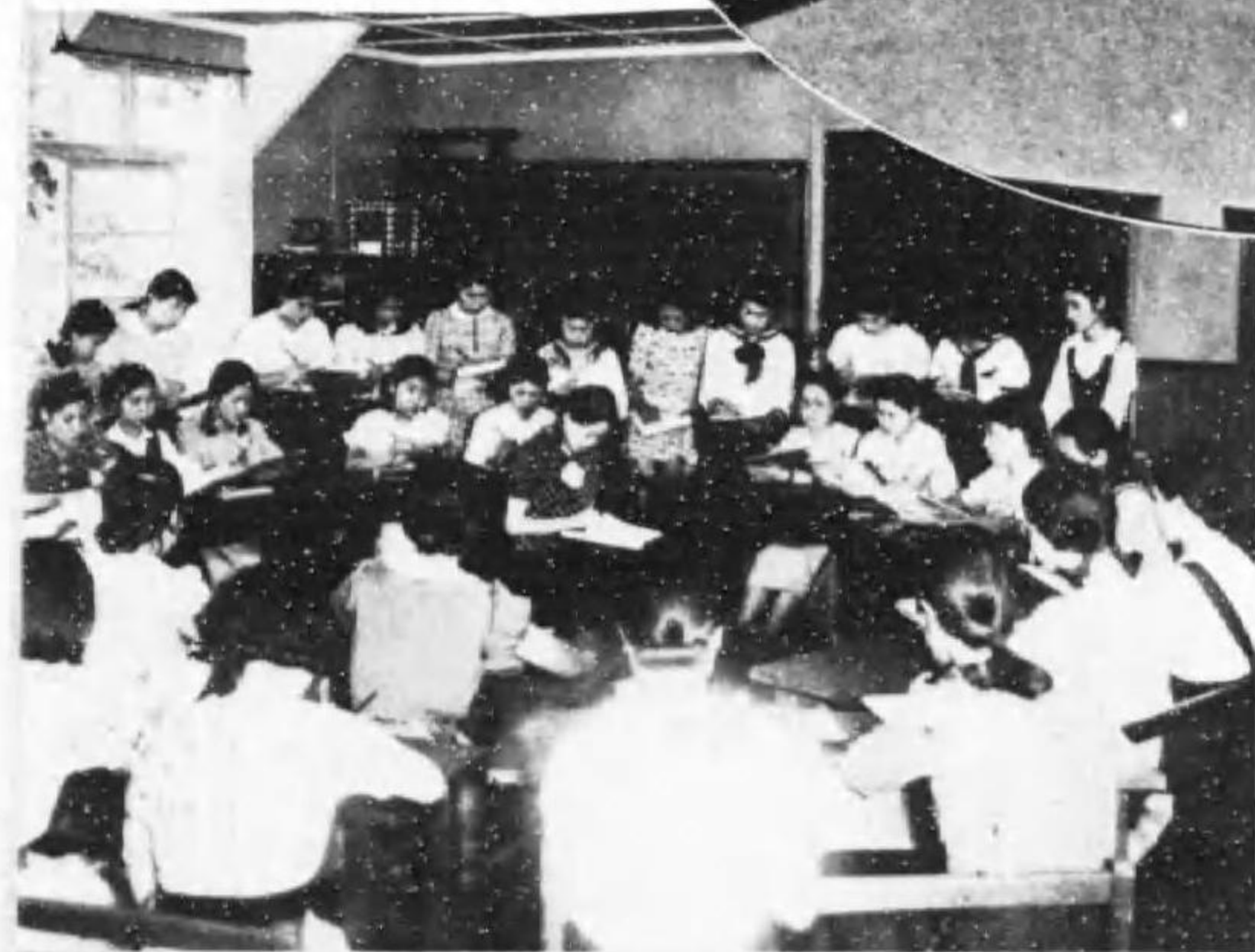
屋內體操場



圖畫室



習實育保

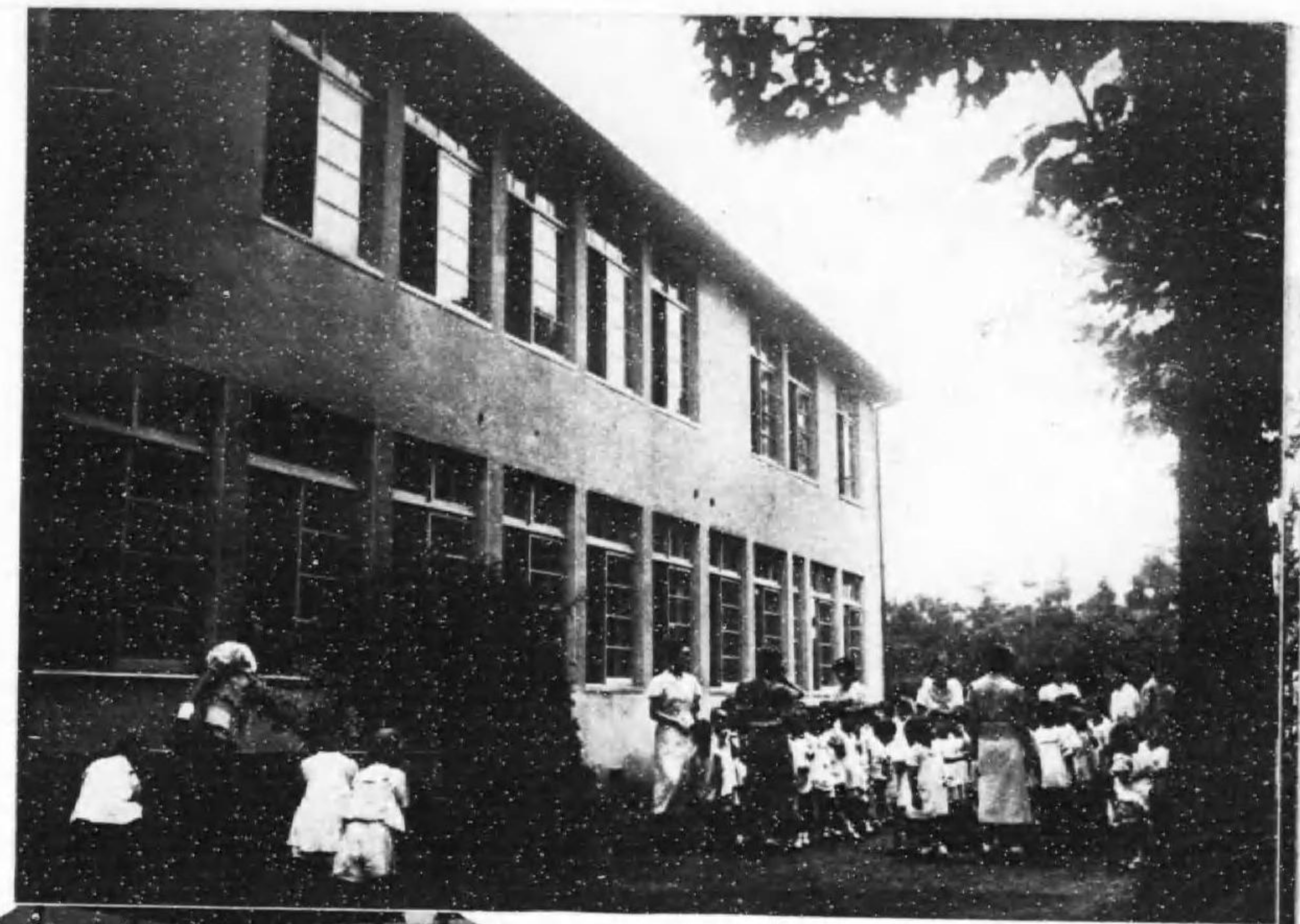


寮きつかあ

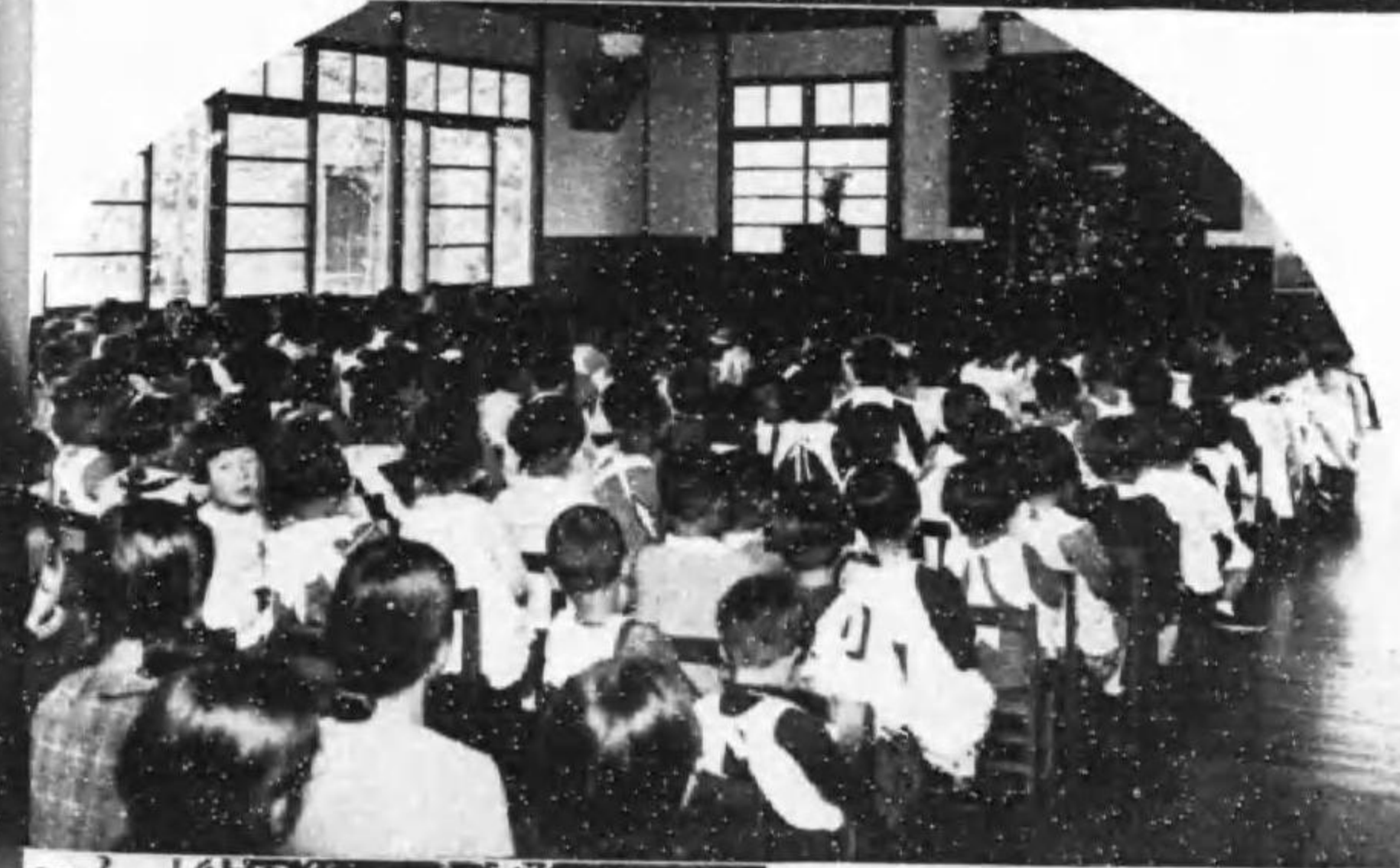
寫
生



旅
行



舍園稚幼



拜禮



七
夕



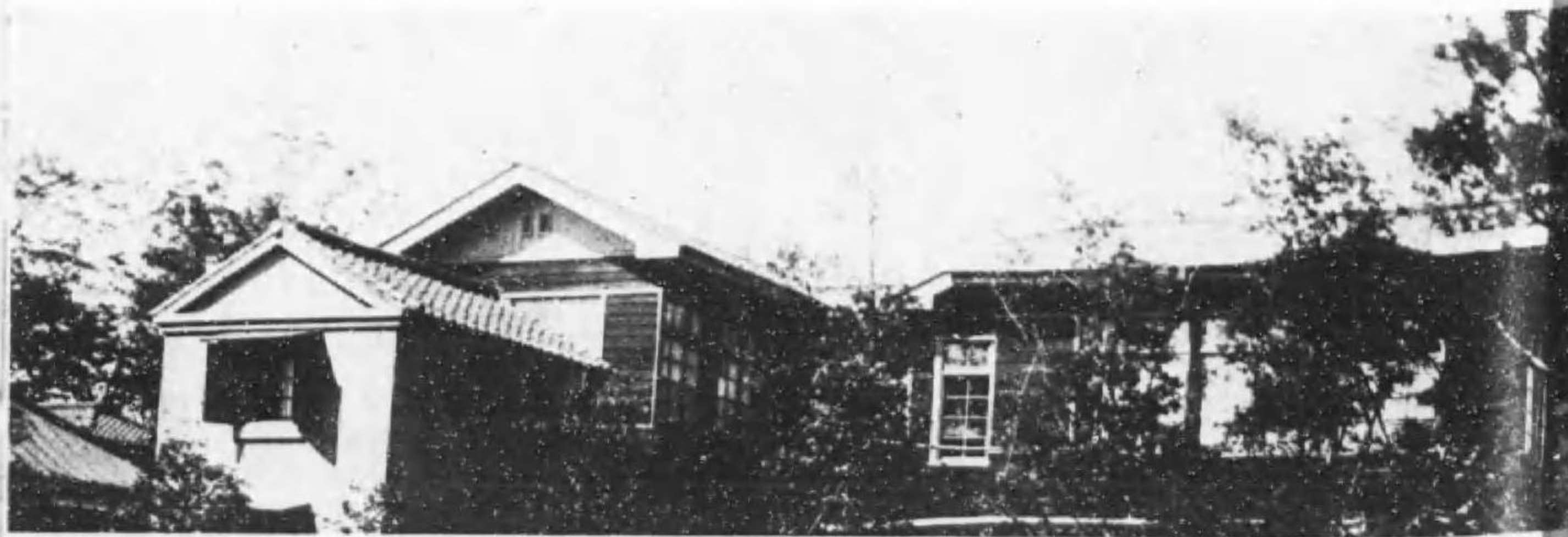
揚掲旗國



兒童圖書棚



兒童閱覽室



密教文庫

兒童健康相談



赤心坊審查會



赤心坊審查會
實心寺兒童健康相談所

受賞者

特 219
206



登々勢の營み

寶仙寺社會奉仕拾年誌



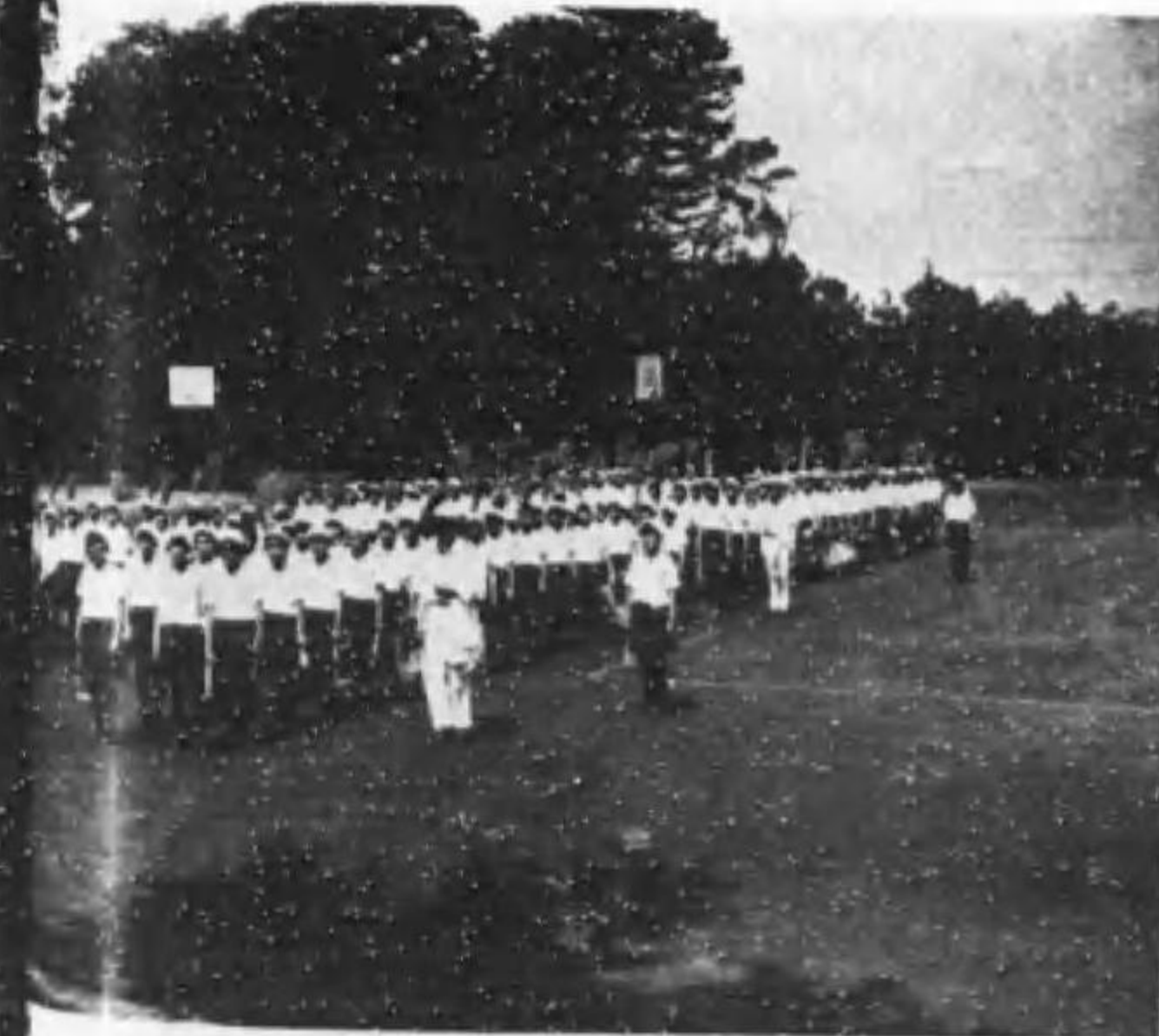
戰死者追弔會



防空演習

勤勞奉仕

軍需品縫裁奉仕



目次

回顧十年……………二

中野高等女學校

一、十年の歩み……………一四

二、職員……………一五

 い、現職員ろ、舊職員は、各學年度職員々數一覽

三、生徒……………三三

 い、各學年度學級別生徒數ろ、各學年度生徒移動表は、各學年度卒業生表

四、年中行事……………三五

五、教授訓練に關する諸施設……………二六

 い、自治會ろ、修辭部は、音樂部に、書道部は、繪畫部へ、體育部と、園藝部

 ち、生花部り、樂水莊ぬ、同窓會

六、宗教行事……………四三

 い、お花祭ろ、御影供は、恩德會に、兩祖大師降誕會ほ、お魂祭へ、お盆休と、土砂加持會

 ち、陀羅尼會り、のし餅供養ぬ、御衣奉迎る、涅槃會を、時局に對する施設

七、各學年度記事……………四九

 自昭和元年至昭和十三年

感應幼稚園

一、十一年誌	七四
二、職員	七七
い、現職員、舊職員	
三、園児	七八
四、年中行事	七九
五、諸施設	八一
い、母の會、同窓會、舞踊會、書字會	
六、各年度記事	八四
佛敎保育協會 保母養成所	
一、三周年を迎ふ	八六
二、職員	八九
三、生徒	九〇
い、各學年生徒數、卒業生就職狀況	
四、各學年記事	九〇
兒童健康相談所	
一、兒童健康相談所	九二

二、赤ん坊審査會	九四
三、母の會	九五
四、兒童遊園	九六
五、夏期學園並に映畫の集ひ	九六
密敎文庫附兒童圖書館	
一、二ヶ月の試み	九八

會計報告

一、四拾貳萬圓	九九
二、寶仙寺別途會計決算	一〇〇
三、寶仙寺通常會計支出金	一〇三
編輯後記	一〇三

寶仙寺公共事業

中野高等女學校

感應幼稚園

佛教會
育協會
保母養成所

兒童健康相談所

密教文庫

附兒童圖書館

寶仙寺

回顧十年

中野高等女學校長 富田 敦 純

一、澤柳先生に笑はる

君が多年の間女子教育に従事した経験を持つならば兎も角全く女子學校教育の経験もないのに、今頃普通の高等女學校を作る
と云ふのは無意味だ。夫も金持の道樂と云ふならば別問題だが、借金までして苦勞するなどは愚の骨頂だ。
とは、私が多年宿望の高等女學校を創立せんとして澤柳政太郎先生の所に相談に行つた時、第一に笑はれた語だ。そこで然らば
どんな學校を造ればよいのですか。と質問した。澤柳先生は

君が苟も社會教化の爲に女學校を作らうとするならば、假に女學校其物が成功しないにしても、女學校教育に一つの刺戟を與
へることが必要だ。換言すれば君が女學校を作つた爲に、他の女學校が幾分でも覺醒すれば、其の覺醒自體が既に大成功だ。
私は愈々解らなくなつた。素人の私が女學校を作る、其の女學校が他の女學校を覺醒せさる。實に不思議なことだ、私はそんな
高遠な理想の持主でもなく、またそれほどの人格者でもない。唯眼をバチクリさせて居る。澤柳先生は語を續けて
先づ第一に定員の少ない學校を作ることだ。今の中等學校は徒に定員の多いのを以て誇として居る。校長が生徒の顔も名前も
知らぬ中に卒業してしまふ。訓育も何も出來ない。唯智識を授けたと云ふに過ぎぬ。米國などは一クラス三十名から三十五名
を以て定員として居る。君が女學校を作るとしたならば、校長が全生徒をよく知ることの出來る程度、即ち全校の定員を最高

三百五十名位にすることだ。第二は月謝の外には寄附は勿論、材料費とか見學費とか云ふ名目の金を一錢も取らぬことだ。
即ち女學校に入學する當時に、卒業までに金が何程あればよいかを計算出來得るやうにすることだ。

夫から夫へと話は段々と微に入り細を穿つて日本の教育、特に中等學校教育の弊害を述立てられた。私は實に面喰つた。

先生、そんな理想的な人格教育を私が標榜したからとて、夫は私のやうな無力のものには事實出來ぬ相談です。

と斷つた。先生は

其の事は心配するに及ばぬ。私は君を知ること既に三十餘年である。私が毎週一回若くは二回行つて萬事指導してやる。
との御親切な御言葉を頂いた。

二、増上寺か淺草寺か

私が寶仙寺住職となつたのは今より二十五年前である。其の當時は寶仙寺の一ヶ年の總收入が驚くなけれ金參千圓である。
そこで私は、住職三年米食はず、と云ふ諺を如實に實行した。寶仙寺は朝食は汁と澤庵二切、夜は菜一つで澤庵もない。私はせ
めて澤庵四五切を食べたかつたのであるが、そんな贅澤な考を持つやうでは此の寺は持ち切れぬと我慢して居つた。

所が住職の翌年我が中野高等女學校の東方の畑を坪當り壹錢で九十六坪宅地に貸した。寶仙寺の所有地全部が壹坪壹錢で貸し
得るとすれば、收入は現在の八倍に増すのだ。それこそ大成金だと、大層喜んで、お祝の御神酒を鎮守のお稻荷様に上げ、お下
りを頂いて陶然と酔うた。是れが抑の始で遂に桃園町の一萬五千坪の畑を宅地に貸付けようと云ふ無謀な計畫を立てた。檀徒總
代から猛烈に反對されたが

若し此の計畫に失敗すれば住職を辭職致します。

とまで頑張った。一萬五千坪を三錢で貸すと一ヶ月に四百五十圓となる。そこで將來の寶仙寺の經營を如何にすべきかと云ふ問題に逢着した。第一に考へたのは淺草寺式である、我が寶仙寺の地勢は頗る二業地に適して居る。二業地は多く遊園又は神社佛閣のある所に發達するのである。所が我が寶仙寺の裏の東北には氷川神社があり、東方には塔ノ山公園（三重塔のある寶仙寺の飛地境内）其の間隔は三四町で鍋足なりになつて居る。そこで友人に戯れて

十年後になれば、寶仙寺の裏座敷から手を拍いて料理を取寄せるやうになるから、其の時は大いに奢るよ。
など云つたものだ。

其の時は寶仙寺の裏の一圍の中で、女學校の校舎敷地と今の園藝實習地とテニスコートのある所以外は、皆他人の所有地であつた。偶々今の感應幼稚園の敷地并に密教文庫の敷地が壹坪三圓五十錢で賣物に出た。之を購入することを檀徒總代に謀つたが容易に承知してくれない。止むを得ず私が自分で買入れて之を抵當にして金を借りることを計畫した。檀徒總代も私の熱心と無謀に驚いて、遠方の所有地を賣つて此の土地を買入れた。後に我が中野高女の運動場の所が賣りに出た。此の時は私が旅行中であつたが、何れまた前の筆法で私が騒ぐだらうと檀徒總代が氣をきかせて留守中に買入れてくれた。こんな譯で、今の寶仙寺の一圍が出来上つたのだ。

大正十二年の大震災に遭つて、その時熟考へさせられたことは空地の必要なことであつた。併し唯徒に遊園を作つて人を無意味に遊ばせると云ふことも面白くない。そこで愈々多年の宿願であつた女學校創立を思ひ立つた。

其の當時は私は女學校の敷地に充ててもよい積りで、本町通り五丁目約三千坪、宮園通り五丁目約三千坪の空地を持つて居つた。一日、澤柳先生を煩はして女學校の敷地として何れが適當であるかを實檢して頂いた。澤柳先生は現在の所を最良の場所として指定せられた。其の理由は

宗教の信念を持つ人格者を作らうとするならば、君が女學校で一週に一時間や二時間お話をするよりも、寧ろ寶仙寺の境内に遊ばせ、寺の高い屋根を見せ寺の鐘の音を聞かせ、寺の鳩の舞ふのを見せた方がどの位利目があるか知れぬ。教育は人爲的の訓育も大切だが、自然の感化、即ち知らず知らずの間に感受した力は實に偉大なるもので、此の自然の感化より得たる信念ならば如何なる事情に遭遇しても消え去るものではない。

このことであつた。私は茲に女學校を立て幼稚園を立て、圖書館を立てることを決心した。換言すれば寺を雜沓する參詣所として經營せず、靜寂の淨境として發展せしめんことを發願した。即ち我が寺は増上寺式に經營すべきであると定めた。

三、兒童健康相談所

私の第一に作つたのは今の感應幼稚園の所にあつた古い建物の中で、そこに遊びに来る兒童の健康相談を始めたのが、其の濫觴である。夫は今より十三年前であつた。尾山友三博士が一週に一度来て、兒童の健康の相談を受けた。中野高女に田中賢幹事が就職してから、横濱で知合ひの紺戸廉平博士を請して其の主任とし、毎土曜日に兒童健康相談を開始した。兒童の健康を向上させるには、優良兒童を世間に紹介することが急務であると云ふので赤ん坊審査會を始めた。此の赤ん坊審査會は他に類例のないと云ふよりは、他の會は主任者が時々變るのに、私の所では十年一日の如く全く主義も人も變らぬ。毎年五月審査會を續けて居る。夫が爲に大に世の信用を博して、今では東京第一、否、日本第一の赤ん坊審査會として紹介されるに至つた。毎年審査を受くる兒童は五六百名に過ぎぬが、東京附近の兒童で我こそと思ふものは皆集つて来る。

四、感應幼稚園

寶仙寺の庭に小供が遊びに来て庭を汚して困る。そこで今の幼稚園のある所に兒童遊園を作り、鞆を掛け、雨の日の遊び場に一の建物を作った。所が悪太郎が遊びに来て、夫がお山の大将となつて小供に悪い事ばかり教へるやうな傾向がある。夜になると大人が来て鞆に十二時頃まで乗る。青柳君を頼んで監督者としたが、朝から晩まで小言の言ひづくめである。どうしてもやり切れぬ。其所へあれ丈の建物と設備があるなら幼稚園にして貰ひたいと云ふ切な要求もあつた。併し、餘りに建物が貧弱なので少し躊躇したが、兎に角、感應幼稚園となすべく申請書を提出した。東京府の係員が来て見て、こんな完全なものかと云うて直に認可してくれた。十二年前の幼児教育は今から見れば文字通りの幼稚なものであつたのだ。

此の幼稚園は青柳義智代君が渾身の努力を續け、年々盛榮となり、満員で建物の狹隘を感じて居つたので、昨冬、中野區役所の舊建物を移して改築した。今日では幼稚園の建物としても有数の完全なものとなつた。

五、中野高等女學校の創立

澤柳先生が乘氣になつて萬事御指導下さるならば大船に乗つた氣で高等女學校を創立しようと決心した。大正十五年十月二十七日始めて檀徒惣代會議を開催した。寺の盛衰にも關する會議と云ふので、高橋平兵衛、田島嘉右衛門、飯田又右衛門、石森清兵衛、中野喜三郎、堀江恭一の各氏が集會せられた。或る總代はこれに反對した。其の説は

寺に金が有餘つて居るのではない。どんな理由があるにせよ、借金までして本堂でも庫裡でもないものを建築する必要はない。現任職は金使ひの名人で私共が寺の爲に貯金しようとすれば、何時も好名目を設けては使つてしまふ。その用途は實に立派なものだが、是れ丈の財産がありながら、年々金が残つて行かぬのは情ない。

とのことだ。私は

寺の庫裡や本堂はどんな愚僧の住職でも、皆さんが寄つてたかつて建てよくれるが、寺で必要のないと思ふものを建て得るものは私のやうな變り種でなければ出来ないことだ。

と諄々として女子教育が將來に寺院の隠れた基礎となり得ること、また萬一の場合女學校が無用の用をなすことを説いて、遂にしぶくしながら其の承認を得た。

つゞいて、寺の世話人會議を開き各方面の諒解も得たので、東京府に往つて出願書類の型などを寫得し、豊山派宗務所に出頭して補助金の内諾を得て、歸寺の途中私は水道橋の交叉點でトラツクのため右脚を切断された。幸に生命には別條はなかつた。私は直感した。私のやうな不埒千萬の墮落坊主をなぜ興教大師様は轢殺して下さらぬのか、或は私を生かして置いて下さるのは私に是から何かさせねばならぬ仕事があるのか、私は

脚断ちて御慈悲に泣くや春の朝

と感じた。所が私の家族は勿論のこと、法類も友人も兎角二三年は靜養した方がよいと勸めてくれる。檀徒の人々も無理をせぬ方がよい、女學校などは何時でも建てられるからと云うてくれる。併し私は興教大師様が私を生かして置いて下さつたのは、唯生命を大切に寝て居れとの思召でないことを堅く信じた。而して中野高等女學校の設立を繼續した。また一方には痛む足を引摺りながら檀徒の各家を訪問して寄附金を貰つた。私の考は住職として一度は自分の檀徒の佛壇に讀經して上げたいと思つて居つたから、此の機會に貧富の別なく遠近の差なく讀經して歩いた。或る貧民窟の間に一戸の檀徒を尋ねる爲に二時間を費した。勿論見付けて讀經し土産を約壹圓八十錢上げたとして、銅貨一つ貰ふ當のあるのではない。伴僧は寄附金を貰ふのが主であるのに、土産代をみすみす損をするのは考へものでせうと笑うた。

校舎建築の工事は無魔に進捗した。ところが認可申請を東京府で止めて置いて仲々文部省へ進達してくれない。其の理由は中

野附近は高等女學校が頗る多い。或は日本全國で最も多い所かも知れぬ。即ち寶仙寺を中心として東西南北に直徑二里の圓を畫くと、寶仙寺の側に堀越高等女學校を始め中野町だけに昭和、成美（今の經專附屬）府立家政がある。淀橋方面には府立第五、精華、關東、杉並方面には立正、城右、立教がある。而して定員に足らぬ女學校さへある。此の所に新校の設立は大に考慮せねばならぬとのことだ。丁度其の時は友人の安藤正純君が文部省の參與官であつた。愈々と云ふ時には安藤君を煩はす積りであつたが、各方面を訪問して叩頭再拜して漸く認可を取つた。

六、中野高等女學校の經營

やれ設立認可を受けて善かつたと思つた時は既に澤柳先生は不歸の客となつてしまつた。私は全く沖の小捨舟である。東せんか西せんか羅針盤がない。澤柳先生から推選せられた教頭は大變な手腕家であつたが、澤柳先生御在世の間は大手腕家もよいが澤柳先生の亡き後に大手腕家を入れることは或は學校の方針すら動かされる憂がある。そこで私が主となつて澤柳先生の方針を忠實に實行することに決心した。而して小學校々長で我國で第一に奏任官となり教育審査會の議員で、後に長野高等女學校長として教育界に名を噴々たる渡邊敏先生の下に、十有餘年教頭として勤務し眞面目な教育家として知られた赤沼滿次良君を招いて教頭に任じ教務一切を任せた。而して經營其物には私が直接當つたのである。私の女學校經營は武士の商法同様で、教育界のゴツが解らず、他から種々のことを聞かされてオヤ／＼と驚くことのみ多かつた。中野高女の創立當時は一年生二年生を共に二組づゝ募集する豫定で、先づ教員を任命して待つて居たのに、一年生は六十人で二組の定員には満員であつたが、二年生は僅かに十三名、一組の半分にも足らぬ、先づ第一に番狂はせを生じたのは經濟關係である。併し一たび宣言したことは一步も退かぬ私の強情は曲りなりにも其の主張を貫き、赤沼滿次良教頭以下、田中賢幹事、泉千代音楽教員等を始め諸教員の涙ぐましい努力に

依つて日一日と進展した。私は自分は實に理想的な女學校を建てたと竊かに誇つて居つた。所が世の人は更に之を知らない。東京府立第一高女市川校長に此の事を話したらば、夫は新宿停車場にでも女學校名を大いに廣告し給へと云はれた。まさかそんなことは出来ぬと云うた所が市川校長は、君そんな事では駄目だ。東京の新聞に三越が廣告を出して居るではないか。新設の學校が廣告するのは當然だと笑はれた。夫が三年後には漸く存在價值が明らかとなつた。その存在價值を向上する爲に私は最大の努力を盡した。或る人から、寶仙寺の住職は寺より女學校の方が大切らしいとさへ非難された。併し私は自ら信ずる所があつて十年一日の如くその經營を怠らなかつた。

七、佛教保育協會保母養成所

佛教保育協會が設立せられたのは今より十年前で、會長には安藤正純君、副會長は關寛之君と私が就職した。私は中野高等女學校を創立する趣旨書の中に、將來出來得るならば中野高女には保母養成所と社會婦（是は獨逸にはあるが日本にはない）養成所を併置したいものと書いて置いた。恐らく此の趣意書が因をなして私が副會長に推されたのかも知れぬ。

元來、佛教家は常に後手のみ打つて居る。基督教では二十年前から幾多の保母養成所を持つて居るのに佛教側は一つも持つて居らぬ。故に佛教主義の保母があつても之を標榜する機關がない。そこで宗教的に分類すれば基督教の保母と其他の保母と云ふやうな觀を呈し實に佛教の面目にも關する問題である。私は佛教保母の中央機關としても其の養成所の必要なることを痛感して居つた。佛教保育協會も稍、私の所見と同じやうなものがあつて、其の設立當時より養成所の必要を感じ毎回々々議題となつた。併し先だつものは金で、その金がないから何時でも御流れとなつて居つた。保母養成所は必ず幼稚園と併立しなければならぬが、さてそんな廣い土地を持つて居る所もなければ、また年々不足する經費を補ふ人もない。そこで私に引受けて設立してくれと再

三再四依頼されて、及ばずながら引受けた。その始は各宗派に入學者を権利として割當て、貰ひたいと云ふ要求であつたが、愈々開所して見ると割合に生徒が少いのみならず佛教保育協會の保母養成所であるから、普通の保母教育の外に佛教だけが餘分に重加されるわけである。又看板の手前上特に優秀の保母を養成しようとするため、音楽や繪畫や手技の素質に乏しいものは修學に堪へられぬものすらある。併し幸に全國の幼稚園に我が養成所の保母の需要を感じて三十人の卒業生に對し四十五人の備入の申込がある。遠からずして一大飛躍の時が來ることを堅く信じて疑はない。

八、密教文庫

新義眞言の加持説を創めて唱道し、高野山の大傳法院を根來山に移轉して新義眞言の獨立を名實共に完うせられた頼瑜僧正の六百年忌、豐山派の初祖たる專譽上人の三百年忌は明治三十六年即ち日露開戦の前年であつた。私は其の記念の爲に自ら主唱して音羽護國寺境内（今の藥王寺のある處）に記念文庫を建設した。而して此の文庫は豐山派は勿論一般の圖書も蒐集した。ところが、其の文庫は不完全な煉瓦造であつた爲に關東大震災に崩壊し、貴重の書籍もあのださく紛れに何れへか紛失してしまつた。私はこんな事なら寧ろ一箇所に集積して置かなければ、貴重の書籍が紛失せぬものと思つた時、遺憾千萬と云ふよりは、寧ろ申譯ないことをしたと、頼瑜僧正と專譽上人に涙を流してお詫した。

大震災後、何とかして今少し完全な圖書館を建てたいものだと思つて居つたが、どうしても其の機會がない。府道の第二環狀線が塔ノ山の附近に出來ると相當の土地の賣上金が入るから、其の金で、塔ノ山に完全な圖書館を建設したいものだと思つて居つたこともある。併し第二環狀線は一年延び二年延び更に出來ぬ。中野高等女學校の借金を早く返してしまつて、寶仙寺の庫裡を改築しようなどと云ふ檀徒もあり、また、今の住職は寺以外のことに金を使ひ過ぎると云ふ非難の聲もあり、左馬右願し

て居る間に世の中は益々不景氣となり、私は豐山派管長に擔ぎ上げられ、其の儘となつて居つた。所が寶仙寺境内の表門の西方の中野區役所が他所に新築移轉せられることになつた。三十何年無償で土地を貸與して置いたので、其の建物を社會公共事業に使用の目的を以て寶仙寺に無償下附せられた。そこで直に之を他に移轉しようとしたらば、中野警察署改築の爲に高壓的に借りられ、漸く昨秋開渡されたので、其の舊い方の建築物は感應幼稚園の改築に使用し、其の新築の部分と石藏とを移し之を密教文庫と稱し石藏を書庫とし、是に私の蒐集した中野高等女學校の書物を大部分入れ、他の建築物は兒童用に當て、一階は兒童健康相談所に、二階は中野喜咲殿から寄附された圖書で兒童圖書館を開設した。私は此の密教文庫を活用して、曾て頼瑜僧正專譽上人の爲に造つた記念文庫のやうな意味を持たせたいと願つて居るのである。興教大師様の八百年御遠忌は四年後に來るのであるが、支那事變の非常時の今日どうすることも出來ぬ。若し不幸にして私が亡くなつたならば、後の人は私に此の志のあつたことを善く記憶して居て貰ひたい。

九、慚愧の外ない

私の計畫は、現在のやうなこんな貧弱な教育事業や、社會事業で満足するのではない。少くとも前に述べた諸事業は今頃は隆たる勢を以て世を益し人を救ふ豫定であつた。所が夫が物質的方面も精神的方面も全く失敗に歸し終つた。先づ物質的に云へば私の中野高等女學校を建てた昭和三年頃は、一時暴騰した宅地の地代は餘程下つて來たにせよ、まだ世の中の不景氣は夫れほどでなかつた。のみならず、其の當時は寶仙寺の地代の収入は約四萬五千圓であつて、公租と豐山派宗費が約三千五百圓である。即ち地代の収入の約十二分の一、即ち地代の一ヶ月分が納税金であつた。而してまだ宅地とならぬ田畑が壹萬餘坪あるので之を坪當り金貳拾錢に貸附ければ貳萬四千圓となる。されば十年後には地代の總額は約七萬圓となつて其の十二分の一は金六千

圓弱である。假に租税等の納金を壹萬圓と見積つても十年後には、六萬圓の金が寶仙寺に残る譯だから、創立當時よりは約二萬圓弱の多額になる。其の金は社會事業や教育事業に振向けられるものと信じて居つた。所が年々歳々不景氣は深刻となり、中野町は東京市に編入せられて、吾々町民は旗行列をして御祝をしたが、租税は急に町時代の倍額となつた。而して青梅街道が改修されたので地益負擔金を地主も借地人も徴收せられることになつた。其の地益負擔金は借地人から見れば地代を値上されたと同様の結果となり、地主としては地代を夫だけ減ぜられたと同様である。愚圖／＼して居る間に十年は夢の間に過ぎた。而して本年は約七萬圓の地代収入に對して公租と宗費で約貳萬七千圓を納金せねばならぬ。即ち地代の約四ヶ月半を納金せねばならぬ。換言すれば十年前に四萬二千圓だけ寶仙寺で使用して居つたものが、十年後の今日約同額の四萬三千圓である。つまり寶仙寺の使用する金はたつた一千圓だけ十年間に殖えたに過ぎぬ。十年前の物價に比較して是でやり切れるものではない。私は財政のこととは全く一場の夢であると云ふ感じの外何物もない。

次に精神的方面を顧みれば實に慚愧に堪へぬのである。中野高女創立當時の二年間は設備の充實并に寄附金を集める爲に其の大部分の時間を費して、漸く一片付になつたから、愈々中野高女に専心従事した。僅かに二年にして無理に豊山派管長に擔ぎ上げられた。而して之に四年間を費した。こんな事で私が中野高女に居る時間は割合に少かつた。故に創立當時標榜した

母の愛は佛の慈悲なり

の標語だけは稍々其の倂を續くることを得たが、個性教育の標榜は全く失敗に歸して居る。唯強ひて求めれば、私は他の私立學校に行はれる弊害を除かんが爲に奮闘した。換言すれば教育屋、學校屋のやることを全教職員に行はしめぬため、或る人々には冷酷であるとか、全く世間並のことが解らぬとか非難されながら、教育界の廓清の爲には涙を振つて馬糞を斬る底の悲劇すら演じた。併し十年後の今日何程の効果が齎されたらう。のみならず、私のやうな古い型の人間、即ち現在に重きを置かずして將來

の理想のみに奔るものと、現代の多くの人々とは全く所見を異にするものすらある。之を思ひ彼を察すれば、私の食ふものも食はず飲むものも飲まずに精進努力した結晶は路傍の磊々たる一石塊に過ぎぬものであつた。是れ皆、私の人格の小さい不徳の致す所で、何とも世人に對して申譯がないのである。

x

x

x

最大最善の努力を盡くした女學校すら此の如くである、況や其の他に於てをやである。感應幼稚園と保姆養成所は稍々型が出来たが密教文庫の如きは漸く形が出来ただけである、第一に開始した兒童健康相談所は始めは感應幼稚園に寓居し、次には中野高等女學校に寄宿し、今日は密教文庫の半分を使用して居ると云ふ情ない状態である、棒ほど願うて針ほど叶ふの謬もあるが、思ふやうにならぬは實に憂世である。

私は昨夏八月十五日の夜、友人を夢に見たと云ふ夢を見た。生れて始めてこんな二重の夢を見た。翌朝

我が友を夢に見たりと夢に見し其の朝思ふ此の世も夢か

と書いた。世の人は或はお世辭的に私の事業を讚美するかも知れぬが、私はたゞ／＼

相濟まぬ

愧入る

と云ふの外、何物もない。

昭和十三年九月十五日

x

x

x

中野高等女學校

一、十年の歩み

生れた赤ん坊も十年経てば小學校の三年生で肩を怒らして跳ね廻つて居る。本校が昭和三年の四月に開校した時は一年が二組、二年生は一組と云ふ淋しさであつた。第一回の記念日即ち昭和四年の一月には十七日より二十日まで中野區に於ける今昔展覽會とも稱すべき、中野町史の史料并に現在名士の筆蹟や、物産等を陳列した。其の時作つたのが中野町史年表である。創業の際の意氣込はまた格別なもので、陳列品が町民の同情で日々に増して来る。最後の日に持込まれたものは陳列が間に合はぬので三四人の職員はとうとう徹夜してしまつた。

開校三年目に四年生が出来たので割烹室の設備をする爲に、東京の各高等女學校を見學して廻つた。其の時は既に本校は優良の女學校として其の存在が頗る明らかとなつたので、設備の足らぬ女學校は語を左右に托して其の割烹室を見せることすら斷つた。第一回の卒業生を送り出したのは云ふまでもなく滿四年の後である。其年には林博太郎、横田秀雄、中村不折、權田雷斧、本野久子の各位を顧問とし、高楠順次郎、加藤咄堂、高島米峰、神崎式作、結城素明、竹越竹代等の二十餘名の方に賛助員を依頼した。其時富田校長は已むに已まれぬ宗派事情の爲に豊山派管長に就任せられた。此の第一回の卒業生を出した時が、財政上にも最も恵まれた時であつた。其の後富田校長が管長であつた爲に弘法大師一千百年御遠忌には本校は光榮ある種々の役割を勤むることを得た。今より三年前には私立學校としては理科の設備が優良であると云ふ評判で、本校に私立高等女學校協會の理化研究會が開かれた。本校としては今は何の不足もない設備と人とを以て、茲に十周年の祝典を舉ぐることを得るを喜とするのである。

二、職員

い、現職員

昭和十三年四月現在

出身學校名	就年月日	擔任學科	毎週時數	擔任事務	職名	氏名	本籍
哲學館	昭和三、四、一	修身	四	教務主任	校長	富田 敦純	東京
東京高師 數學專修科	同	修身、數學	一〇	教務主任	教頭	赤沼 滿次良	同
東京外語 獨語科	同	公民、英語	四	庶務會計主任	教幹	田 中 賢	同
東京 音樂	同	音樂	一七	庶務會計主任	教諭	泉 千代	同
實踐專門部 英文科	同	英語	一八	庶務會計主任	教諭	古 幡 敬	茨城
東京女高師 理科	四、四、一	數 學	三三	庶務會計主任	同	小口 喜代子	長野
大正大學 史學科	五、九、一	歴史、地理	二二	庶務會計主任	同	榑 田 良 洪	千葉
大正大學 史學科	六、四、一	歴史、地理	四	庶務會計主任	同	富田 純 雄	東京
實踐專攻科 家政科		家事裁縫	一七	庶務會計主任	同	本 田 ス ミ	同

日本大學商學部經濟學科	六、四、一	公民、國語	一七	三公東級科 擔任主任	教諭	阿部 稻雄	長野
東京家政專門	一〇、四、一	家事、裁縫	一七	三西級擔任	同	矢野 茂子	東京
日本體育會高等科	一〇、四、三	體操	一九	體操部 擔任主任	同	菅野 信夫	山形
大正大學國文科	一一、四、一	國語	一一		同	富田 道敷	東京
東京高師物理化學科	一一、九、一	理化、數學	二〇		同	木全吉之丞	同
立正大學高等師範科	同	國語	二二	二國語科 擔任主任	同	淺川 求	熊本
和洋女子專門	一二、四、一	裁縫	一七	二西級擔任	同	徳増 吉子	愛媛
早稻田大學英文科	三、四、一	英語	一〇		託教 囑授	田中 孝一郎	東京
東京外語獨語科	同	習字	一〇		同	日高 智子	同
女子學院	同	洋裁	四		同	富永 久良	熊本
米國南加裁縫	六、四、一	博物	一二		同	入來 重盛	鹿兒島
東京高師 京都帝大理科	八、四、一	教育	四		同	山田 榮	福島
東京府立園藝 研究科	同	園藝	四		同	秋山 朝造	東京

東京美術 圖書師範科	八、九、一	圖畫	八	繪畫部	囑託授	菅野 廉	東京
小笠流 家元	九、二、一	作法	六		同	小笠原 貞	同
東京女子體操音樂	一三、四、一	體操	一二		同	高山 郁枝	石川
中野高女	一三、四、一			庶務會計	書記	田中 一三	栃木
東京帝大醫學部	三、四、一			購買部務	囑託務	加藤 公	東京
東京女子醫專	五、四、一				校醫	紺戸 廉平	宮城
東京齒科醫專	同				同	山本 杉	新潟
池之坊研究會 長	同	生花			囑託外	河野 幸三郎	和歌山
小島文茂 門下	同	生花			同	野々村 徳子	宮城
宮城道雄 門下	九、四、一	箏曲			同	上野 恵子	東京
伊太利ニテ マンドリン及作曲研究	一一、九、一	合唱指揮 ドリン及ギタマン			同	田中 常彦	同
東京音樂	一二、五、一	ピアノ			同	田中 堯子	同
	三、五、一				暖房 機關士	岡部 啓治	福島

	三、四、一					使丁	塚田長十郎	長野
						同	塚田わり	同

ろ、舊職員

出身學校名	就職年月日	退職年月日	年在ヶ月職	擔任職務學當科時	退職名時	氏名	本籍
東京女子醫專	三、四、一	五、三、三一	二、〇	生理衛生	校醫	川上たかし	長野
東京女臨高教師	同	五、二、二一	二、九	地理、歴史	教諭	酒井晴生 (元秋山喜美枝)	静岡
千宗室茶道皆傳	六、四、一	七、三、三一	一、〇	茶道	嘱課託外	森谷源一郎	石川
東京高師體操臨教	五、四、一	七、五、二五	二、二	體操	嘱教託授	永島宗吉	福島
ハイパー下大學	同	同	同	園藝	嘱課託外	恩地剛	東京
九州帝大農學部	三、四、一	八、三、三一	五、〇	博物	嘱教託授	小寺駿吉	岐阜
東京帝大文科	四、四、一	同	四、〇	歴史	同	宮崎榮雅	奈良
早稻田大學國文科	六、四、一	同	二、〇	國語	同	松林竹雄	長野

出身學校名	就職年月日	退職年月日	年在ヶ月職	擔任職務學當科時	退職名時	氏名	本籍
東京美術	三、四、一	八、七、三一	五、四	園藝	同	田口聖燭	
東京女高師家事科	五、四、一	同	三、四	家事裁縫	教諭	小林鍾吉	東京
小笠原禮法教場		九、二、四 (死七)	〇、一一	作法	嘱教託授	青山仙子	静岡
東京帝大	五、四、一	九、三、三一	四、〇	校醫	校醫	大木健治	
豊山大學	三、四、一	同 (後死七)	六、〇	幹事	幹事	野々部惠舜	愛知
東洋大學專門部	同	同	同	國語	教諭	北條淨賢	東京
市俄古大學文學科	五、四、一	同	四、〇	英語	嘱教託授	川邊窓	埼玉
東京裁縫	三、四、一	一〇、三、三一	七、〇	裁縫	教諭	安孫子こう	山形
日本體育會女子部	同	同	同	體操	同	柴山咲枝	千葉
東京女高師文科	九、四、一	同	一、〇	國語	同	光藤初音	愛媛
東京高師研究科	七、六、八	一〇、四、三二	三、一一	體操	同	岩田巳代治	埼玉
東京女高師理科	六、四、一	一一、三、三一	五、〇	數學	嘱教託授	田坂郁枝	新潟

年度	三	四	五	六	七	八	九	〇	一	二	三
女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
校長	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教專	六九	七〇	七七	七七	九六	八六	八五	八六	七四	六三	五三
員任	一五	一七	一四	一四	一五	一四	一三	一四	一一	九	八
囑教	四五	三四	三八	四六	二五	四六	四八	四八	二六	一五	一四
託授	九	七	一一	〇	八	〇	一一	一一	八	六	五
囑課	三一	二一	二一	二一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
託外	四	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二
書記	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
校醫	二	三	三	三	三	四	四	四	四	二	二
使丁	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
總員	一六	一五	一五	一六	一六	一五	一五	一五	一四	一四	一三
員	三七	三六	三七	三六	三四	三六	三七	三九	三一	二二	二〇

は、各年度職員々數一覽

各年度四月一日現在

中野高女	東京女子體操音樂	小笠原家元	東京女高師家事科	中野高女	東京音樂	東京女子體操音樂	東洋大學專門部	早稻田大學國文科	東京文理大	中野高女
一、八、三一	一、九、一	九、二、四	八、九、一	一、三、三一		一〇、四、一	五、四、一	三、四、一	一〇、四、一	九、三、三一
一三、三、三一	一三、三、三一	一三、八、三一	一三、三、三一	同	同	同	同	一、八、三一	一一、七、九	一一、三、三一
一、七	一、七	三、七	三、七	〇、五		一、五	六、五	八、五	一、四	二、〇
購買部務	體操	作法	家事、裁縫			體操	同	國語	理化、數學	
囑事託務	教諭	囑教託授	教諭	囑事託務	囑課託外	同	教諭	囑教託授	教諭	囑事託務
伊東三四	曾田マサ	小笠原貞	山岡達子	高橋ミツ	森乙	丸山ミツ	高野高野利	宮本隆運	原田長雄	宮島初音
東京	東京	東京	三重	東京		新潟	同	長野	東京	東京

三、生 徒

い、各學年度學級別生徒數

年 度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		合 計
	東	西	東	西	東	西	東	西	東	西	
三	三〇	二九	一一	二七	一三	一六	一六	二〇	二〇	二〇	七〇
四	三四	三四	二八	二七	一三	一六	二四	二〇	二二	二二	一三六
五	三四	三四	六六	三三	二五	二四	二四	二〇	二二	二二	一九九
六	三五	三五	七〇	三三	二六	二四	二四	二〇	二二	二二	二六九
七	四一	四一	八二	三五	三七	二六	二四	二二	二二	二二	三二九
八	三六	三六	七二	四一	三七	二六	二四	二二	二二	二二	三四七
九	三九	三九	七二	三九	三七	二六	二四	二二	二二	二二	三三五
一〇	四〇	三九	七六	三七	三七	二六	二四	二二	二二	二二	三四九
一一	三九	四〇	七九	三八	三七	二六	二四	二二	二二	二二	三三七
一二	四〇	三九	七九	四〇	三八	三七	二六	二四	二二	二二	三七四
一三	四〇	三九	七九	四〇	三八	三七	二六	二四	二二	二二	三八一
計	二九	二九	五九	二七	一三	一六	二四	二〇	二二	二二	七〇

各學年度學年始現在

ろ、各學年度生徒移動表

年 度	入 應 募	轉 入 學	進 級	落 第	計	退 學			計	現 在
						轉 學	病 氣	死 亡		
三	七〇	一〇	六七	一	七五	一	一	〇	五	六八
四	六八	一〇	六七	〇	一四六	一	一	〇	六	一三二
五	六七	一六	一三二	〇	二一五	一	一	一	七	一九九
六	七〇	一五	一九九	〇	二八四	一	一	〇	一六	二六四
七	八二	四	二四三	四	三三三	二	二	一	一四	三一九
八	七〇	一	二七一	六	三四八	三	三	一	二五	三二七
九	七六	七	二五五	四	三四二	五	四	一	一五	三四七
一〇	七九	九	二七一	五	三六四	五	三	一	一七	三四七
一一	七九	三	二八七	二	三七一	四	三	〇	一八	三六三
一二	七九	三	二九七	二	三八一	七	一	二	二二	三六九
計	七〇	五	六七	一	七五	一	一	〇	七	六八

は、各學年度卒業生表

年 度	在 籍	卒 業	落 第	卒 業 後ノ 志 望		最初ヨリノ 在校生百分比
				上級學校入學	實務從事	
六	一七	一七	〇	九	四	四七・一

計	一〇九八七	四二	四二	〇	〇	一五	六四・四	九〇・四
	一一	六四	六一	一	二九	三一	八〇・九	八五・九
	一〇	五二	五一	一	二〇	二二	六一・二	八〇・四
	九	五九	五八	一	二六	二二	七四・三	八九・七
	一	六五	六四	一	三五	二五	七六・八	九八・四
	二	六七	六六	一	三七	一九	八〇・六	八七・九
	三六六	三六二	四	一七五	四九	一三八		

二四

閑話の一

或人が數年前に来て、中野高女の年々不足額は何萬何千圓ですかと問はれた。私は建築費は別だが、年々の經常費は中野高女だけならば近頃では二千圓とは不足致しませんと答へた。或人頗る不審さうな顔をして、そんなことはありますまいと云ふ。私は公共事業全部ならば年額七千圓以上支出して居りますと附け加へた。所が或人は第一地代許りでも

大變でせうと云ふた。私は地代は自分の寺の所有地だから勘定に入れて置かぬ。成程約五千坪の地代は坪當り貳拾錢として一ヶ月で壹千圓だ。さう計算すると地代だけで一ヶ年壹萬貳千圓不足になる。土地を全然持たぬ人と何萬坪と持つて居るものとは出發點が違ふ。昔の長者の娘が小判の一盆位は何處の家にもあるだらうと云うたとは嘘のやうな本當の話だと思ふ。

四、年 中 行 事

第一學期
 四月七日 入學式
 八日 始業式 新舊生徒對面式 お花祭
 二一日 弘法大師御影供
 二九日 天長節祝賀式
 五月上旬 赤ん坊審査會
 中旬 遠足 三寶寺 善福寺 吉祥寺
 六月一日 修學旅行
 五年 關西 八日歸
 四年日光那須三日歸三年箱根熱海二日歸
 一、二年 見學
 一、二日 護國寺兩大師降誕會
 一七日 本校兩大師降誕會
 七月上旬 第五學年生見學
 一五日 お魂祭
 一六日 お盆休
 二〇日 第一學期終業
 九月一日 第二學期始業

第三學期
 中旬 第五學年生見學
 保證人懇話會
 全校生見學
 校庭運動會
 一〇月一七日 全校生徒遠足
 下旬 明治節祝賀式
 一、二日 學藝會
 二、四日 興教大師御命日
 第一學期終業
 一月一日 一月一日祝賀式
 八日 第三學期始業
 一、二日 御修法御衣奉迎
 一、七日 創立記念祝賀會
 二月一日 紀元節祝賀式
 一、五日 釋尊涅槃會
 三月三日 お雛祭
 中旬 入學考査
 六日 地久節祝賀式
 二、三日 卒業式

二五

五、教授訓練に關する諸施設

い、自治會

自治會は本校々規の勵行と善美な校風の發揚とを目的として昭和五年七月設置したもので、委員は各學級二名とし、その任期を一ヶ年とする。自治會委員は各學年度の初に於て各學級三名づつを互選し、その中から學校長二名づつを委嘱し他の一名を補充員とする。第一學年自治會委員は第二學期の初に於て同一の手續を経て委嘱する。

自治會は毎月第二土曜日放課後に開催し教頭は顧問として毎會之に臨席する。第五學年委員は開會三日前に各學級提出の問題を整理し、當日は主宰者となつて逐一討議に付し、議決せられた簡條は之を決議録に認めて之を該學級に報告する。但し問題になつた事項が教職員に關するものであるときは決議を省いて教頭より直接に交渉することとし、又問題が一人の生徒若しくは一學級に限るものであるときは之も亦決議録に登載せずその學級の自治會委員から反省を促す。各學級から提出する問題は級擔任を顧問とし學級會に於て豫め討議し相當に洗煉せられて居り、又決議事項の實行については昭和十一年度より實施せる第五學年生徒週番がその徹底に努力するから本校の訓育は一段と向上しつゝある。

左に昭和五年度以來各學年度に開催せられた自治會の回数及決議事項の件数を掲げる。

學年度	回数	校規勵行決議件數	希望事項決議件數	合計
七	八	二一	三三	五四
六	八	四〇	二七	六七
五	六	六一	三三	九四

ろ、修辭部

修辭部は學藝會を以て其の主眼とする。學藝會は昭和四年十一月廿七日第一回の催があり、恰も創立第二年目である。爾後毎年同月十八日前後を期して行はれ、今や回を重ねて第九回に及んだ。かくて昭和五年一月十八日創立第二周年記念日に當つて學藝會を開催し、一般來賓の觀覽に供した。爾來毎年創立記念日にも開催し茲に第九回を経た。かくて年二回の學藝會に一貫せる精神は生徒の偽らざる平常の學課訓練の内容を大膽に、且卒直に發表せしめようとした事である。これが爲に生徒をして在學中一度は演壇に立たせ、兼ねては話術をも體得させようと常に努力して來た。

従つて其の選ぶ種目に於ても必ずしも一部に限定する事なく、廣く各種の方面を網羅し、正科は勿論課外の教科が設けられる毎に之を加へ、學藝の陶冶に資して來た。殊に必要に應じて特殊な種目の編成にも留意し、或は適切なる映畫等によつて教育の目的を果さうとした事もあつた。これが爲に其の科擔當の教師及生徒の指導と努力とは實に並大抵ではない。

また生徒の出演時間を見るに、自ら其の教材に依つて異なるが、音楽部に屬するものを除けば大抵二十分前後を普通とした。間、數十分の長きに及ぶものもあつた。多くは二人以上の出演に及んだ爲である。従つて種目編成の都合によつてまる一日を費した時があつたが普通一日の授業時間に該當するやうになつて居た。

八	七	一八	二一	三九
九	八	二四	九	三三
一〇	八	四〇	二三	六三
一一	八	五三	二八	八一
一二	八	五七	六八	一二五

第一回及第二回の學藝會はまだ本校も創立當初であり、他面全學年の完成を見なかつた時でもあり、十分其の眞價を發揮するに至らなかつたが第三回（昭和六年度）より學校も諸般に亘つて完成するに至り、學藝會も亦格段の發達をなし、昭和十年度以後音樂部にコーラスが加へられて、爾後回を重ねる毎に好成績を収める事が出来た。今や創立當初に比すれば、生徒の學科訓練及其の發表能力等諸般に亘つて特筆すべきものが見出される。殊に本年度の學藝會の如きあくまで生徒本位のものとし、其の學年にふさはしい内容を具へて居た。裁縫科の生徒の衣類及其の附屬品の調査の如き洗煉せられた口調と其の豊富な内容とは能く其の感銘を深くした。音樂に於ても伴奏指揮等に至るまで生徒本位となつて著しい進境を見せて來た。今後尙一層努力し、足りない所を補ひ、好いものは益々助長して意義深い學藝會を重ねて行き度い事を念願とする。

左に創立當初より十二年度秋季學藝會迄の種目を表示し参考とする。

種目	年度											
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二
身修	二											
公民												
國語	四	六	二	四	四	二	四	二	三	三	一	二
英語	二	七	二	二	二	二	二	二	一	三	一	二
歴史	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
地理	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數學												
博物	六	二	四	四	二	二	二	二	二	二	二	二
博物	四											
習字	一											
圖畫												
家事	一											
裁縫	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
教養	二											
音樂	四	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
獨唱	二											
合唱	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
樂器	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
作法	二											
體操	三											
外番	三											
計	三二	三九	三七	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二

は、音樂部

輓近文化の進歩に伴ひ音樂の社會的施設は之を十年前に比べれば著しく發達普及してラヂオ蓄音機等に依て各家庭に於ても亦種々の音樂を聴取しえられるやうになつた。従つて音樂に對する理解力を高めて是等雜多の音樂を取捨選擇し、その正しきものを採入れる能力を養ふことは目下の急務である。所が正課の音樂時間だけではこの目的を達成することは容易の業でなく、勢ひ課外の修練によつて正課の不足を補充することが必要である。

課外の音樂としては、昭和四年度以來今日に至る迄、毎年度十二月及一月に舉行される學藝會に於て修辭部と聯合して音樂の演奏會を開催して來たが、その他に就いては昭和七年度迄は特殊の希望を有する僅少の生徒に對しピアノを指導するに過ぎない狀況であつた。

昭和八年度に音樂部を設置し、ピアノの外にコーラス部を設け、六十名の生徒を選定して部員とし毎週土曜日放課後に約一時間合唱の練習を行はせた。この年は恰も弘法大師一千百年の御遠忌に相當したので部員は大師を記念する種々の會合に出席して盛に大師の讚仰歌その他を合唱した。

本部昭和九年以後の狀況は次の通りである。

年度	部名	部員	指導教員	毎週指導回数	練習用楽器数	授業料月額
九	ピアノ部	六〇	二	一	一	二
一〇	ピアノ部	六〇	二	一	一	二
一一	ピアノ部	六〇	二	一	一	二
一二	ピアノ部	六〇	二	一	一	二

十二年度には禮操場擴張せられ其一部にピアノ練習室三室新設せられたり

に、書道部

伸びゆく我が中野高女書道部が設けられてから早六星霜、此の間四五年生希望者に對し毎週一回宛課外教授を課して來た。初は人数も極く僅かでは物寂しい感がないでもなかつたが、年々部員も増加し、現在では八十一名に達してゐる。昭和十一年四月課外制度が改められてからは、出席の率が非常によくなり、自然その成績にも一段の進歩が見られる様になつた。書道部のみの發表は未だ出来ないでゐるが、全生徒の成績發表の一つとして、毎創立記念日に「書初」の展覽會を開くことにしてゐる。過ぐる昭和九年三月弘法大師一千百年の御遠忌展覽會には大師を偲びまつり、いろは歌の作品（中野区内各小學校出品）中野區在住名士の書畫、及び我が中野高等女學校生徒作品を多數陳列した。十一年七月當時二年生に書の構成法につき講習を行ひ、同年九月白木屋に於て開かれた私立高等女學校協會主催の書畫展覽會には、本校から掛軸三點を出品して衆目を惹いた。本年七月恰も北支事變勃發當初全生徒よりなる心經の寫經が行はれ、この中から今事變に戦死された方々の慰靈として捧げられたものも少くなかつた。十一月大正大學書道展に一七點の出品をし、その中の三點に銀賞、銅賞、褒狀が授けられた。今後とも一同益々精勵して眞の書を學び自らを培ふ一助としたいものと切望する次第である。

は、繪畫部

繪畫部は昭和七年九月創設せられ、昭和十三年九月に至り滿六ヶ年を算ふるに至つた。元來繪畫部は繪畫同好の人々が、教課以外に時間をさき、美術としての繪畫をより専門的に研究しようとする集りで、その研究内容も自然と教課としての實用圖畫より離れて、初歩ながらも純美術方面に目標を置き専門的段階を執りつゝ研究を進めて居

る。最初はパステル画だけであったが、八年度よりこれに木炭、水彩、油繪を加へ、その表現素材を廣く求め、各自の好みにより研究を行はしめることとした。尙十二年度から寫生材料費の一部として部費を毎月一圓宛納入することになった。勿論木炭畫は基礎的研究として入部當初一ケ年間誰でもしなければならぬことになつて居る。

部員も逐年その數を加へ十三年九月現在に於て四十名を算ふるに至つた。

一、學 習

- 一、時 數 毎週、木、金、土各二時間
- 一、内 容
 - イ、素材 パステル、水彩繪具、油繪具、木炭
 - ロ、畫材 風景、人物、靜物
 - ハ、觀賞 美術展覽會、畫集、繪畫雜誌、相互批評會及展覽會

二、行 事

- 昭和八年二月 光風會參觀
- 〃 十月 帝展參觀
- 〃 九年十月 二科展參觀
- 〃 十一月 奥多摩日向和田に寫生旅行、參加十五名
- 〃 十二月 一日より一週間第一回繪畫部展覽會を開催陳列作品九十點
- 〃 十年九月 十四日より一週間第二回繪畫部展覽會を開催、陳列作品百五十點
- 〃 十月 文展參觀
- 〃 十一年一月 十七日本校創立記念展覽會に際し圖書室に作品展示
- 〃 三月 學年末休暇を利用し、伊豆真鶴、熱海方面に一泊寫生旅行を行ふ、參加五名

- 昭和十一年四月 旅行作品展覽會を開く
- 〃 九月 廿一日より一週間白木屋に於ける東京市私立高等女學校協會主催圖畫習字展に五年生奥山良子、鈴木和子、須藤若菜の三名出品、各油繪十二號、大好評を博す
- 〃 十月 五日秋川溪谷寫生旅行を行ふ、この日は殊に三年生のみに限り五名
- 〃 十一月 文部省招待展參觀
- 〃 十一月 十五日より一週間第三回繪畫部展覽會開催陳列作品百三十點
- 〃 十二年三月 伊豆熱海網代方面に一泊寫生旅行を行ふ、參加七名
- 〃 四月 寫生旅行作品展覽會開催
- 〃 十一月 十三日文展參觀
- 〃 十一月 十四日瀧山丘陵に寫生旅行參加二十一名
- 〃 十三年一月 第四回繪畫部展覽會開催陳列作品百五十點
- 〃 三月 伊豆多賀、網代方面に一泊旅行を行ふ、參加二十七名
- 〃 四月 寫生旅行作品展覽會開催
- 〃 七月 廿五、廿六、廿七日秩父地方二泊寫生旅行を行ふ、參加三十名

ハ、體 育 部

一、指 導 方 針

正課に於ける方針は、文部省の教授要目に示された指導精神の遵守實行は勿論であるが、智育、德育と並行せる體育である事を特に主眼としてゐる。従つて、體育即生活をモットーとし、體育を通じての精神的鍛鍊を重視し、人格陶冶に遺憾なき様期してゐる譯であるから、正課外體育に於ても、全く是と同じである事は言を俟たない。本校の特質である生徒定員の少數である事からして、能力の大なる生徒をより以上に向上進展させるのは勿論であるが、それを標準とはせず、中等程度の能力者を標準として、全體的に向上せしめるのであつて、普遍的指導と言はうか、つまり體育の一般化を眼目としてゐるのである。従つて對外

の競技試合は、原則として参加しないことにしてゐる。

二、指導の實際

創立以來の記録を辿つて見るに、昭和七年頃より、一時體育的興味を一層大ならしめると言ふ見地より、左記の様な對外試合をした記録が擧げ得られるが、これに依つて戦へば勝てる見通しもつき、競技精神の涵養にも、興味の點にも大いに得る處があつた譯である。

- 昭和七年十一月 明治神宮奉祀女子體育大會に選手十數名を派遣
- 昭和九年六月 關東女學校體育聯盟競技會に籠球選手を派遣
- 十一月 明治神宮奉祀女子體育大會に於て籠球第二部優勝
- 關東女學校體育聯盟競技會に於て籠球第二部優勝
- 昭和十年二月 東京府市女子中等學校競技會に籠球卓球選手派遣
- 六月 東京女高師主催籠球大會に選手を派遣
- 關東女學校體育聯盟競技會に籠球選手を派遣
- 十一月 關東女學校體育聯盟競技會に於て籠球第二部優勝
- 一月 關東女學校體育聯盟競技會に選手を派遣 籠球第二部優勝

以上はその大略であるが、昭和十年の後半シーズンに於て選手制に代るべき指導案を作製して、翌十一年度より以前に戻つて全般指導を實施した。種目は籠球排球を主とし卓球庭球は特に希望する生徒のみに課し、全校生徒が、一様に體育部員となつて、自己の體位向上を目指して來たのであるが、左記に依つて、その大略を示す事にする。

- 一、競技を行ふ事に依つて自己の體位的向上競技精神の涵養をはかるは、勿論東西各級の融和親睦をはかり、更に校内對抗試合に依り各學年間の融和を計り、且は本校々風發揚の資とする。

- 二、各學年は一週一回以上、放課後一時間半乃至二時間半與へられた課目を實施する。
- 三、上級學年の體育部委員は、指導者を補佐して實際指導に當り、試合實施に際しては體育部委員の立案に依り、總べて自治的に行ふ。
- 四、土曜の放課後、各競技の規則、審判法、練習法等の研究と技術の練習とを、委員及有志とで行ふ。
- 五、配當表は左の通りである。

試合	第一學期	第二學期	第三學期	備考
籠球リーグ試合	籠球、簡易籠球	簡易籠球、籠球	簡易籠球、籠球	其他 ○各學年蹴壘球を每學年 ○卓球は全學年庭球は三年以上の希望者 ○試合は定期以外適宜實施
蹴壘球級對抗試合	籠球、簡易排球	籠球、簡易排球	籠球、簡易手球	
	籠、排球	籠、排、手球	籠球、手球	
	籠、排球	籠、排、手球	籠球、唱行遊戲	
	籠球、排球	籠、排、手球	籠球、唱行遊戲	

六、季節的體育

- 夏季寮 千葉縣八幡宿滿德寺(樂水莊)
- 登山 昭和十三年八月第一回實施
- スキー

スキー練習會記録

第一回	十年	自十二月二十五日	妙高原スキー場	参加十八名
第二回	十一年	自十二月二十五日	野澤温泉スキー場	参加十四名
第三回	十二年	自十二月二十五日	湯澤温泉スキー場	参加十六名

七、遠足

定期 春秋各二回(學校) 春秋各一回(學年會) 不定期 耐久行軍〔最短12軒以上〕 徒歩通學の獎勵

八、運動會

方針 體育學習の發展であると同時に在校生卒業生職員父兄幼稚園兒の渾然融和親睦の機會たらしめる

實際 秋季一回(大) 春季一回(小)

體育部委員會の原案に依り自治的に實施する

九、衛生體育

健康相談

毎週放課後二回校醫の診察に依り疾病の早期發見、罹病者の處置、寄生蟲卵の検査、其他校内衛生に就き相談し、體育の消極的方面の充實を期す。生徒の自覺、家庭との連絡に就いては、生徒手帳を利用して萬全を期する

清潔、整頓、換氣、除草。運動服、運動靴、セーターの制定

と、園藝部

本校に於ては、創立以來生徒に自然界に關する理解を深め、之に對する趣味を養ふと同時に、自ら栽培することに依つて不斷の注意とその作業上の容易でないことを知らせ、以て物資尊重、自然物愛護の精神を向上せしめようとして放課後全生を課して居る。

昭和三年度に於ては、校舎の周圍に約四十坪の地を劃し、その一部は模範觀賞花壇として職員その管理に當り、一部を模範用花壇として生徒にその栽培に當らせ、更に又運動場の北側幅三尺の地面を蔬菜園として特志の生徒にその培養に當らせることとした。

四年度には、更に運動場の南側幅三尺を區切つて苺園を増設した。

五年度には、新に園藝部を設立し、全生徒中より部員を募つて實習に當らせ、寶仙寺の本堂裏に二百四十坪の園藝實習園を新設した。園は一區劃長さ九尺幅三尺の實習地七十六箇に區分せられ、中央に長さ十九間三尺深さ一尺三寸のコンクリート貯水池があり、水道に依つて給水せられ、草花蔬菜類の灌水用の外、養魚池並に水生植物培養池として使用してゐる。尙、實習地の一隅には、器具舎も設置せられ、我が園藝部は大飛躍を遂げた。この年米國ニウヨーク公園課長リード博士が來校せられ、本校視察の上七月歸米せられて後、イリス苗十數種を寄贈せられた。その中の數種は今尙殘存し、現在のイリス園は實にリード博士の記念園ともいふべきものである。

七年度には、實習園の一隅に稻田を新設し、之に粳糯兩種の稲苗を植ゑ、之を培養し、又校舎北側の六花壇を牡丹園とし、牡丹二十五種を植ゑた。

八年度には、部員より一名年額参圓の實習費を徴收することとし、一人約三分の二坪の土地と園藝用具とを貸與し、自ら、栽培した鉢植草花各種の切花蔬菜等を持ち歸らせ以て各自の勞作の結果を家庭に見て貰ふやうにした。更に園藝場の西北端に十坪の温室を新設し、温室利用の實習に充て、尙本校正門側に幅五間の菊花壇を新設し、懸崖の菊の鉢植を多數陳列した。

九年度には、實習園の東北隅に肥料舎二坪を新設し、正門側の菊花壇には大菊を陳列した。

十年度には部員希望者激増の爲實習園の區劃を改作してその數を増し、尙上級生は温室及校舎周圍の花壇の手入れに當らせ、且接穂挿木取木菊栽培をもさせ、秋季の菊花壇には懸崖の菊を陳列した。

十一年度よりは第一、二學年には園藝を正課として毎週一時間づゝ課することになり、從來の三年以上の部員は置かず、希望の者を助手とした。第一、二學年生徒には草花蔬菜等の栽培の外校庭通路の除草並に掃除を行はせ、大に境内の淨化に努めた。尙貯水池の一部を堰切り泥を入れ、睡蓮や稻の栽培に充てた。

十二年度には一層校庭の淨化に努力させると共に、實習園に四季常に花が絶えないやうにする爲に十二月十二種の花壇を設け、正門側の菊花壇には大菊を陳列した。

十二月花壇に植ゑる草花の種類は次の通りである。

一月、二月	福壽草	パンジー			
三月	デイジー	水仙	八月	百日草	デギタリス
四月	アルメリア	ルピナス	九月	トリトス	勿忘草
五月	泡盛草	紅蘭	十月	葉鶏頭	サルビア
六月	マーガレット	金魚草	十一月	菊	(小萬壽菊)
七月	松葉牡丹	矢車草	十二月	寒菊	

ち、生 花 部

女の嗜の一である生花部は、昭和五年五月に世の中に多く行はれる池の坊の野々村徳子女史を先生として開始された。三年生以上で希望の人々が教を受けるのであるが、習ふ生徒が多いので、先生一人では間に合はず、時には助手を二、三人も連れて來られることがある。自然を愛すると云ふ建前から、花も成るべく季節のものを選んで居る。世の多くの人はお正月に藤や躑躅を活け、初夏に桔梗や菊を活けて其の珍しさを得々として居るが、夫は奇を好むもので自然ではない。本校では平凡に落ちず奇矯に走らず、自然を愛して其の間に技工の妙を見せたいと思つて居る。

り、樂 水 莊

樂水莊は千葉縣市原郡八幡町滿徳寺にある。生徒保健と其の性格を知るとの兩目的の爲に設けられたものである。八幡町は海は遠淺で危険がなく、また八幡神社の森があつて風光は千葉海岸中、有數の勝地である。富田校長が滿徳寺の兼住職で、寺院ではあるが寄宿舎として設備は整頓せられて居る。拾二疊半が二室、十疊が一室、八疊が一室、外に佛間と庫裡と勝手等がある。毎朝本尊様の前で禮拜讀經し、晝は水泳し、夜は座談會で賑かに楽しく一週間を過すのである。

樂 水 莊 記 録

年 度	期 日	日 數	會 費	指 導					來 訪 者	備 考	
				職員數	一年	二年	三年	四年			五年
昭和六年度	七月二十二日 七月二十八日	七		五				九	九	一	職員生徒炊事に當る

六、宗教行事の概況

月	日	行 事 名	開 施 年 度	月	日	行 事 名	開 施 年 度
四	八	お花祭	四	七	一六	お盆休	三
四	二一	弘法大師御影供	三	一二	一二	興教大師陀羅尼會 のし餅供養	三
五	五	恩徳會	三	一二			四
六	一五	護國寺弘法興教兩大師降誕會	四	一	一五	後七日御修法御衣奉迎	四
六	一七	本校兩大師降誕會	三	二	一五	釋尊涅槃會	四
七	一五	お魂祭	四	九	二一	寶仙寺土砂加持會	三

い、お花祭

四月八日は灌佛會で、お釋迦様がお生れになつた日である。印度ルンビニ苑の無憂樹の下でお生れになつたお釋迦様は、獨り印度人ばかりでなく、廣く世界人類の救済主であられる。本校では、母の愛は佛の慈悲なりの精神に依つて、今日の佳き日をお祝ひすると共に、其の御徳を慕ひ奉つて、お花祭りの行事が華やかに行はれる。講堂の祭壇には早朝より花御堂が美々しく飾られ、香高き甘茶や數々の御供物が供へられる。かくて、お花祭の歌を高らかに歌ひ終ると、ほの白くゆらぐ燈明、香煙立ち上る前に、校長先生の法樂、灌佛がすむと、職員、生徒、卒業生の各總代の灌佛が次々に行はれる。最後に校長先生の御法話があつて、感激の裡に此の行事は終る。時には更に第二部が開かれ、學校や各級の催しものが演ぜられ、今日の一日はいとも楽しく過される。

ろ、御影供

四月廿一日には御影供が行はれる。御影供は眞言宗の開祖弘法大師が御年六十二歳で此の日高野山に入定せられたので、其の御弟子達が深く大師の御徳を慕ひ、毎年此の日に御影を安置し、供養を捧げて報恩の誠を致し、夫が今日迄傳つてゐるのである。本校でも此の不出世の偉人弘法大師の御教を體するので、此の日の講堂には御供物が供へられ、校長先生の御法樂について大師の御徳を偲ぶ御法話があつて、香煙深き内に此の行事は閉ぢられる。

は、恩徳會

五月五日は恩徳會である。新義眞言宗豊山派の派祖專譽僧正が、紀州の根來山より大和長谷寺に新義の法幢を立てられて、此の日御入滅になつた。本校の校主は寶仙寺で、同寺は新義豊山派に屬するので、專譽僧正の御遺徳を顯彰する爲めに、此の日の朝禮には校長先生の御法樂が営まれる。

に、兩祖大師降誕會

我が日本佛教の開祖として、又日本文化の開拓者として不朽の光を燦として青史に放つて居る我が弘法大師空海上人は、誠に偉大なる高僧であらせられる。更に國民思想を高め、教育の普及に努力せられた其の功績を考へる毎に我々國民としても敬慕の念を新にする。又今より八百年前に弘法大師の教義を實踐せんとし、平安佛教の覺醒を叫ばれたのは興教大師覺鑿上人その人である。この上人こそ新義眞言宗の開祖と仰がれ乙亥の聖者として校長先生の敬慕一入厚い。この六月十五日は弘法大師御降誕の

日であり、亦同十七日は興教大師の御生まれになつた日に當るので、其の教を奉ずるわが國では津々浦々に至るまで、祝賀の筈が展べられる。

毎年六月十五日には、此の意味に於て小石川音羽護國寺で、豊山派宗務所及東京府下寺院主催のもとに、兩大師の御降誕會が美々しく舉行せられる。仍つて本校でも昭和四年から代表を送り、教職員引率の下に参加の時には讃仰歌を誦ひ或は茶菓の接待等の御手傳をなし、一日を社會奉仕の爲に捧げて來た。

又本校では、全校を擧げて毎年同月十七日興教大師御降誕の日、講堂に於ていとも嚴かに式が行はれる。昭和三年以來第十回の降誕會を重ねて本校宗教行事の内でも尤も重んぜられてゐる。此の日兩祖大師の御寶前には美花薫香が供へられ、朗らかな兩祖大師降誕會の歌と共に式は開かれ校長先生の歎徳文について職員、生徒、卒業生、各總代の献香が次々に行はれて、弘法大師讃仰歌を聲高らかに歌ひ終つて儀式は一まづ終る。次で全生徒教職員には祝筵を展べて茶菓をとり、學校や各級の催物などに時の過ぐるを知らず、心ゆくばかりの歡を盡くし、兩祖大師御降誕の喜に浸る。

ほ、お 魂 祭

毎年七月十五日午後一時からお魂祭が舉行せられる。其の年に亡くなられた學友生徒の兩親、或はその家の相續人達の亡き御魂を講堂の祭壇にお招きして、遺族の方々の御參列を請ひ、いともしめやかに行はれる。眞夏の日ざしは厚い壁に遮られ、祭場はその催に相應しく、重々しい空氣の内に漂ふ生徒のお魂祭の氣色の裡に亡き御魂は迎へられる。教頭先生が徐に開會の辭及び其の年に祭られる精靈様の數々を告げられ、次いで校長先生の讀經があつて、遺族、教職員、生徒、卒業生の總代によつて次々に焼香が行はれる。薄紫の煙ゆるやかにゆらくその御佛の前で、亡き御魂を偲びつゝ亡きみたまの歌が合唱せられ、閉會の辭と共に靜かに式を閉ぢ、しめやかな心地で一同は順次退場する。その御遺族の方々には、此の日の御供物がそれ／＼贈られる。今試みに昭和四年七月以來祭られた御魂を表にして御參考とする。

年 度	身 分	顧問	賛助員	教職員	生徒	卒業生	學校關係者		番外	計
							教職員	生徒		
計										
一	二									九六
一	一									一八
一	〇									六
九										八
八										八
七										一三
六										一九
五										一
四										一
三										二
二										二
一										三
計										九六

へ、お 盆 休

お魂祭がすんだ翌七月十六日はお盆休で、昭和三年より此の日は授業を休み、御魂送が各家々で行はれる。職員生徒は家々の精靈様を送り、或は寺に詣で、亡き御魂の菩提を弔ふ。かうして此の日はゆかしき精進の行業が積まれる。

と、土砂加持會

毎年四月二十一日と九月二日の兩日は、寶仙寺で盛大な土砂加持會が催される。此の日は、眞言加持の威力によつて轉禍爲福を願ふ僧俗の群で賑ひを呈する。毎日寺の境内を通る生徒は、知らず／＼其の宗教的信仰を涵養されて行く。また寶仙寺には、古くより三緣日（二日大師堂建立祐嚴法印御緣日、十二日興教大師御緣日、二十一日弘法大師御緣日）があつて、其の日には生徒は思ひ／＼に御寶前にぬかづいて行く。

ち、陀羅尼會

十二月十二日は陀羅尼會である。陀羅尼會は興教大師覺鑿上人御入寂の日である。大師の不撓不屈の精神と其の信念とはよく後世の師表と仰がれ、本校は此の興教大師を御本尊として壇上に安置してあり、此の日の朝禮には興教大師の御寶前で式が営まれる。先づ校長先生の御法樂に次いで大師を偲ぶ御法話があつて、一同感激の裡に退場する。因みに本校講堂に御安置してある尊像は興教大師の御降誕地佐賀縣鹿島誕生院に安置してある御尊像の四分の一で、而も御同木で、其の作者も同じ山本瑞雲氏の謹刻せるものである。昭和十年一月十七日創立記念日に校長先生の御親友大和長谷寺能化故小林正盛大僧正によつて開眼供養が営まれた。

り、のし餅供養

佛敎主義を奉ずる都下の高等女學校約十二校が聯盟して、佛の慈悲による、のし餅供養が毎年行はれる。本校でも、その趣旨には賛成して聯盟に加入したが、生徒を街頭に立たしむるのを好まぬので、本校では昭和四年以來毎年生徒自身のし餅供養の寄附金を提供して憐れな人達に救ひの手が展べられた。又昭和十年本校で一石の餅をつき地元の憐れな人にも配給したが同十一年には他の聯盟校と同様にのし餅の配給を受けて地元の人達に供養する事となり、普く佛の慈悲に浴させるやうになつた。

ぬ、御衣奉迎

一月十五日には眞言宗の嚴儀たる後七日御修法の御衣奉迎の御儀がある。是は弘法大師が承和二年聖上の玉體御安穩と、鎮護國家の爲に宮中眞言院で嚴修せられて以來、一千百餘年連綿として今日迄續いて居る。明治以後京都東寺灌頂院に於て御衣を奉じ、眞言宗各派管長及諸大德によつて毎年一月八日より同十四日迄御祈念申し上げる。仍て一月十五日早朝東京驛に大阿闍梨奉持して、宮中に奉還申上げるので、本校では毎年生徒、教職員總代はその奉迎に參列する。殊に校長先生が管長御就任以後より供僧として御參列になつて、一入と本校にとつて意義深い行事である。當日は宗教界其他朝野の諸名士奉迎し、一同ブラットホームより御衣に隨ひ長蛇の列をなし、肅々と宮城前に至り遙拜、萬歳を三唱し聖壽をことほぎ奉つて式は終る。

る、涅槃會

二月十五日はお釋迦様の涅槃會である。世界の人に心の燈を點せられたお釋迦様が、成道後四十五年の長い説法を終つて此の日入涅槃せられた。昔より佛の御法にいそしむ我が國民は此の大聖成道の偉德を追慕し、報恩の誠を捧げて來た。本校でも此の日朝禮には講堂に祭壇が設けられ、校長先生の御法樂の後、御佛の御德を讀へられる御法話があつて、皆法の道にいそしまんと誓ひつゝ靜かに退場する。

を、時局に對し特に施設せる行事

祈 禱 會

昨夏我が國が東洋平和の爲に支那と聖戰を交へねばならなくなつて未曾有の一大難局に遭遇した。本校でも國民精神總動員の趣旨を徹底すると共に、一は此の未曾有の大難局を調伏する爲に國禱會を起して昭和十二年拾月一日より滿一ヶ月間祈禱を實行して去る十月十六日無魔結願した。本會は校長先生を會長とし全國民に不動明王慈救眞言一億遍念誦を喚び掛けたものである。校長先生はかねて不動尊の信者として知られ、今日迄三十有餘年間、一日と雖も此の眞言を怠られなかつたと聞く。本會員は九百七十餘名で其の數は一億八千萬遍に達し廣く全國に亘つてゐるが、本校でも教職員を初め、生徒も加はり、多きは五十四萬遍にも上つた。又各家庭よりも其の念誦の希望者が續出するの盛況であつた。

戰死者の追悼

此の度の日支事變に尊い護國の英靈となられた將兵に深甚の感謝の情を捧げると共に、追悼の意を表した。殊に中野區出身の忠魂が報ぜられると、其の日の朝禮には校長先生の合圖で一同默禱を捧げる。又護國の忠魂歸るや生徒代表は所定の場所に於て無言の凱旋を迎へ、公葬の行はれるとき必ず總代を派してその忠魂を慰める。

寫經と其の贈呈

本校では更に護國の忠魂を慰むる爲に般若心經一卷の淨寫を實行した。七月末の夏休五日間、全生徒は早朝校長先生より心經の大意を示され、心を單めて淨寫を完了した。仍つて本校生徒の代表は教職員に伴なはれ、護國の忠魂の家につき深く哀悼の意を表し、此の經文一卷を贈り謹んで其の冥福を祈つた。

六、各學年度記事

昭和元年度

- 六、一七 寶仙寺第五十世富田敬純中野高等女學校設立を發願す
- 一〇、二七 第一回檀徒總代會を開き金二十六萬八千四百四十七圓五十二錢の豫算にて中野高等女學校設立を決議す
- 一一、六 世話人會を開き同上議決の承認を求む

昭和二年度

- 五、五 第二回檀徒總代會を開き建築につき具體案を決議す
- 五、二六 世話人會を開き同上議決の承認を求む
- 六、二六 第三回檀徒總代會を開き左の件を決議す
 - い、役員 庶務主任 飯田又右衛門 會計主任 石森清兵衛 工事主任 中野喜三郎
 - ろ、建築設計文部省建築課長柴垣鼎太郎氏に一任する事
 - は、工事不足金 建築不足金八萬圓は寺債として中野喜三郎氏より借入るゝ事
- に、校債 建築費の不足を生じた時は十ヶ年以内の校債を發行する事

七、八 中野高等女學校設立認可を文部大臣に申請す

七、七 中野高等女學校建築許可を警視廳に出願す

一二 左の如く工事請負契約をなす

- 校舎建築工事 石井權藏
- 暖房給水衛生裝置工事 齋藤省三
- 電氣工事 伊藤奎二
- 鑿井工事 白石藤吉

昭和三年 中野高等女學校建築許可せらる

- 一二 護國寺貫主小野方良行僧正導師にて地鎮祭を執行す
- 一、一六 中野高等女學校設置の件認可せらる
- 三、一三 工事金不足額金三萬五千圓を中野銀行より臨時借入に決す
- 一四 第一回職員會議開會出席富田校長外九名
- 二三 第一學年入學考査執行す
- 二四 第一學年入學考査出席生六十六名中六十名に入學を許可す
- 三一 第二學年入學考査執行す

昭和三年度

四、一 第二學年入學考査出席生十一名に入學を許可す

- 四、七 開校式を舉行す
 - 一〇 入學式及始業式を舉行す
- 五、二〇 寶仙寺兒童健康相談所主催の赤ん坊審査會開催せらる
- 六、一 警視廳衛生部技師大須賀武氏來校授病につき講話あり
 - 一五 弘法興教兩大師降誕奉祝會舉行す
 - 二六 全校生徒増上寺、朝日新聞社、愛宕山放送局を見學す
- 七、五 本校に於て中野教育會主催の東京高師教授綿貫哲雄氏の社會學に關する講演あり
- 九、二八 秩父宮殿下御成婚兩殿下御參内につき職員及生徒總代宮城外に奉迎す
 - 一〇、二 天皇皇后兩陛下御眞影を奉戴す
 - 一〇 全校生徒豊島園を見學す
 - 一五 東京市内私立高等女學校六十一校聯合して神宮外苑競技場に於て御大禮奉祝會を開催す
 - 二六 寶仙寺に於て御大典祝禮會執行せられ職員生徒一同參列す
 - 一一、二 東京府主催神宮外苑に於て市内公私立高等女學校聯合して御大典明治神宮祭奉祝體育大會を開催せられ本校生徒出場す
 - 一〇 本校及感應幼稚園聯合大禮奉祝校庭運動會を開催し午後二時大禮奉祝儀式舉行す
 - 一一、三 全校生徒帝國美術展覽會及博物館を見學す
- 昭和四年
 - 一七 中野教育會主催中野町内小學校高等女學校聯合して本校に於て音楽會を開催す
 - 二七 賢所天皇皇后兩陛下御還幸啓遊ばされ職員生徒總代宮城外に於て奉迎す
 - 一一、七 本校創立記念日を一月十七日と定む
 - 一四 大正大學長權田雷斧師來校講話あり
 - 一五 天皇陛下には一府四縣中等學校生徒及青年團員を宮城外に御親臨あらせられ職員生徒總代その光榮に浴す
 - 講堂に興教大師の御木像を安置す
 - 本日より四日間を創立記念日とし次の通り執行す
 - 一七日 創立記念日講話 陳列品展覽
 - 十八日 陳列品展覽
 - 十九日 創立記念式 陳列品展覽
 - 二十日 小學兒童の爲に映畫公開
 - 府立第一高等女學校長市川源三氏來校講話あり
 - 二二、二 豐多摩郡小學校兒童音樂練習會本校に於て開催せらる
 - 二三 本校に於て中野教育會主催の紀平正美氏の講演あり
 - 二八 本校に於て中野教育會主催の紀平正美氏の講演あり
 - 三、二一 第一學年入學考査を執行し出席生百十九名中七十五名に入學を許可す
 - 三〇 保證人懇談會を開催す

昭和四年度

- 四、八 始業式 お花祭舉行す
 - 九 入學式舉行す
 - 一〇 新舊兩生徒對面式舉行す
 - 一一 昭憲皇太后祭につき職員及生徒總代明治神宮を參拜す
 - 一二 二十一日弘法大師御命日につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
 - 五、二 職員及生徒總代英國グロスター皇子殿下の御參内を宮城前に奉迎す
 - 五 第二回赤ん坊審査會開催せらる
 - 一七 立川航空本部附陸軍中佐佐藤進氏來校講話あり
 - 二一 全校生徒立川飛行聯隊、航空技術本部、子安農園、農事試験場を見學す
 - 二七 海軍大尉後藤光太郎氏來校日露戰爭の原因と日本海海戦につきて講話あり
 - 六、四 中山晋平氏に委嘱の本校いろは歌の作曲成る
 - 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會舉行せられ本校職員及生徒總代出席す
 - 一七 本校に於て兩大師の降誕會を舉行す
 - 二四 本日より全校生徒の口腔検査を行ふ検査醫は河野幸三郎氏
- 七、一五 放課後第一回お魂祭を舉行す
- 一八 醫學博士紺戸廉平氏の夏季衛生講話あり
- 九、七 生徒及保證人のため放課後映畫會(恩響の彼方へ)を開催す
- 二〇 教育勸語謄本下賜せらる
- 全生徒植物園を見學す
- 一〇、二 式年遷宮祭につき神宮遙拜式を舉行す
- 三 園藝部を設置し第二學年以上の生徒より入部希望者を募集す
- 一六 市内私立高等女學校聯合明治神宮外苑競技場に於て遷宮奉祝運動會開催せられ出場す
- 一〇、二八 第一、二學年生徒は東村山貯水池を第三學年生徒は横須賀海軍工廠及軍艦金剛を見學す
- 一一、一三 第二回校庭運動會を開催す
- 一六 兒童健康相談所開設三周年記念式舉行せられ紺戸博士の講演及映畫會あり
- 二七 第一回學藝會を開催す
- 三〇 本日より二日間第三十一回東京府聯合教育會本校に於て開催せらる
- 一一、四 本校々舎繪はがき成る(四枚一組)
- 一〇 興教大師御命日(十二日)につき朝禮後供養の式を舉ぐ
- 一一 佛教主義聯盟の趣旨を賛し餅供養の資金として職員生

徒合同金一封を寄贈す

三〇 中野高等女學校學報第一號を發行す

昭和五
一五 東寺に於て後七日御修法祈願の御衣東京驛御着につき富田校長並に職員生徒總代同驛に奉迎す

一八 創立記念祝賀會を舉行、午前學藝會午後儀式を行ふ

一九 創立記念音楽映畫會を開催す

二、四 高松宮殿下の御成婚を祝し奉り一同國歌を合唱す

一五 釋尊涅槃日につき朝禮時學校長法樂を捧ぐ

一七 十七、十八の兩日第一學年入學考査執行す

一八 全生徒淀橋淨水場及中村屋製菓工場を見學す

一九 入學考査出席者八十二名中七十名に入學を許可す

二二 第三學期終業

昭和五年度

四、七 入學式を舉行す

八 新舊兩生徒對面式及始業式を行ひ、尋いでお花祭舉行映畫會(亞細亞の光)を開催す

一一 昭憲皇太后祭につき職員及生徒總代明治神宮に參拜す

一二 弘法大師御命日につき學校長の讀經あり、生徒一同いろは歌を合唱す

二二 第三學年以上の希望生徒に生花を課す

五、四 第三回赤ん坊審査會開催せらる

一六 全校生徒乃木神社を參拜し麻布第三聯隊及エビスビール會社を見學す

一九 寶仙寺裏に園藝實習園を新設し課外國藝の大擴張を行ふ(六月十三日完成)

二二 聖德太子奉讀會開催せられ太子に關する加藤咄堂氏の講演及江頭法弦氏の宗教琵琶あり

六、四 第一、二學年生徒は川崎方面に第三、四學年生徒は成田方面にそれら、遠足を行ふ

一五 本日より向ふ三日間に互り弘法興教兩大師降誕會を舉行す職員及生徒總代は護國寺の兩大師降誕會に出席す

一七 本校に於て兩大師の降誕奉祝會を舉行す

一九 本日より毎週二回づつ六回作法教室に於て中野區内中等學校教員の爲に作法講習會あり講師は村田志賀、本野久子の兩氏なり

二二 繪畫部を設置し有志の生徒に課外に圖畫(パステル)を指導す

七、四 ニュウヨーク公園課長兼植物園長リード博士夫妻及コロニヤ大學佛敎史東洋美術史教授松本文恭氏來校講話あり

八 豐多摩郡小學校教員算術科教材研究會本校に於て開催せらるる府視學肥後盛龍氏の講話あり

七、一五 放課後お魂祭を行ふ

九、二 訓育部に自治會を設け各學級に於て委員を選擧す

一七 靜寛院宮奉讀會主唱者桑原隨旭氏來校和宮御事蹟につき講話あり

一〇、二 全校生徒哲學堂オリエンタル寫眞工場荒玉淨水池を見學す

四 保證人懇談會開催少年審判所上席保美駒藏氏の「罪なき子の罪」と題する講話あり

二〇 第一、二學年生徒は豐島園に第三學年生徒は奥多摩御嶽に第四學年生徒は日光及中禪寺に一泊の修學旅行を行ふ

二八 中野教育會主催教育勅語演説四十週年記念講演會舉行せられ高島米峯氏の講演あり

三〇 市内私立高等女學校全部合同宮城前に於て教育勅語演説四十週年記念旗行列を舉行す

一一、一 第三回校庭運動會を開催すスタンド擴張せる

二二 女子音楽體操學校職員佐々木教授外四名、生徒四十名來校バスケットボールの仕合を行ふ

二三 兒童健康相談所主催の母の會開催せられ紺戸、山本兩校醫の講話及映畫あり

二七 第二回學藝會を開催す

二九 二十六日伊豆方面の震災に付職員生徒合同物品百拾六包及金四拾壹圓五拾錢を寄贈す

二二、一 海軍主計中佐鈴木亨氏來校歐米視察談あり

三 中野教育會主催の作法講演會本校に於て開催され甫守謹吾氏の講話あり

二二、二 窪田空穂氏來校歌道に關する講話あり

一五 本日より向ふ七日間全生徒の檢眼を執行す

三〇 中野高等女學校學報第二號を發行す

一七 第三回創立記念祝賀會を舉行す午前は學藝會午後は儀式を行ひ、式後來賓の爲に祝宴を開く

二八 警視廳衛生部防疫醫大須賀武氏來校猩紅熱感冒につきて講話あり

三〇 興教大師御命日(舊曆十二月十二日)につき朝禮時御影式を擧ぐ

二二、一四 日本音楽學校生徒十名來校授業を參觀す

一五 釋尊涅槃日につき朝禮後學校長法樂を捧ぐ

二三 豐多摩郡小學校修身科教授調査會報告會本校講堂に於て開催せられ豐島師範木下教諭の講話あり

二六 豐多摩郡小學校理科教授研究會調査發表會本校講堂に於て

- 開催せられ安來講師の歐米教育視察談あり
- 三、六 地久節祝賀式を舉行す式後全生徒のピンポン大會を開催す
- 七 中野教育會總會本校講堂に於て開催せられ新渡戸博士の講演、鶴燕若燕の講談あり
- 一四 中野教育會主催尾崎行雄氏の政治講演本校講堂に於て開催せらる
- 三、一九 第一學年入學考査を執行す
- 三學年以下の生徒淀橋煙草專賣局を見學す
- 二〇 入學考査受験者百二十八名中八十五名に入學を許可す
- 二三 第三學期終業
- 昭和六年度
- 四、七 入學式を舉行す
- 八 新舊兩生徒對面式始業式を舉行しお花祭を行ふ
- 一八 リード博士寄贈の陸奥蒲十八種蒔植付
- 二一 昭和三年十月二日奉戴の天皇皇后兩陛下の御眞影を奉還し新に御眞影を奉戴す
- 本校生徒徽章成る恩地孝四郎氏の意匠なり
- 二二 御眞影奉戴式を舉行す
- 二三 中野町内小學校裁縫科教員教授打合せ本校に於て開催せらる
- 二〇 本日より二十六日まで本校生徒の爲手藝講習會を開催す講師は須藤邦郎氏及同夫人なり
- 二二 本日より二十八日まで本校生徒の爲樂水莊を開く
- 八、一 本日より七日まで婦人子供洋服裁縫講習會を開催す講師は富永久良氏なり
- 九、二二 保證人懇談會を開催す山田わか子氏の講話あり
- 一六 中野町小學校聯合郷土史講習會本校に於て開催せらる 講師は高橋源一郎氏なり
- 一九 第一學年植物園第二學年動物園及科學博物館第三學年佐藤電球井田製瓶本所托兒所震災記念堂第四學年手形交換所日本銀行株式取引所を見學す
- 一〇、一 九月二十一埼玉縣下に強震あり、職員生徒一同にて慰問品を贈る
- 第五學年關西修學旅行 八日歸校す
- 第四學年日光修學旅行 二日歸校す
- 第三學年奥多摩御嶽 第一、二學年東村山貯水池に遠足す
- 二六 第四次校庭運動會を開催す
- 一一、一五 中野電信隊一部滿洲へ出發につき職員生徒總代中野驛に歡送す 本校生徒鈴木允子父陸軍少將鈴木美通氏弘前混成旅團長として渡滿品川驛を通過せらるゝにつき學校長及職員生徒總代同驛に送迎し一同より花環及同隊慰問金百圓を贈る
- 二六 豐多摩郡產婆總會本校に於て開催せらる
- 二 府下私立高等女學校聯合近衛歩兵第一聯隊營庭に於て北太平洋橫斷飛行士吉原清治氏の送別式舉行せられ本校職員生徒總代參列す
- 三 第四次赤ん坊審査會開催せらる
- 一五 全校生徒井之頭公園に遠足す
- 三一 桃園第二小學校主催桃之國子供會本校に於て開催せらる
- 六、四 第三學年以下増上寺朝日新聞社第四學年以上雙啞學校理化學研究所を見學す
- 一三 今治市精華高等女學校校長中野堅照氏來校講話あり
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり本校職員生徒總代參列す
- 一七 本校に於て弘法興教兩大師降誕會を舉行す
- 二四 女子音樂體操學校長藤村トヨ子並に同校獨逸女教師來校視察後講話あり
- 二九 第五學年生徒地方裁判所及帝國ホテルを見學す
- 一 千葉縣下八幡滿德寺を本校夏季修養寮と定め樂水莊と命名す
- 四 皇后陛下復興都市御巡覽につき富田校長生徒總代一名同伴府立第一高等女學校に於て奉迎す
- 一五 同慶院を舉行す

- 呈す
- 一八 第三回學藝會を開催す
- 二二 寶仙寺社會部にては開設五週年を記念する爲町内巡査集配入學校その他の使丁の慰安會を本校に於て開催せらる
- 二四 林博太郎 横田秀雄 中村不折 權田雷斧の四氏を本校顧問に推薦す
- 中野電信隊第二次滿洲派遣軍中野驛出發につき職員及生徒總代歡送す
- 二六 第五學年生徒日本赤十字社參考館婦人衛生展覽會等を見學す
- 二八 中野教育會主催第二回音樂會本校に於て開催せらる
- 一一、一二、興教大師御命日に付學校長法樂を捧ぐ
- 一四 のし餅供養の爲職員生徒合同金二十五圓を寄贈す
- 一七 本校賛助員に次の二十六氏を囑託す
- 伊東 忠太 床次 恭子 小野方良行 渡邊 海旭
- 加藤 咄堂 加藤 精神 神崎 式作 高橋順次郎
- 高島 米峰 竹越 竹代 相馬 御風 中山 晋平
- 井上角五郎 大森 亮順 松平 俊子 藤岡 勝二
- 福原 俊丸 小林 正盛 安達 雪 安藤 正純
- 祥雲 晚成 結城 素明 道重 信教 望月 信亨
- 森 俊成 杉村廣太郎

- 一一、一八 府視學廣瀨政次郎氏來校視察せらる
- 二四 職員及生徒總代滿洲事變の爲出征中の本庄司令官鈴木少將の留守宅慰問寒梅一鉢づつを贈呈す
- 昭和七年
- 一五 東寺に於て於て後七日御修法の御衣東京驛御着學校長並に職員生徒總代同驛に奉迎す
- 一六 創立記念祝賀會第一部學藝會第二部儀式第三部講演と映畫の會を開催す
- 一七 第四回創立記念祝賀會舉行第四部映畫會を開催す
- 二三 豐多摩郡小學校女教員大會本校に於て開催せらる
- 二八 倉林督學官廣瀨府視學來校理化教授視察せらる
- 二、四 中野町石川清太郎氏滿洲事變につき出征職員生徒總代歡送す
- 中野電信隊渡滿につき職員生徒總代歡送す
- 五 中野町得居一雄氏滿洲事變につき出征職員生徒總代歡送す
- 六 本校顧問に本野久子夫人を推薦し又賛助員に加藤寛治大將夫人千代女史及安田善兵衛氏夫人いと子女史を囑託す
- 七 中野電信隊渡滿につき職員生徒總代歡送す
- 九 奉天高等女學校々友會發起滿洲事變受難者救済資金の募集に應じ職員生徒合同金三十圓を贈る
- 二、一五 釋尊涅槃日につき學校長法樂を捧ぐ
- 一六 富田校長新義眞言宗豐山派管長に就任せらる
- 二二 護國寺に於て富田管長の就任式舉行せられ職員生徒總代參列す
- 二六 富田校長管長就任祝賀會開催す
- 三、一 中野電信隊上海に派遣せられ本日出發職員生徒總代歡送す
- 二 同 前
- 三 第二學年生徒川村文子父川村工兵少佐上海に出征職員生徒總代留守宅慰問す
- 五 中野教育會總會本校講堂に於て開催せらる
- 一〇 府下私立高等女學校職員及生徒總代聯合し戸山陸軍衛戍病院に入院中の事變傷病兵を慰問す
- 三、一九 來學年度第一學年入學考查執行す
- 二三 中野高等女學校報第三號を發行す
- 二四 職員及生徒合同卒業生送別會を開催す
- 二五 第一回卒業式を舉行す

昭和七年度

- 四、七 入學式を舉行す
- 八 新舊兩生徒對面式 始業式 お花祭を舉行す
- 二一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
- 一 明治神宮祭女子體育大會舉行せられ生徒一同出場す
- 八 第五回赤ん坊審查會開催せらる

- 九 富田校長豐山派管長として大久保陸軍衛戍病院に傷病將兵を慰問す
- 一〇 富田校長豐山派管長として横須賀海軍病院に傷病將兵を慰問す
- 十七 全校生徒井之頭公園に遠足す
- 一八 護國寺に於て滿洲國建國祝禮會舉行せられ職員總代參列す
- 五、二一 本校卒業生第一回同窓會本校に於て開催せらる
- 二四 豐多摩郡小學校々長會主催の講演會本校に於て開催せらる
- 二八 海軍大尉小關晟氏來校上海事變に關する講話あり
- 六、一 第五學年關西修學旅行 八日歸校す
- 第四學年日光修學旅行 三日歸校す
- 第三學年箱根修學旅行 二日歸校す
- 二 第一、二學年立川方面に遠足を行ふ
- 六 朝日新聞社派遣の大中寅二氏來校オリンピック派遣選手應援歌の指導を行ふ
- 一二 市政會館講堂に於て弘法興教兩大師降誕奉祝少年少女大會舉行せられ職員及生徒總代出席す
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり本校職員生徒總代參列す
- 一七 本校に於て弘法興教兩大師降誕會を舉行す
- 二八 修學旅行費積立の制を設く
- 二二 護國寺に於て富田管長の就任式舉行せられ職員生徒總代參列す
- 二六 富田校長管長就任祝賀會開催す
- 三、一 中野電信隊上海に派遣せられ本日出發職員生徒總代歡送す
- 二 同 前
- 三 第二學年生徒川村文子父川村工兵少佐上海に出征職員生徒總代留守宅慰問す
- 五 中野教育會總會本校講堂に於て開催せらる
- 一〇 府下私立高等女學校職員及生徒總代聯合し戸山陸軍衛戍病院に入院中の事變傷病兵を慰問す
- 三、一九 來學年度第一學年入學考查執行す
- 二三 中野高等女學校報第三號を發行す
- 二四 職員及生徒合同卒業生送別會を開催す
- 二五 第一回卒業式を舉行す
- 四、七 入學式を舉行す
- 八 新舊兩生徒對面式 始業式 お花祭を舉行す
- 二一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
- 一 明治神宮祭女子體育大會舉行せられ生徒一同出場す
- 八 第五回赤ん坊審查會開催せらる
- 四 日本女子高等學院教授及學生參觀す
- 一五 お魂祭を舉行す
- 一九 本校賛助員故護國寺貫主小野方良行氏の葬儀護國寺に於て舉行せられ職員及生徒總代參列す
- 二一 本日より二十六日まで本校生徒の爲手藝講習會を開く講師は須藤邦郎氏及同夫人なり
- 二二 本日より三十一日迄第五學年生徒の爲樂水莊を開く
- 八 滿洲軍司令官本庄中將凱旋につき學校長職員生徒本町通に歡迎す
- 九 學校長外職員生徒總代本庄中將邸に慰問す
- 九、一二 購買部を設置す
- 北滿松花江沿岸水害救済資金として職員生徒一同より金三十七圓を贈る
- 一五 第五學年生徒講事堂地方裁判所帝國ホテルを見學す
- 一七 保護人懇談會開催倉橋三氏の講話あり
- 二〇 第一、二學年近衛第一聯隊靖國神社遊就館第三學年植物園第四、五學年科學博物館を見學す
- 一 大東京市生誕祝賀式を舉行す
- 八 東京市編入につき中野町役場より銀盃一組寄贈せらる
- 一〇 北原白秋氏來校視察せらる
- 一七 第五回校庭運動會開催す

- 二六 第一、二學年榊形山に第三學年以上府中、蓮光寺方面に遠足す
- 二七 昭和六年十月三十日教育者に下賜せられたる勅語謄本及文部大臣訓辭寫下附せらる
- 三〇 教育勅語奉讀式舉行す
- 一一、一 明治神宮祭奉祝女子體育大會開催せられ全生徒出場す
右競技場に於て本校生徒の入賞せるもの十六名あり
- 一〇 今明兩日本校職員新宿御苑觀菊御差免しの榮を得交代して拜觀す
- 一一 全校生徒明治神宮を參拜す
- 一五 豐山能化小林正盛大僧正來校講話あり
- 一八 第四回學藝會開催す
- 一九 兒童健康相談所主催第六回母のための講演と映畫の會開催せらる
- 一一、二 山田中野消防署長來校防火に關する講話あり
- 一二 興教大師の命日につき學校長法樂を捧ぐ
- 一五 在滿鈴木少將部下慰問の爲生徒作製の繪はがきを寄贈すのし餅供養の爲職員生徒合同金一封を寄贈す
- 二四 學校長並に生徒總代鈴木少將の留守宅慰問寒梅一鉢を贈呈す
- 昭八、一四 本校校歌成る作歌北原白秋氏作曲は山田耕筰氏なり

- 一五 東寺に於て後七日御修法の御衣東京驛御着職員及生徒總代同驛に奉迎す
- 一七 創立記念祝賀會を舉行す、式後校旗及校歌の披露式を行ふ校旗の意匠は恩地孝四郎氏の考案なり
- 二一 増上寺に於て故本校賛助員渡邊海旭氏の雅儀あり學校長及職員生徒總代參列す
- 二、七 中野電信隊渡滿につき職員生徒總代中野驛に見送る
- 一〇 東京榮養研究會講師島野善吉氏來校支米食に關する講話あり
- 一五 釋尊涅槃日につき學校長法樂を捧ぐ
- 二四 女子青年團講演會本校に於て開催せらる
- 三、三 第一回お雛祭を舉行す
- 九 岩手縣下釜石地方海嘯被害救済の爲職員生徒一同より物品十三袋及金三十圓を寄贈す
- 一七 第二回卒業式を舉行す
- 一九 來學年度第一學年入學考査執行す
- 二三 中野高等女學校報第四號を發行す
- 昭八、一 始業式を舉行す
- 二 入學式を舉行す
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり職員生徒總代參列す
- 一七 本校に於て弘法興教兩大師降誕會を舉行す
- 中野電信隊滿洲派遣部隊凱旋につき職員及生徒總代中野驛に歡迎す
- 七、一二 私立中等學校恩給財團に加盟す
- 一五 お魂祭を舉行す
- 一七 中野高等女學校報を中高時報と改め各學期一回つつ發行することとし第一號を發行す
- 一九 教授囑託入來重盛氏理學博士の學位を授けらる
- 十九、二十一兩日夜運動場に於て盆踊を行ふ生徒の加入は禁じたり
- 二一 本日より二十七日迄本校生徒の爲手藝講習會を開く講師は須藤邦郎氏及同夫人なり
- 二二 次の通り樂水莊を開く
二十二日―二十八日 第五學年 二十九日―八月四日 第一學年 五日―十一日 第二、四學年
- 八、二六 職員生徒五十一名見學の爲軍艦金剛に搭乗し横濱より横須賀に至る
- 九、一 滿洲出征の鈴木中將凱旋につき富田校長並に職員生徒總代東京驛に歡迎す

- 四 新舊兩生徒對面式を舉行す
- 五 聲樂家權藤園立氏及文部省宗教局音樂協會評議員八百谷順應氏來校放課後花祭踊歌及花祭踊を指導す
- 八 お花祭を舉行す
- 一六 日比谷公會堂に於て市主催の櫻祭舉行せられ生徒十一名出演す
- 二一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
- 二二 中野電信隊營庭に於て滿洲派遣隊戰死者故横尾上等兵の慰靈祭あり職員生徒總代參列す
- 四、二五 本校顧問大僧正權田雷斧氏來校訓話あり
- 二七 本校卒業生春季同窓會開催せらる
- 五、七 第六回赤ん坊審査會開催せらる
- 一六 全校生徒平林寺に遠足す
- 一九 區役所主催防空講話會本校に於て開催せらる
- 二九 區内小學校國語研究會本校に於て開催せらる
- 六、一 第五學年關西修學旅行 八日歸校す
- 第四學年日光修學旅行 三日歸校す
- 第三學年箱根修學旅行 二日歸校す
- 第二學年は成田方面に第一學年は多摩御陵に參拜高尾山に遠足を行ふ
- 一〇 美容術師資格試驗本校に於て執行せらる

- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり職員生徒總代參列す
- 一七 本校に於て弘法興教兩大師降誕會を舉行す
- 中野電信隊滿洲派遣部隊凱旋につき職員及生徒總代中野驛に歡迎す
- 七、一二 私立中等學校恩給財團に加盟す
- 一五 お魂祭を舉行す
- 一七 中野高等女學校報を中高時報と改め各學期一回つつ發行することとし第一號を發行す
- 一九 教授囑託入來重盛氏理學博士の學位を授けらる
- 十九、二十一兩日夜運動場に於て盆踊を行ふ生徒の加入は禁じたり
- 二一 本日より二十七日迄本校生徒の爲手藝講習會を開く講師は須藤邦郎氏及同夫人なり
- 二二 次の通り樂水莊を開く
二十二日―二十八日 第五學年 二十九日―八月四日 第一學年 五日―十一日 第二、四學年
- 八、二六 職員生徒五十一名見學の爲軍艦金剛に搭乗し横濱より横須賀に至る
- 九、一 滿洲出征の鈴木中將凱旋につき富田校長並に職員生徒總代東京驛に歡迎す

職員及生徒總代鈴木中將宅慰問す

七 陸軍中將鈴木美通氏來校滿洲事變につき講話あり

一五 本校講堂に於て中野警察官教練成績講習會あり

一九 第一、二學年 植物園 第三學年科學博物館 動物園

第四學年 靖國神社 遊就館 大橋圖書館 第五學年

豐啞學校 理化學研究所を見學

一〇、一七 第六回校庭運動會開催 本年度制定の小學校選手優勝旗

は谷戸小學校之を獲得す

二六 第一、二學年 府中蓮光寺 第三學年 高尾山 第四

學年 奧多摩御嶽 第五學年 野田大宮方面に遠足す

一一、一七 校長室前に無名箱を置く(無名は萬物の母より出づ)

一八 第五回學藝會を開催し尋いで入來重盛氏の學位受領祝賀會

を開き記念品を贈呈す

二五 保證人懇談會を開く

東京府社會課より金百五十圓送附滿洲在勤兵の爲一名五十

錢つつの慰問品に慰問狀を添へ之を小包に製作方依託を受

く

二六 本校秋季同窓會を新宿白十字に於て開催す

一二、一一 のし餅供養資金として職員生徒一同より金三十圓寄贈す

一二 興教大師御命日につき學校長法樂を捧ぐ

一六 種羊研究所員高橋六郎氏來校羊毛に關する講話あり

一七 中高時報第二號を發行す

二三 皇太子殿下御降誕につき奉祝の儀式を擧ぐ

二四 府下私立高等女學校合同宮城二重橋外に於て皇太子殿下御

降誕奉祝旗行列を舉行す

昭和一、二 弘法大師千百年御遠忌記念展覽會三越に於て開催せられ第

五學年生徒は特別催物に出演す

一三 中野區産婆會當校に於て開催せらる

一四 午前本校生徒の爲午後小學校女兒の爲映畫會を開催す

一五 後七日御修法の御衣東京驛御着職員及生徒總代同驛に奉迎

す

一七 創立記念祝賀會執行し友松圓謙氏の講話あり

二、三 音楽部にコーラス部を設く

五 教授囑託青山仙子氏四日死亡本日葬儀につき學校長職員並

に生徒總代五十名會葬す

九 本校顧問權田大僧正七日逝去につき哀悼式を舉行す

一五 釋尊涅槃會につき學校長法樂を捧ぐ

一七、本校養助員道重信教氏一月三十一日逝去本日葬儀につき學

校長並に職員生徒總代會葬す

二三 私立高等女學校五十九校聯合宮城二重橋前に於て皇太子殿

下御降誕奉祝會を開催す

一、私立高等女學校聯合滿洲國大使館前に於て滿洲帝國成立の

祝意を表す 本校より職員生徒總代出席す

三、三 お雛祭を舉行す

一〇 本校講堂に於て中野區教育會主催下位春吉氏の講話有り

一五 寶仙寺に於て弘法大師の御遠忌執行せられ職員及コーラス

團參加す

一六 本校に於て弘法大師一千百年御遠忌記念式を舉行す

中高時報特輯號を發行す

一般公衆の爲記念映畫會を開催す

一九 來學年度第一學年入學考査執行す

二二 第三回卒業式を舉行す

中高時報第三號を發行す

朝日講堂に於て弘法大師一千百年忌記念講演會開催せられ

コーラス團員五十名出席し大師讚仰歌を合唱す

二五 本日より三日間護國寺に於て大師御遠忌執行せられコーラ

ス團員六十名出席し又二十六日は富田校長豊山派管長とし

て大阿闍梨勤修につき職員一同出席す

昭和九年度

四、二 始業式を舉行す

三 入學式を舉行す

四 新舊兩生徒對面式を舉行す

八 お花祭を舉行す

一一 明治神宮に於て昭憲皇太后二十年祭執行せられ職員生徒總

代參列す

一四 日比谷公會堂に於て東京市主催櫻祭舉行せられ生徒十四名

出演す

二三 愛國婦人會中野支部發會式本校に於て舉行せらる

一 音楽部に箏曲を加ふ

六 第七回坊ん審査會開催せらる

九 生徒中より募集せる赤ん坊審査會ポスター入賞者二十名に

賞品を授與す

一六 全校生徒井之頭公園に遠足す

二四 第一回春季校庭運動會を開催す

二六 海軍少佐吉田英三氏來校日本海々戰に關する講話あり

二七 教諭富田純雄氏學事視察の爲歐米に出張職員及生徒總代東

京驛に歡送す

六、一 第五學年關西方面修學旅行 八日歸校す

第四學年日光鬼怒川方面修學旅行 三日歸校す

第三學年熱海箱根方面修學旅行 二日歸校す

第一、二學年は、成田方面に遠足を行ふ

五 故東郷元帥の國葬日比谷公園に於て執行せられ職員生徒總

代參列す

- 一〇 關東女學校體育聯盟主催蹴球選手權大會に於て本校は第二學年以下二等賞第二學年以上は三等賞を得たり
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり職員及生徒總代參列す
- 一六 本校に於て弘法興教兩大師降誕會を開催す
- 一七 富田校長東京放送局にて修養講話「無言の行」を放送す
- 二一 明星中學校長兒玉九十氏及同夫人來校參觀せらる
- 二三 第五學年生徒貴衆兩院地方裁判所帝國ホテルを見學す
- 七、一〇 府視學員竹内八郎廣瀨政治林傳次の三氏來校校内一般狀況視察せらる
- 一五 お魂祭を舉行す
- 二〇 中高時報第四號を發行す
- 二一 本日より二十六日迄本校生徒の爲手藝講習會を開く講師は須藤邦郎氏及同夫人なり
- 二二 本日より八月十一日まで樂水莊を開く
- 九、一五 保證入懇談會を開く
- 一九 第一學年植物園 第二、三學年動物園 科學博物館 第四學年 日本ビール會社 清澄公園 震災記念堂 第五學年 豐瀨學校盲學校を見學す
- 三〇 本校講堂に於て既往十ヶ年間に青梅線西武電車青バスの爲遺難死亡者六十餘名の爲追悼會催さる
- 一〇、三 京阪地方大風水害につき職員生徒合同金四十圓又室戸崎へは金十五圓と現品入大袋二箇寄贈す
- 一八 第七回校庭運動會開催小學校選手リレーは再度谷戸小學校優勝し同校優勝旗を獲得す
- 二六 第一、二學年榊形山 第三學年明治製菓、川崎大師 第四學年成田大宮方面に遠足す
- 一一、二 明治神宮祭奉祝體育大會舉行せられ本校は徒步競争に於て入賞者十四名あり又蹴球第一部に於ては一等賞を獲得す
- 三 明治節祝賀式を舉行し終つて筆曲演奏會を開催す
- 一一 關東女學校體育聯盟主催の競技大會に籠球に於て第一部選手優勝し優勝カップを受領す
- 一七 日比谷音樂堂に於て私立高等女學校聯合音樂會あり生徒四十二名出演す
- 一九 第六回學藝會を開會し終りて映畫會を開催す
- 二四 中野教育會主催軍縮問題に關し町田梓柳氏の講演あり
- 二四 東北地方不作救済の爲職員生徒合同金三十二圓を寄贈すのし餅供養の爲職員生徒合同金百二十五圓四錢を寄贈す
- 一二 興教大師御命日につき學校長法樂を捧ぐ
- 二一 中高時報第五號を發行す
- 二五 第五學年生徒昇校餅搗を行ふ
- 一、一五 後七日御修法の御衣東京縣御着學校校長並に職員生徒總代同

- 一、一七 第七回創立記念祝賀會舉行、餘興に狂言を催す
- 一九 午前本校生徒の爲午後小學生の爲映畫會を開く
- 二四 中野淀橋杉並三區の警官講話會本校に於て開催せられ堀内中將の講演あり
- 二、三 富田校長東京放送局にて修養講話「即身成佛說」を放送す
- 八 第五學年生徒東京中央卸賣市場陸軍糧秣廠を見學す
- 中野區役所主催紀元節奉祝講演會舉行せられ田澤義輔氏の講演あり
- 一一 紀元節祝賀式舉行、式後校内に各種運動競技會を開催す
- 一五 釋尊涅槃會につき學校長法樂を捧ぐ
- 三、一 本校發助員藤岡勝二氏二月二十八日逝去につき默禱を捧げて哀悼の意を表す
- 三 第三回お雛祭を催し映畫會(國歌)を開く
- 一〇 歐米學事視察中の富田純雄氏歸國につき職員及生徒總代出迎す
- 一七 第四回卒業式を舉行す
- 中高時報第六號を發行す
- 一九 第一學年入學考査執行す
- 三、三〇 始業準備を行ふ
- 三一 入學式舉行す
- 四、一 新舊兩生徒對面式を舉行す
- 六 滿洲國皇帝陛下御來朝遊ばされ職員生徒總代宮城前廣場に於て奉迎す
- 八 お花祭を舉行す
- 一三 日比谷公會堂に於て市主催の櫻祭あり本校生徒九名出演す
- 一五 滿洲國皇帝陛下御退京遊ばされ職員生徒總代宮城前廣場に於て奉送す
- 二〇 二十一日は弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
- 二五 本校音樂部に聲樂を加ふ
- 二八 本校同窓會、新入會員の歡迎を兼ねて春季同窓會を本校講堂に開く
- 五、四 日比谷公會堂に於て市主催の第二回いろは祭あり本校生徒二十名出演す
- 五 第八回赤ん坊審査會開催せらる
- 一三 市内私立高等女學校理化教授研究會委員會本校に於て開催せられ廣瀨府視學臨席す
- 一五 全校生徒豐島園に遠足す

昭和十年度

- 二四 第二回春季校庭運動會を開催す
- 六、一 第五學年關西方面修學旅行 八日歸校す
- 第四學年日光那須方面修學旅行 三日歸校す
- 第三學年熱海箱根方面修學旅行 二日歸校す
- 第一、二學年淺川高尾山方面に遠足を行ふ
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會ありコーラス團六十名出演す
- 一七 本校に於て兩大師降誕會舉行す
- 二〇 私立高等女學校理化教授研究會本校に於て開催せられ出席會員九十六名倉林視學員廣瀬府視學臨席す
- 本日の研究授業學級三東四東以外の學級は科學博物館を見學す
- 七、一三 第五學年生徒貴業兩院地方裁判所見學す
- 一五 お魂祭を舉行す
- 一七 中高時報第七號を發行す
- 二二 本日より八月十一日迄樂水莊を開く
- 九、一四 保證人懇談會を開催す
- 一九 第一學年植物園 第二、三學年濱松公園、増上寺、朝日新聞社 第四、五學年中央氣象臺、電氣獎勵館を見學す
- 一〇、六 關東聯合女子體育大會に於て本校選手は籠球第一部に優勝す
- 一三 全日本眞理運動本部主催日曜市民佛教講座本校に於て開催せられ友松圓諦氏の講演あり
- 一八 第八回校庭運動會開催小學校選手リレーは武藏野第一優勝し同校優勝旗を獲得す
- 二五 第一學年榊形山 第二學年船ヶ臺 第三學年明治製菓川崎大師 第四、五學年奥多摩御嶽に遠足す
- 一一、一 熱田神宮遷座祭につき遙拜式を舉行す
- 三 明治節祝賀式舉行式後箏曲演奏會を開催す
- 一八 第七回學藝會を開催す
- 二〇 第五學年生徒種秣廠及中央卸賣市場を見學す
- 二二 東京府保導協會主事金子近次氏來校生徒一同に御挨拶あり
- 二四 代々木練兵場に於て市内男女中等學校生徒合同明治神宮奉拜式舉行せられ第四、五學年生徒參列す
- 三〇 兒童健康相談所主催第八回母の集ひ本校に於て開催せらる
- 一一、二 大正大學漢師範科生徒來校授業を參觀す
- 一二 興教大師御命日につき學校長法樂を捧ぐ
- 一八 同窓會報第一號を發行す
- 二五 餅搗を行ひのし餅の一部を區内の貧困者に頒つ
- 二四 中野區教育會本校に於て開催せらる
- 二五 後七日御修法の御衣東京縣御着職員生徒總代同躰に於て奉

昭和十一年

- 迎す
- 一、一七 第八回創立記念祝賀會を舉行す
- 中高時報第八號を發行す
- 一八 午前本校生徒の爲午後小學生の爲映畫會を開く
- 二、一一 紀元節祝賀式舉行式後全生徒明治神宮に參拜す
- 一五 釋尊涅槃會につき學校長法樂を捧ぐ
- 一六 富田校長豐山派管長滿期解職せらる
- 一八 口腔衛生映畫會を開催す
- 二八 二・二六事件受難の五高官の爲香花を手向け默禱を捧げてその英靈を弔す
- 三、三 第四回お雛祭を舉行す
- 六 地久節祝賀式舉行、式後グロコ寄贈の映畫會を開く
- 一七 來學年度第一學年入學考查執行す
- 二〇 第五回卒業式を舉行す
- 昭和十一年度
- 三〇 始業準備を行ふ
- 三一 入學式を舉行す
- 四、一 新舊生徒對面式を行ふ
- 本學年度より各學年を通じて毎週教授時數を三十一時間とす
- 八 お花祭舉行後グロコ寄贈の映畫會を開催す
- 一一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す
- 二五 生徒週番の規定を設く
- 三 第九回赤ん坊審査會開催せらる
- 一〇 騎兵第一聯隊野砲兵第一聯隊渡滿につき職員及生徒總代歡送す
- 一四 全生徒豐島園に遠足す
- 二九 春季校庭運動會を開催す
- 六、一 次の通り修學旅行を行ふ
- 第一、二學年 成田方面 即日歸校
- 第三學年 熱海箱根方面 二日歸校
- 第四學年 日光那須方面 三日歸校
- 第五學年 關西方面 八日歸校
- 一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會舉行せられ職員及生徒總代參列す
- 一六 教諭富田純雄氏演習召集に應じ本日より七月七日まで近衛歩兵第一聯隊に入營す
- 一七 本校に於て兩大師降誕會舉行終つて映畫會を開催す
- 一九 放課後全生徒に對し日蝕につきての講演會を開く講師は植田原田の兩教諭なり
- 二〇 第五學年生徒東京地方裁判所及帝國ホテルを見學す

七、一五 お魂祭を舉行す

一七 中高時報第十號を發行す

二〇 本日より八月三日まで樂水莊を開く之に参加せざる生徒全部に對し五日間校内に於て次の通り修養會を開催す

一、修養講話 午前六時四十分より同七時四十分迄
一、ラヂオ體操 午前七時五十分迄

一、特殊授業及勞働奉仕 午前八時より同十時迄

九、一二 保證人懇談會を開催す席上府保導協會主事金子近次氏の講話あり

一七 次の通り見學を行ふ

第一學年 植物園 第二學年 増上寺 朝日新聞社

第三學年 花王石鹼工場 震災記念堂 第四學年 中央氣象臺 電氣獎勵館 第五學年 科學博物館 上野音樂學校

二二 本日より二十七日迄白木屋に於て市内私立高等女學校習字繪畫展覽會舉行せられ生徒六名出品す

三〇 東京府中等學校保導協會主事川北長一郎氏來校

一〇、二 靜寬院宮第六十周年御忌御法要増上寺に於て執行せられ職員及生徒總代參列す

三 女子體操音樂學校長藤村トヨ子女史來校第十一回オリンピック大會狀況講演あり終つて右大會の映畫會を催す

一七 第九回校庭運動會開催小學校選手競技は武藏野第一再び優勝す

二六 次の通り遠足す

第一、二學年 船ヶ臺 第三學年 山口村山貯水池
第四、五學年 野田大宮

一一、二 第三、四學年生徒は明治神宮祭奉祝體育大會に出場し第一、五學年生徒は明治神宮を參拜す

三 明治節祝賀式舉行儀式終了後ラヂオ放送の指揮の下に第五回體操祭に参加す

八 代々木練兵場に於て明治神宮奉拜式舉行せられ第五學年生徒參列す

一一 明治神宮外苑競技場に於て女子音樂體育大會舉行せられ全校生徒出演す

一八 第八回學藝會を開催す

二一 第五學年生徒新帝國議事堂を見學す

二九 中野區内各種學校教員合同の園藝會を本校に於て開催す

三〇 本日より全校生徒の糞便検査を行ふ
三 島根縣社會主事東山好計氏來校視察せらる
八 のし餅供養資金として職員生徒一同より金百二十八圓一錢寄贈す

一二 興教大師御命日につき學校長法樂を捧ぐ
を開催す

昭和十二年度

四、六 始業準備を行ふ

七 入學式を舉行す 生徒佩用の徽章は本學年度より入學の初生徒に授與することとし入學式後その授與式を行ふ

八 新舊兩生徒對面式、お花祭舉行餘興として映畫會を開催す

二一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧げいろは歌を合唱す

二七 府主催日比谷公會堂にて市内中等學校生徒の爲へレン、ケラー女史の講演會開催され本校よりも生徒四名出席す

二九 天長節祝賀式舉行、式後「憲政の殿堂」と題する映畫會を開く

五、二 第十回赤ん坊審査會開催せらる
五 全校生徒井之頭公園に遠足す

一一 第五學年生徒帝國議事堂及地方裁判所を見學す

二二 湯河原に於て職員懇親會を開く參加職員二十一名
二七 竹内海軍機關大尉來校日本海海戰の狀況並に彼我捷敗の原因につきて講話あり

六、二 第四學年日光那須方面に修學旅行をなし四日歸校す
三 第五學年關西方面に修學旅行をなし十日歸校す

一一、一八 同窓會報第二號を發行す

昭和十二年度
一、一五 第五學年生徒登校餅搗を行ふ
後七日御修法の御衣東京驛御着學校長職員及生徒總代同驛に於て奉迎す

一六 中高時報第十一號を發行す

一七 第九回創立記念祝賀會を舉行す
午前本校生徒及保證人の爲午後小學校女兒の爲映畫會を開催す

二、一五 釋尊涅槃會につき學校長法樂を捧ぐ

一六 府保導協會第四支部幹事會本校に於て開催せらる

三、三 お雛祭舉行餘興に金原馬之助氏の落語あり

六 地久節祝賀式舉行式後童話家天野雉彦氏の講話あり

七 來學年度第一學年入學志願者の身體検査を執行す

一二 本校生徒の糞便検査の結果と之に對する注意とにつき山本校醫の講話あり

一七 中高時報第十二號を發行す

一八 秩父宮同妃兩殿下英國皇帝皇后兩陛下戴冠式に御參列の爲御出發につき職員生徒總代宮城前廣場に於て奉送す

二〇 第五學年生徒田園調布温室村を見學す

二三 第六回卒業式を舉行す

二四 本校同窓會は新入會員の歡迎を兼ね本校に於て春季同窓會

第三學年熱海箱根方面に修學旅行をなし四日歸校す

第一、二學年は奥高尾方面に遠足す

六、一五 護國寺に於て弘法興教兩大師降誕會あり生徒十二名參列す

一六 本校に於て兩大師降誕會あり餘興として「赤道を超えて」と題する映畫あり

一八 和洋女子専門學校教員二名生徒十一名來校裁縫科の授業を參觀す

一九 本校賛助員小林正盛大僧正十八日逝去一同默禱を捧げて哀悼の意を表す

二五 保導協會第四支部主事金子近次氏來校保導につき懇談す

二六 大正大學國漢師範科教授一名學生二十四名來校參觀す

七、六 淺草區同情園燒失につき職員生徒一同より金二十圓を贈る

一五 第九回お魂祭を舉行す

二〇 中高時報第十三號を發行す

二二 本日より八月四日迄樂水莊を開く之に参加せざる生徒全部に對し五日間校内に於て次の通り修養會を開催す

一、修養講話 午前七時より同七時五十分迄

一、ラヂオ體操 午前八時より同八時十分迄

一、寫 經 午前八時二十分より同九時十分迄

一、その他 午前九時二十分より同十時十分或は正午迄

第一學年 珠算 第二學年 裁縫手藝

第三、四學年 第一部珠算 第二部・手藝(須藤氏擔當)

第五學年 本校生徒に關する諸統計作製

九、八 職員生徒合同金貳百七拾圓を醸出し内金百五拾圓を恤兵資金として陸軍省へ金百貳拾圓を造兵資金として海軍省に獻納す

一八 本校特設防護團規定を制定し消火防毒演習を行ふ

生徒の家族に出征者ある時は級擔任生徒總代を引率してその家庭を訪問しお守に菓子折を添へて之を贈呈することとし本日より之を實行す(現在該當者七名)

二二 學校長の發起にて國威發揚皇軍戰勝將兵健全を祈願する目的を以て國禱會を設立す

二四 次の通り見學を行ふ

第一學年 植物園 第二學年 増上寺 朝日新聞社

第三學年 日本ビール會社 花王石鹼工場 第四學年 中央氣象臺 電氣獎勵館 第五學年 盲學校市民館

二五 保證人懇談會を開催す

一〇、二 靜寛院宮御法要増上寺に於て執行せられ職員生徒總代參列す

五 本校創立の功勞者故飯田喜六氏葬儀あり職員生徒總代參列す

七 佛敎護國團主催國民精神總動員講演會日比谷公會堂に於て

開催せられ職員及生徒總代列席す

一〇、一五 秩父宮同妃兩殿下英國より御歸朝本日御入京につき職員及生徒總代祝田橋附近に於て奉迎す

一七 全國各神社に祈願祭舉行せられ職員生徒總代氷川神社に參拜す

一九 第十回校庭運動會を開催す
次の通り遠足す

第一、二學年 榊形山 第三學年 東村山貯水池

第四、五學年 奥多摩御嶽

三〇 寶仙寺社會部主催の母の會開催せられ講演及映畫あり

一一、一 第五學年生徒中央卸賣市場築地本願寺帝國ホテルを見學す
明治節祝賀式舉行式後ラヂオ放送の指揮の下に第六回體操祭に参加し引續き筆曲演奏會を開催す

六 代々木練兵場に於て市内中等學校明治神宮奉拜式舉行せられ第五學年生徒及第四學年生徒の一部參列す

一三 大正大學書道展觀會に生徒七名應募し次の三名入賞す
銀賞 矢島房子 銅賞 淺倉文子 褒狀 中原貞子

一五 第九回學藝會開會終つて映畫會を開催す

一九 小串鑛山慘事救済の爲職員生徒一同金十五圓寄贈す

二〇 區内戦死將兵の遺骨は職員生徒總代之を出迎すると共に同家庭を訪問し線香一箱生徒の淨書になる般若心經寫經一卷

づ、贈呈すること、し後者は本日より實行す

のし餅供養資金として職員生徒合同金二百二十四圓九十九圓を寄贈す

二二 教諭富田道敷氏向ふ五週間近衛野砲聯隊に演習召集せらるる日々新聞社主催須賀海軍病院傷病將兵慰問會を開催せられ本校もこれに参加生徒五名出演す

二四 女子美術學校四野宮中村南教授學生三十四名來校裁縫科授業を參觀す

防毒演習舉行引續き中野區消防署長土戸隆之助氏の防火に關する講演あり終つて焼夷彈の實驗を行ふ

二五 後樂園スタヂアムに於て日獨伊防共協定記念國民大會舉行せられ第五學年生徒參列す

二七 十一月中旬以來第三學年以上の生徒には放課後軍需用縫製作の奉仕に當らしめたるが二十七日より三日間は全力を之に充つることとせり

二八 桃園第二小學校に於て、戦死將兵故新庄大佐外三氏の合同公葬執行され職員生徒總代參列す

二九 體操場に附屬室増設す

先に全國高等女學校女子専門學校合同陸海軍へ飛行機第二女學生號各一機を獻納する議定まり居れるが本回職員生徒一回分として金七十圓を納入す

- 二二、三 放課後映畫會を開催す
- 二二、五 海軍機報國百六十三號第二女學生號命名式羽田飛行場に於て舉行せられ職員及生徒總代參列す
 - 一一 十二日は興教大師御命日につき學校長法樂を捧ぐ
 - 一四 十三日南京陥落につき全校生徒旗行列を舉行し宮城二重橋外に於て皇居を遙拜し天皇陛下の萬歳を三唱す
 - 一八 同窓會報第三號を發行す
 - 一九 第三、四學年生徒臨時登校し軍需用縫製作に奉仕す依託を受けたる製作品は之にて全部完成
 - 二五 第五學年生徒登校併搦を行ふ
 - 二六 職員及生徒總代祝田門橋附近に於て帝國議會開院式行幸の函簿を奉拜す
- 二七 桃園第二小學校々庭に於て戰死將兵山村中尉外五氏の合同葬儀執行せられ職員生徒總代參列す
- 昭和二一、三
 - 二七 のし餅配給式増上寺に於て舉行せられ職員生徒總代參列す
 - 一 全生徒より募集の出征軍人慰問文三百七十八通繪畫二百八十枚合計六百五十八點を次の通り寄贈す
 - 陸軍恤兵部依託 二百七十九點
 - 海軍恤兵部依託 二百七十九點
 - 北支從軍僧櫻井榮章氏委託 百點
 - 後七日御修法の御衣東京驛御着職員生徒總代同驛に於て奉

- 迎す
- 本校に於て中野教育會主催の時局講演會あり中澤留志垣寬兩氏の北支皇軍慰問談あり
- 一七 中高時報第十四號を發行す
- 一、二二 放課後第二學年以上の生徒に對し同一問題にて英語の考査を行ふ
- 二、四 指導協會第四支部主事金子近次郎氏後任川北長一郎氏來校挨拶あり
- 五 三越に於て開催されたる童寶美術院主催お人形展覽會に於て本校生徒中村壽美子推選第一席童寶美術院賞に須藤若菜特選に入選す
- 一〇 寶仙寺檀徒戰死故高橋軍曹の葬儀寶仙寺に於て執行せられ職員生徒總代參列す
- 一二 桃園第二小學校々庭に於て戰死將兵故村山大尉外三氏の合同公葬執行され職員生徒總代參列す
- 一五 釋尊涅槃會につき學校長法樂を捧ぐ
- 一九 放課後全生徒に對し同一問題にて國語の考査を行ふ
- 二四 本校に於て中野區教育會主催の小學校國語教授研究發表會開催せらる
- 二五 臺灣總督府囑託北村研氏來校視察せらる
- 二六 放課後全生徒に對し同一問題にて算術の考査を行ふ

- 二七 來學年度第一學年入學志願者身體檢査を執行す
- 中野郵便局主催國民精神總動員保險報國講演會並に映畫會本校に於て開催せらる
- 二、二八 本年度中等學校卒業生に對し木戸文相より放送訓辭あり第五學年生徒に之を聴かしむ
- 三、三 お雛祭を舉行す
 - 七 本校賛助員神崎式作氏四日逝去につき一同黙禱を捧げて哀悼の意を表す
 - 一三 來學年度第一學年入學考査を執行す
 - 一四 同上の受験者百三十七名中八十名に入學を許可す
 - 一五 本校創立の功勞者中野喜三郎氏十一日逝去本日告別式につき職員生徒總代參列す
 - 二一 寶仙寺社會部主催區内出征遺家族慰安會本校に於て開催せらる
 - 二三 第七回卒業式を舉行す
 - 二四 新入會員歡迎を兼ねて春季同窓會を開催す

昭和十三年度

- 八 新舊兩生徒對面式及お花祭を舉行す
- 日比谷公會堂に於て佛教主義女學校聯盟主催のお花祭あり第四學年生徒參列す
- 一〇 明治神宮外苑競技場に於て紀元二千六百年奉祝會總裁奉戴會舉行せられ第五學年生徒出演す
- 佛敎主義高等女學校聯合橫須賀海軍病院に傷病兵慰問第四學年生徒三名出演す
- 一一 昭憲皇太后祭明治神宮に於て舉行せられ第五學年生徒二名參列す
- 二〇 校長令息富田泰純氏麻布歩兵第三聯隊へ臨時召集につき職員生徒總代壯行會に參列す
- 東京府學事視察員佐久間榮吉氏佐藤悟郎氏中里民平氏山本視學員外一名來校視察せらる
- 二一 弘法大師御影供につき學校長法樂を捧ぐ
- 二四 湯島聖堂に於て孔夫子の釋奠あり第五學年生徒三名參列す
- 本所公會堂に於て第五回いろは祭舉行せられ第四學年生徒二十名出演す
- 二六 靖國神社臨時大祭當日につき遙拜式を舉行す
- 桃園第二小學校に於て戰死將兵故原陸軍大尉外三氏の區葬執行され職員生徒總代參列す
- 五、一 故平田陸軍砲兵上等兵遺骨無言凱旋職員生徒總代杉山公園

前に於て出迎す

五、五 全校生徒三寶寺に遠足す

七 舊職員野々部惠舜氏五日逝去默禱を捧げて弔意を表す

故嶺村陸軍中尉遺骨無言凱旋職員生徒總代杉山公園に於て出迎す

八 第十一回赤ん坊審査會開催せらる

一四 桃園第二小學校に於て故川原陸軍大尉外三氏の區葬舉行せられ職員生徒總代參列す

一六 故佐藤上等兵遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

一七 第五學年生徒貴衆兩院及中央卸賣市場を見學す

二〇 徐州陥落につき職員生徒一同運動場に集合宮城を遙拜して萬歳を三唱す

二二 職員一同正九時に遠足す

二四 第一、二學年多摩丘陵高幡方面第三學年平山丘陵 第四、五年神武寺鷹取山方面に遠足す

二五 故淺見一等兵遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

二六 故川上等兵遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

二七 海軍少佐宮崎勳氏來校海軍の支那方面に於ける活躍につき講話あり

三一 體操科研究授業行はれ栗本厚生省體育官山本視學員臨席す

六、一五 午後全校生徒護國寺に參詣す

七二

一七 兩大師降誕會を舉行し映畫會「軍神乃木さん」を開催す

一九 教諭富田純雄氏演習召集に應じ近衛歩兵第一聯隊に入隊す

二〇 第五學年生徒東京地方裁判所及赤十字參考館を見學す

二二 職員愛國貯金組合生徒愛國貯金の制を定め本月より之を實施す

二五 中野區教育會總會席上に於て次の本校十ヶ年勤職職員表彰せらる富田校長赤沼教頭田中幹事泉古幡兩教諭田中書記塚田使丁夫妻の八氏

二八 岩佐高等女學校燒失に付職員生徒一同より金貳拾圓及ポール三箇を贈る

野方尋常高等小學校に於て陸軍通譯猪飼氏外四氏の區葬執行せられ職員生徒總代參列す

二九 故杉澤上等兵外二氏の遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

一 山本校醫醫學博士の學位を受領せられたるに付職員生徒合同祝賀會を開き職員より記念品を贈呈す

七 支那事變勃發一周年記念日に付職員生徒一同廢物金物一品づゝ持參辨當は握飯香の物一品とし午後は寶仙寺に於て執行せられたる戰歿將兵の法要に參列す

一四 七日職員生徒持參の廢物金物賣上高金參拾一圓となり之を海軍省恤兵部に獻納す

一五 午後お魂祭を舉行す祭らるゝ者十四名

期日 八月二十日より三日間 參加者十七名

第五、秩父方面寫生旅行

期日 八月二十六日ヨリ三日間 參加者十七名

三〇 密教文庫附屬兒童圖書館新設 八月一日より開館

八、二五 教諭菅野信夫氏教育召集の爲弘前岡戸部隊へ入隊

九、一 大暴風雨交通社絶臨時休業

六 一東宮寺康子兄隆一氏 五東安村明子父光亨氏 四西松井

芳子兄利夫氏 同實松鶴子兄忠雄氏 同蒲地榮子兄源六氏 出征に付慰問狀にお守お札菓子一折を添へて之を贈呈す

七 學校長令息泰純氏出征に付職員總代歡送す

一〇 桃園第二小學校に於て第十回區葬執行せられ職員生徒總代參列す

一二 故早乙女伍長遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

一七 保證人懇談會開催出席百九十二名

一九 第一、二學年成田方面に遠足

第三學年箱根熱海方面修學旅行 二十日歸校す

第四學年日光那須方面修學旅行 二十一日歸校す

第五學年關西方面修學旅行 二十六日歸校す

故宇田川一等兵遺骨無言凱旋職員生徒總代出迎す

二二 教諭菅野信夫氏召集解除歸校

一七 教諭富田純雄氏召集解除歸校

七、一八 支那事變勃發一周年に當り御下賜の勅語奉讀式を舉行す

二〇 第一學期終業式舉行す

二二 本日より實施せる夏季休業中の行事左の如し

第一 校内修身會 七月二十一日―同二十五日

1. 修養講話 午前七時十分―同七時五十分

2. ラヂオ體操 午前八時―同八時十分

3. 集團勤行 午前八時三十分ヨリ一時半乃至三時間

第一、二學年 校舍内外寶仙寺墓地塔の山公園掃除

第三學年以上 軍需品の製作 校内の掃除

第二 特殊作業

第一、二學年 七月二十六日―八月三十一日

四名づゝ輪番 園藝實習場除草灌水掃除

第三、四學年 八月一日―同三十一日

四名づゝ輪番 密教文庫附屬兒童圖書館事務

第五學年 七月二十六日―八月三十一日

四名づゝ輪番 塔の山兒童遊園掃除

第三、樂水莊修養生活 第一學年生徒

第一回 七月二十七日―八月二日

第二回 八月三日―同九日

第四、三峯縱走ハイキング

七三

感應幼稚園

一、拾一年誌

感應幼稚園が設立されてより本年は拾貳年目に當る。滿から云へば十一年である。俗に拾年一昔と云はれてゐるから、一昔よりは既に二ケ年超過したことになるが、然し五拾年後に始めて其の結果が現れると云ふ、實りの遅い者の教育事業の歴史としてはまだほんの序の口であつて、第一回の卒業生が漸く中等學校の四學年に進んでゐる處では、社會人として又本園の卒業生として世にひとり立ちするのもまだ遠い將來の事である。然し乍ら私が不徳の身を以て此の尊い保育事業の創設當初よりその一人として關係させて頂き、云はゞ双葉の頃より現在までを目のあたり眺めて來た者には、此の短いほんの序の口である拾年の歴史も、顧みて少からぬ感懷を抱かない譯にゆかないものがある。

單に子供の遊び場であつた寶仙寺幼稚園が感應幼稚園に變り、バラツクの貧しい建物で床の破れや、雨漏りを絶えず心配し乍ら、不備を忍び、不足勝な設備のもとに保育を開始してより星霜拾年、現在では東都のみならず全國でも設備では先づ恥づかしくない幼稚園に改築せられ、設備に並行して保育状況も著しく充實發展し、六十名の園児が一百六十名に増加し更に幼稚園の成長に添つて、同窓會、母の會は申すまでもなく、舞踊會、書道會等も附帶事業として生れ健かに成長し、また佛教保育協會保母養成所等の佛教各宗に通ずる全國的な事業も幼稚園に併設せられて本園が佛教保育の實習場となり全國佛教幼稚園の注目の的となる等今昔を比較して全く面目を一新してしまつた。

斯うした感應幼稚園の成長變遷の全貌を眺めるとき大過なく茲に拾年の齡を迎へさせて頂いたことは衷心より喜びと有難さを感じると同時に、今後益々精勵、精進し、上佛天の聖旨に順ひ、更に富田園長の御信賴と御懇切なる御指導に報い度いと念じてゐるものである。

私がこの寶仙寺幼稚園に就任したのは大正十五年九月初旬で幼兒園落成の直後であつて、園舎の建物と運動具が出来上つたばかりであつた。やがてオルガン、腰掛、其他細かな用具を取揃へて愈々開園したのであるが、日曜日以外は遊園の利用者が殆どなく、廣い土地と建物を組織のない幼稚園、單なる子供の遊び場として使用する事は誠に勿體ないと考へたのである。園の近くには昔のまゝの畑が散在し、園の北側は上の原まで見渡せる原つば続きであつたために、幼兒園外にも遊び場は澤山に求められ、園内だけに子供を引きとめる事は困難であつた。そんな譯で一層の事幼兒園の建物を改造し幼稚園にしてはどうかと云ふ話になつた。尙寶仙寺の周囲には幼稚園の施設はなく、若し幼稚園を求める場合は、淀橋、東中野驛前等まで遠く通園させてゐた時代で近在からも早く幼稚園にして欲しいと云ふ聲が高くなつたので、翌昭和二年二月寶仙寺幼稚園を感應幼稚園に更改することに決し、二月初旬より愈々園舎の改造工事に着手した。昭和二年三月五日、東京府の認可を得て感應幼稚園は設立せられた。その大體の設備を記せば

遊戯室 二十八坪 保育室 六坪(二室) 雜室四室 十一坪

保母には東京女高師出身の小川保母(現在の青柳)並に佐原保母を迎へて、昭和二年四月六日開園式を舉行する運びとなつた。而して四十七名の入園児を迎へ、職員一同心を協せて研究、献身努力を怠らず、將來必ず大幼稚園に發展させようと互に勵し合つたのである。

保育は月組及星組の二組に區分し、月組(年長組)を小川保母、星組(年少組)を佐原保母擔任した。昭和三年度には母の會

を創立し、その後殆ど毎月これを開催して幼稚園の保育状態の參觀を願ひ、本園の主義方針を説明し、更に氣まぐれな入園希望者に對してはお氣毒乍ら遠慮なく入園をお断り申上げることにした。幸にして我々の努力は漸次、酬いられて腰掛式の入園者は全く跡を断ち、入退園の園児移動も僅少になり入園に先だち本園の設備保育方針等を詳細に參觀研究せられる保護者が益々増加して行く事は誠に喜ばしいと思ふ。

園児は創設當時は殆んど近在の者に限られてゐたが、年を越つて遠方よりの入園希望者増加し、設立五年目頃より漸次遠く杉並、野方、淀橋、新宿よりの通園児を増し、在園兒數も設立三年目までは六十名の定員に達せず、加へて入退園の移動激しきため保育にも種々支障を生じ、また經營にも相當の不足金を生じたものである。

昭和十一年には佛教保育協會保母養成所が併設せられ、その小教室一室を保育室に使用し園児定員を更に壹百名に増加收容するに至つた。而して、入園希望者益々増加するに拘らず、園舎は狹隘をつけ、保育上支障を生ずることが少からずあつた。幸に中野區役所建物が寶仙寺に譲渡せられたので園舎増改築に着手し、昭和十三年一月之を幼稚園に移轉し改築落成した。依つて昭和十三年六月には園児定員、壹百六拾名が認可せられた。右定員は幼稚園令の定むる定員壹百貳拾名を超過するものであつて、東都私立幼稚園に於ては稀有なものである。如何に本園が其筋からも認められつゝあるかを察することが出来る。然るに本春新學期四月より、常に滿員の盛況を續けてゐる。

職員としては、先づ第一に富田園長の全き御信頼と、適切なる御指導は拾年を回顧するとき最も深き感恩に打たれるものであるが、保母諸姉も各々感謝の心をもつて佛を偲んでゐる。現職の保母諸姉は五名である。設立以來、八名が各退職せられ、内七名が、家庭に入り、一名が他幼稚園に榮轉せられてゐる。皆本園發展のため、本園の主義方針を體して互に協心、協力、充實した保育を熱心に續けられた。殊に本園々舎改築までは設備は不完全であつたにも拘らず、その職務に對し、誇を持つて献身的に働き、今日の本園の隆昌を見たのである。

尙、本園教育の進歩向上のため、顧問として多年御指導を賜つてゐる、恩師、關寛之先生に對し、此の機會に、厚く御禮申上げ度いと思ふ。(青柳記)

二、職員

い、現職員

(昭和十三年十月末日現在)

就任年月日	在職年月	氏名	現住所
二、三、五	十一年八ヶ月	富田 敦純	中野區宮前町五〇
二、四、一	十一年七ヶ月	青柳 義智代	中野區宮前町四八
二、四、一	同 右	青柳 節子(舊姓小川)	同 右
一、四、一	二年七ヶ月	高木 公枝	中野區宮前町二五
一三、四、一	七ヶ月	笹川 ミヤ	中野區宮前町四八
一三、四、一	同 右	福島 愛子	世田谷區羽根木町一八一六
一三、四、一	同 右	黒須 千代子	淀橋區淀橋三七二

ろ、舊職員

就任年月日	退職年月日	在職年月	氏名	現住所
二、四、一	三、三、三〇	一ケ年	古屋滋子(舊佐原)	市川市市川二ノ二四七
三、四、一	六、一、三一	二年一〇ヶ月	池田文子(舊清水)	英國リバープール領事館
六、四、一	九、五、三〇	三年二ヶ月	川村道子	名古屋市西區女子師範幼稚園
七、四、一	七、七、三〇	七ヶ月	樋口文子(舊中岡)	深川區佐賀町二ノ八ノ三
九、四、一	一、一、三一	一年一〇ヶ月	加藤 緑(舊岸村)	仙臺市東三番町一六
九、六、一	一、三、三〇	二年一〇ヶ月	中澤千鶴子	豊島區長崎仲町一ノ二八四〇
一、四、一	一、一、三〇	一年八ヶ月	松井定子(舊大塚)	中野區大和町四五
一、四、一	一、三、三〇	一ケ年	中村美代子(舊濱屋)	江戸川區小岩町四ノ一九八三

三、各年度修了園兒數

年 度	男	女	合計	年 度	男	女	合計
昭和二年度	二〇	九	二九	昭和八年度	二〇	二一	四一
昭和三年度	二六	二三	四九	昭和九年度	二五	二五	五〇
昭和四年度	二二	二〇	四一	昭和十年度	二四	二一	四五
昭和五年度	二六	二二	四七	昭和十一年度	四一	三三	七三
昭和六年度	二五	一九	四四	昭和十二年度	三四	三八	七二
昭和七年度	一七	二九	四六	計	二七九	二五八	五三七

四、年中行事

月 日	行 事	月 日	行 事
四月三日	神武天皇祭	九月廿日	終業式
六日	入園式	九月五日	始業式
八日	花まつり	中旬	防空演習
廿一日	弘法大師御影供	十五日	氷川神社祭
廿七日	靖國神社祭	下旬	お彼岸まつり
廿九日	天長節	十月一日	自治記念日
五月五日	端午の節句	中旬	お月見まつり
八日	花まつり(二ヶ月延期)	上旬	秋の遠足
中旬	春の遠足	同右	神嘗祭
廿七日	海軍記念日	十七日	中野高女運動會
六月一日	第一學期歯科治療開始	中旬	靖國神社祭
四日	虫歯豫防デー	廿三日	教育勅語奉戴記念日
十日	時の記念日	卅日	お地藏まつり運動會
十五日	弘法興教兩大師御降誕會	下旬	第二學期歯科治療開始
七月七日	七夕まつり	十一月一日	明治節
十三日	魂まつり	三日	七五三祝ひ
十六日	御盆休み	十五日	新嘗祭
		廿三日	

十二月一日	防火デー	二月一日	第三學期齒科治療開始
八日	成道會	上旬	節分
十二日	興教大師陀羅尼會	十一日	紀元節
廿三日	お餅搗き	十五日	涅槃會
廿四日	終業式	三月三日	ひなまつり
廿五日	大正天皇祭	五日	創立記念日
一月一日	四方拜	六日	地久節
十一日	始業式	廿日	卒業式
十七日	中野高女創立記念日		

閑話の三、塔ノ山の境内を兒童遊園とする積りでブランコを作った。一ヶ月程経つと一枚のはがきが無名氏から届いた。読んで見ると、ブランコを取毀して下さい、小供が怪我するかも知れない、また私の所の子供はブランコに乗るやうになつてから御飯を澤山食べて困る、とあつた。世の中には實に勝手な理屈があるものだ、私は大に奮慨した。而して其のはがきを或人に見せた。或人は、是は貴僧の事業を稱讃する意味である、夫を逆にかからかつたのである。と慰めてくれた。

五、諸施設

と、母の會

幼兒の保育は、家庭教育の足りない處を補ふのが主な役目である。就いては家庭と幼稚園は常に同心一體となり、相互に心を合はせておなければ、充分の保育の効果は得られない。母の會は第一に家庭と幼稚園との連絡及親睦を圖る必要から生れたものである。また、母は家庭に於ける子供の教育者であるから自らの教養を一層高めなければならない。そのために母の會では隨時、諸々の教育上の講演會、研究會、講習會を開催し、更に社會常識涵養のため文化施設の見學、諸工場の見學會等を主催する。幼稚園教育には不可欠の事業であつて、本園の母の會は昭和二年四月設立せられ、在園兒並に卒業生の母を以つて組織されてゐる。降つて昭和九年五月、牧、土田、藤本、船曳の佐藤諸氏母の會幹事に就任せられるに際し、設立以來母の會の諸事業の計畫及其の費用は總べて幼稚園で責任をもち負擔して來たのであるが、母の會の成長發展にともなひ、更に積極的にまた多方面に活動を要するため、幼稚園より獨立し母の會自體にて會を運用することになり、同年九月より幹事に於て各々會の責任を分擔し、費用は母の會會費として徴收し支辨すると云ふ劃期的改正を行つた。

爾來、母の會の事業は多岐に亘り、今次事業に際しても、卒先事業の認識を深めるために、海軍省より講師の派遣を乞ひ軍事講演會を開催し、出征將兵慰問袋の調製、會員家族應召者の歡送、遺家族の慰問等を初め、非常時國策への順應と銃後御奉公のため諸事業を遂行し、また舊臘幼稚園舎改築に際しても欣然として多大の寄附をせられ、理想的なる現園舎の建設を完了したのである。尙、本年度より幼稚園齒科室の經營を引受け、第一學期は六月、第二學期は十一月、第三學期は二月を齒科治療期間と定め、順次全園兒の齒科治療を實施してゐる。

因に母の會々員諸氏の幼児教育に對る理解と熱意は、本園の誇りである。幼児教育の充實と徹底のため誠に喜びに堪へない。

ろ、同窓會

昭和三年三月、感應幼稚園が第一回卒業生二九名を送るに際し、右卒業生を最初の會員として同窓會を設立した。爾來、幼稚園の成長に伴ひ、卒業生數も遂次増加し、現在では既に會員五百三十七名の多きに達してゐる。

同窓會は同一の學窓出身者の親睦と連絡のために設立されたのであるが、本園同窓會の設立目的には、更に卒業後も幼稚園教育の延長として引續いて卒業生を指導する責務を感じたこと、幼き心に培つた宗教的情緒の芽生えを枯渇させたくないと思ふ念願が含まれてゐた。一回でも多く同窓會を開催し、また同窓生を招き、幼稚園との連絡を深めることに依つて、その念願を満たしてゆきたいと思ふのである。

就いては幼稚園の佛教年中行事は勿論のこと、主要なる行事及諸催には總べて同窓生を招待し、更に同窓生のため感應幼稚園舞踊會、同書道會等を設立經營して希望者を加入せしめることに努めてゐる。幸ひ、既に中等學校に進み、幼い頃の面影の發見に苦しむやうな古い卒業生をはじめ、一年生になつたばかりの新卒業生まで、先生を慕ひ、幼稚園を懐しんで、こと有る毎に近づき、集つて呉れることは喜びである。

は、舞踊會

感應幼稚園舞踊會は昭和八年二月設立された。近年兒童藝術運動が隆盛となるに従ひ、在園兒及卒業生より、舞踊の習得を希望せられる向きが増加し、また在園中に既に入會せられてゐるもあり、更にその會の傾向が教育上遺憾な點がないでもないのに

鑑み、本園に於ても舞踊會を設立し、教育的な正しく明るい舞踊を希望者に習得させると共に、幼稚園の遊戲教育の研究向上を圖りたいと考へて感應幼稚園舞踊會を設立した。

指導者は幸ひ、佛教的教養のもとに生育せられた兒童教育舞踊家賀來琢磨先生に囑託した。先生は佛敎幼稚園並に兒童團體の舞踊遊戲指導の第一人者であり、佛敎舞踊運動の創始者であることは本舞踊會設立の趣旨にも叶ひ喜びであつた。

設立と同時に、在園兒並に卒業生より九名の入會者を得、爾來二十名内外の會員が毎週水、土曜日の二日を愉快に伸びくと踊り過してゐる。本舞踊會の特色は、世上一般の兒童舞踊會と異り、虚榮的な費用負擔を省くことを主眼とし發表會、其他の出演も極めて質素、教育的に行はれてゐること、情操、姿態の優美純化は勿論であるが、主に健康増進のために會員から喜び迎へられてゐる。尙、設立以來六年繼續の會員二名あり、その上達見るべきものがある。

に、書字會

昭和十一年四月一日感應幼稚園書字會を設立した。書道は東洋藝術の精華であり、精神鍛鍊の効果も認められ、近時書道熱勃興をみたが、幼稚園卒業生より書道習得希望の中出も多數あつたので、前女子師範學校教諭にして比田井小琴門下杉山まきを先生に囑託して開設した。その懇切な御指導が好評を得て、開設以來三十餘名の會員が常に出席し、毎週金曜日の午後一時より熱心に練習に勵んでゐる。

六、各學年度記事

八四

- 昭和元年度**
- 九、一 寶仙寺幼児園設立せらる
 - 二、九 寶仙寺幼児園を感應幼稚園に變更決す
 - 三、五 東京府より感應幼稚園設立認可せらる
- 昭和二年度**
- 四、六 入園式舉行
 - 四、七 月、星の二組に區分して保育を開始す
 - 九、二二 寶仙寺設立中野高等女學校地鎮祭舉行せられ園児參列す
- 昭和三年度**
- 四、七 中野高等女學校開校式舉行せられ參列す
 - 二〇 感應幼稚園母の會を設立す 幹事石原、高野、志知、秋山、ウーラの諸氏就任す
 - 一〇、一〇 感應幼稚園同窓會を設立す 長亮一氏を幼稚園醫に河野幸三郎氏を幼稚園齒科醫に囑託す
- 昭和四年度**
- 三、八 ガス線工事完了し薪炭使用を廢止
- 昭和五年度**
- 七、 水道給水工事完了し井戸水使用廢止
- 昭和六年度**
- 二、一四 園則保育料變更認可せらる
 - 三、二九 新入園児の身體検査及詮衡を施行す
 - 四、六 花組を新に編成し月、星、花の三組とす
 - 二、三〇 富田園長新義眞言宗豊山派管長就任の榮譽を記念して幼稚園徽章を制定す、圖案土田文雄氏
- 昭和七年度**
- 二、一 感應幼稚園舞踊會を設立す
 - 二、二九 園児用プールを建設す
- 昭和八年度**
- 三、一九 弘法大師壹千百年御遠忌法要寶仙寺に於て嚴修せられ參列す
- 昭和九年度**
- 四、二〇 弘法大師壹千百年御遠忌を記念して幼稚園歌を制定す 作歌 西條八十氏 作曲 中山晋平氏
 - 五、一〇 母の會の規則を變更し獨立會計とし積極的に諸事業を行

- ふことなる 盡力の幹事は牧、船曳、土田、藤本、佐藤の諸氏なり
- 昭和十年度**
- 一〇、二〇 佛教保育協會保期養成所 幼稚園に併設決定す
 - 四、五 佛教保育協會保期養成所開設せられ幼稚園が生徒の保育實習場となる
- 昭和十一年度**
- 一、三一 園舎の建築落成す
 - 二、一五 園舎上棟式を舉行す
- 昭和十二年度**
- 四、一〇 感應幼稚園書道會を設立す
 - 十一、六 園舎増築決定す
- 昭和十三年度**
- 四、六 園児数を壹百六拾名に増加し、月、星、花、雪の四組に編成す
 - 六、九 園児定員壹百六拾名に増加の件認可せらる

閉話の四、 私が中野高女を建設すると云ふことを借地人に話した。彼は本當か、確かかと念を押すから内容の充實の誇りまで蕩々と一席辯じた。さうすると、能く解りました。夫では今日限り私は地代を支拂ひませんと云ふた。私は吃驚してその理由を聞いた。彼は平然として答へた、

吾々は自分の子供を小學校へやるのに苦しんで居る、中等學校などは吾々には必要のないものだ。中等以上の學校へ行く必要のある人は國家の立てた學校に行けばよい。小學校にすらやることの出来ぬ吾々から地代を取つて贅澤至極の學校を建てるとは怪しからん。

と威猛高になつて怒鳴られた。私は鳩が豆鐵砲を食つたやうな顔をしてゴカンとして了つた。

佛教保育協會保母養成所

一、三周年を迎ふ

本所がその創立三周年を迎へるに際し、本所設立の母體である佛教保育協會の歴史に就いて、先づ簡単に述べたいと思ふ。大正十五年幼稚園令が制定發布せられてより、幼稚園の増加發達は實に目覺しく、非常なる數にのぼつたのであるが、其のうち佛教寺院の設立經營する幼稚園も相當なる數を占め、更に益々増加の趨勢にあつた。この喜ぶべき趨勢と現状を、一層助長發展せしめるため、先づ佛教幼稚園と託兒所の連絡、統一を圖る機關の設立が要望せられるに至つたのである。この時、斯界の先覺者である堀信元氏等に依りて、各宗保育事業經營者の聯合と團結を主張せられた。幸ひ、佛教各宗當局の理解と支援を得、また佛教保育關係者の全幅の賛同と参加を得、昭和三年御大典の盛儀を記念する事業として、佛教保育協會は創立せられたのである。

會長には、前文部政務次官安藤正純氏を推戴し、副會長には現本所々長富田敬純氏、並に佛教保育の學術的指導者として、東洋大學教授關寛之氏が就任し、眞宗兩派、淨土、新義眞言兩派、曹洞、日蓮、天台の各宗より代表者が協會理事となり、佛教各宗共同事業として、組織を確立し、また、協會の主事には關岡賢一氏が推舉せられた。

爾來、協會の事業として、毎年夏を期し佛教保育講習會を東京に於て開催し、保育の進歩向上を計り、又保母の再教育を施しその他臨時保育の研究會の開催、教材の提供、會報の發行、幼稚園、託兒所の經營指導、設立の獎勵など多岐、多方面に活動を續けて來た。

降つて昭和六年協會創立三年の記念事業として帝國教育會館に、全國佛教保育大會を開催した。席上功勞者の表彰並に大會議案の討議などが行はれたのであるが、全國より参加者多數あり、その盛況、佛教保育事業の隆昌と發展とを如實に示すものとして、實に頼しい限りであつた。

而して、その大會に於て佛教保育の普及徹底のために、佛教保育協會保母養成所の設立が滿場一致議決せられたのである。

保母養成所の設立に就ては、宗門共同事業として當然生起する種々なる事情を解決し、また幾多の迂餘曲折を経て、昭和九年六月保育協會理事會にて具體案を協議作製した。而して、同年八月協會副會長、富田敬純氏が依頼を受け、感應幼稚園の隣地、三百餘坪の地に佛教保育協會保母養成所を設立すべく確定した。これは實に佛教各宗の理事を始め、關副會長の佛教保育に對する獻身的努力と熱意の結晶であつて、昭和六年保育大會に於て設立が議決せられてより三年にして漸く實現せられたのである。

同年十二月三十日校舎の建物が落成した。翌年一月、所長富田敬純、學監關寛之、幹事稻垣實秀、主事青柳義智代の諸氏が就任し、講師には斯界の専門家をそれぞれ囑託し、同年四月開校式を舉げた。

本所も無事設立以來三年を送つた。此の間に卒業生に對する保母無試験檢定も認定せられ、卒業と同時に保母免許狀が取得せられることとなり、卒業生に對する責を果し、また、本年一月は保母養成所並感應幼稚園の増改築を完成し、全國この種保母養成所中、最も完備充實せるものと自信するまでになつた。殊に、校内には明朗、清潔なる寄宿舎あかつき寮も附設せられて、地方出身者のために便宜を圖る等、本所も、この三年間に大體建設に對する所期の目的を貫徹したものと見ることが出來よう。

而して、過ぐる三年を顧みて、強く感ずることが三つある。記して三年史のうちに留めたいと思ふ。
その一は卒業生の就職が好況であること。

本所卒業生は、第三回まで合はせて九拾名であるが、第一回卒業以來、毎年卒業前、即ち三月中に殆んど就職が決定し、採用申込に對し卒業生数が不足を感ずる次第で、その好況、他の保姆養成所とは狀況を異にしてゐる。誠に喜びに堪へない。この就職の好況は、思ふに東京市内六十余ヶ所全國壹千余ヶ所に及ぶ佛教各宗保育界の支援に依る所多大であると信じ、深く感謝するのである。

その二は本所の經營が容易でないことである。生徒定員を少數にして、徹底せる教育を目指し、完備せる設備のもとに、理想的なる教育を續けて行くには、半面經濟的に非常なる犠牲を必要とする。併し、本所の特色は、この經濟的方面を念頭におかず、一意専心理想的保姆、佛教保育界に役立つ保姆を育成して行く所にある。三年間のみならず、將來とも、富田所長の經濟上の御援助に對し、深く感謝するものである。

三は卒業生、あかつき會員の強力なる團結と、自覺とである。第一回卒業生二十三名が、卒業と同時に、組織した、あかつき會は現在九拾名の會員を擁してゐるが、會員相互間の親睦なることは本所の誇りである。相助け、相勵まし佛教保育界の第一線に、その進歩向上のために精進してゐることは實に心強く思ふ。この團結の力は、即ち、佛教保育に對する自覺から育成せられたものである。

二、職員

職名	擔任學科	氏名
顧問		安藤正純
所長	修身	富田敦純
學監	兒童心理、保育	關寛之
幹事		稻垣實秀
主事		青柳義智代
講師	教育	堀定正
"	音樂(聲)	權藤圓立
"	音樂(器)	香川鈴
"	遊戯	賀來琢磨
"	圖畫	菅野廉
"	手技	卜部たみ
"	談話	内山一三夫
"	觀察	堀七藏

職名	擔任學科	氏名
"	宗教哲學	田淵正範
"	佛教概論	高神覺昇
"	社會事業	朝原梅一
校醫		川上たかし
課外各宗講座講師		
眞宗		山邊習學
淨土宗		杉浦演順
眞言宗 豐山派		長岡慶信
" 智山派		坂野榮範
曹洞宗		青龍虎法
日蓮宗		池田順教
天台宗		鹽入亮忠

三、生徒

い 各年度生徒数

年度別	入學志願者数	入學者数	中途退學者数	卒業者数
昭和十一年度	三五	三〇	七	二三
昭和十一年度	四六	三七	三	三四
昭和十二年度	五九	四二	九	三三
計	一四〇	一〇九	一九	九〇

ろ 卒業生就職状況

年度別	採用申込数	就職希望者数	申込謝絶数
昭和十一年度	二八	二三	五
昭和十一年度	五三	二七	二六
昭和十二年度	七一	二八	四三
計	一五二	七八	七四

四、各學年記事

- 六、二九 佛敎保育協會理事會に於て保姆養成所設立を協議決定す
- 八、三 佛敎保育協會の依頼に應じ、感應幼稚園隣接地に設立を承諾す

- 一〇、一七 佛敎保育協會保姆養成所設立の認可を申請す
- 一〇、二〇 武智工務所と校舎の建築工事請負契約す
- 一一、一一 校舎上棟式舉行
- 一一、三〇 校舎の建築落成す

昭和十年度

- 一、二二 佛敎保育協會理事會開催講師及職員を決定す
- 三、四 佛敎保育協會保姆養成所設立認可せらる
- 四、四 第一回職員會を東京鐵道ホテルに開催す
- 四、一〇 開校式及第一回入學式舉行す

昭和十一年度

- 一、二〇 寄宿舎あかつき寮を開設す
- 三、一八 卒業生あかつき會設立發會す

- 一一、二四 東京府教員檢定委員の保姆無試験檢定に關する授業状態觀察あり

昭和十二年度

- 三、一八 卒業生に對し保姆無試験檢定認定せらる
- 一〇、一 第二回卒業生に對し保姆免許狀下附せらる
- 一一、六 保姆養成所校舎並に感應幼稚園舎増改築決定す
- 一一、九 校舎増改築を卒業生あかつき會にて支援の件決定す
- 一一、一五 校舎上棟式舉行せらる。

昭和十三年度

- 一、三〇 校舎の建築落成す
- 二、一 教室を新校舎二階に移轉す
- あかつき寮を校内新寮舎に移す

閑話の五、 中野高女を建築する時、中野銀行から三萬五千圓を借りて三年間に返した、其の利子が七千貳百餘圓。中野喜三郎殿より八萬圓恩借した、其の利子は金參萬六百餘圓である、此の兩方を合せると約三萬八千圓の利子である、其の外私が一時立替をする爲に借入れた金が相當である、私は豊山派三千の寺院で拾五萬圓の借金を持つて居るのは乃公一人だと鼻高々と威張つて居つた。私が内證で借金した利子がどれ程であるか御想像に任せらる。

兒童健康相談所

此の兒童健康相談所なる表題の下に連ねる諸記事の内、社會事業法の適用を受けるものは兒童健康相談所のみであつて、他は廣い意味に於ける社會事業である。従つて特に取り立てて書く必要のないものもあらうが、十三年もの長い間、吾々は何を考へ何を爲し來つたかを報告する意味で、その概略を記し參考に供する次第である。

一、兒童健康相談所の十三周年

寺院が爲すべき社會事業の數ある中、特にこの種の事業を選んだのは、寶仙寺を中心とする地域が住宅地であつて、所謂生々しい社會事業を必要としない。加ふるに是の如き状態にあつて、最も相應しい事業は子供を相手とするものであつて、特に乳幼児の死亡率の多い我が國に取つては、乳幼児の健康増進育児智識の普及こそ最も急務であると信じたからである。

大正十五年十月寶仙寺幼稚園の一室に相談所を設置し、相談擔當醫師としてその初め尾山友三博士を依頼し、次いで前横濱市兒童相談所長であつた紺戸廉平博士を迎へて事業を開始した。その初めは利用者側の理解を得ず、所期の目的を達することが出来なかつた。昭和三年四月寶仙寺に於て新に中野高等女學校を設立したので其の一室に移し、毎年母の會赤ん坊審査會等を開催、相談所の理解に努めた結果、成績も特に見るべきものありと認められるに至つた。即ち昭和五年二月には東京府知事より、同六年七月には中野町長より、助成金一封を交付せられ、同七年九月中野町が東京市へ編入せられるに際しては、多年同町公益に寄與せし廉により金一封を、又同九年に於ては東京市長より助成金一封を交付せられた。爾來東京府知事東京市長より年々助成金

の交付を受けるの光榮に浴してゐる。昭和十三年九月密教文庫開設と共に同所に移轉し、階下全部に新なる施設をなし、こゝに拾三周年を迎へ、新なる門出を祝ふ次第である。開所以來の成績を記すれば左記の通りであつて相談回数四百五十一回、この延人員九千五百五十一名の多きに達し、一回平均二十名位の割合となる。尙開所以來紺戸廉平博士を初め青柳義智氏田中一三の諸氏が多忙な本務持ちながら奉仕してくれてゐるのは眞に感謝に堪へない。

開所以來年度別成績

年 度	相 談 回 數	乳 兒	幼 兒	兒 童	延 人 員	一 回 平 均
昭和二年 度	四五	一〇六名	二八四名	一二名	四〇二名	八・〇九
三 年 度	四四	四〇六	四〇七	六七	八八〇	二〇・〇
四 年 度	四四	四二三	四一五	六一	九〇九	二〇・六〇
五 年 度	四一	六一九	四二七	五二	一、〇九八	二六・七八
六 年 度	三九	五六七	四二七	三六	一、〇三〇	三六・四一
七 年 度	四二	五九九	三九三	三四	一、〇二六	二四・四七
八 年 度	三九	四四八	三三〇	二一	七九九	二〇・四八
九 年 度	四〇	四四一	三二四	二五	七九〇	一九・七五
十 年 度	三六	四二四	二八六	三三	七四三	二〇・六四
十 一 年 度	四一	五七八	二〇四	二三	八〇五	一九・六三
十 二 年 度	四〇	四五二	二〇三	二四	六七九	一六・七五
合 計	四五一	五、〇六三	三、七〇〇	三八八	九、一六一	二〇・二九

二、赤ん坊審査會

昭和三年五月乳兒愛護週間に際し、新築の香も高い中野高等女學校を會場として第一回赤ん坊審査會を開催して以來、今年迄回を重ねることゝに十一回、その参加乳兒總數は約五千五百名に達し、毎年帝都の愛護週間に於ける年中行事の一つとして新聞紙上を賑はしてゐる。昭和十一年五月にはメトロゴールドウイン社によつて、海外ニュースとして報せられ、本年五月には同盟通信社によつて國內ニュースとして審査状況を各常設館に上映せられた。

年度別赤坊審査會成績

昭和年度	回数	入賞者	優良兒	來會者
三年	一	一〇	八二	二九九
四年	二	一五	二〇	一八〇
五年	三	一〇	六九	四一八
六年	四	一五	五六	四八〇
七年	五	一五	四九	五三八
八年	六	二〇	二八	六七五
九年	七	二〇	五三	五六五
十年	八	二〇	九七	七六〇
十一年	九	二〇	九三	六七二
十二年	一〇	二〇	六六	四四六
十三年	一一	二〇	四〇	四四八
合計		一八五	七五三	五、四八一

三、母の會

體位向上の叫ばれる昨今に於ても母親の育兒智識はまだ充分とは云へない。まして、十年以前にあつては貧弱そのもの様に感ぜられた。そこで昭和二年以來毎年一回秋季に相談所を訪れた母親を中心として母の會を開催、講演と映畫を通じて育兒知識の普及に努めてゐる。

回数	日	時	場	所	來會者	行	事
第一回	昭和二年十月二十日		感應幼稚園内		一三〇	講演 冬と兒童の衛生 乳兒の法則 尾山友三氏 紺戸彌太郎氏	
第二回	同四年十一月三十日		中野高等女學校講堂		二八〇	講演 季節と子供 母ぞ知る二卷 紺戸康平氏 健康第一 四卷 其他二卷	
第三回	同五年十一月二十三日		"		三〇六	講演 風邪について 相談所利用について 山本杉氏 乳兒の育て方二卷 乳兒の運動一卷 其他三卷	
第四回	同六年十一月二十二日		"		二七〇	報告 相談所五周年 富田所長 表彰 五ヶ年勤続 紺戸康平氏 來賓祝辭 中野郵便局長小寺俊之氏 餘興 漫談 松本翠影氏 映畫 女性五卷 奥様ごらん二卷 其他一卷	
第五回	同七年十一月十九日		"		二二五	講演 佛敎について 富田所長 育兒講話 紺戸康平氏 映畫 泳げ／＼一卷 おいらの世界五卷	

第六回	同九年十月二十七日	"	二二四	講演 乳兒脚氣に就て 紺戸康平氏 童謡舞踊 感應幼稚園 映畫 乳兒の運動及育て方三卷 其他三卷
第七回	四十年十一月三十日	"	二二六	講演 宗教講座 長岡慶信氏 育兒について 紺戸康平氏 映畫 乳兒の育て方二卷 ジュムマイ七卷
第八回	同十二年十月三十日	"	二〇四	講演 時局と家庭食糧 丸本彰造氏 多と小兒衛生 紺戸康平氏 映畫 事變ニュース二卷 乳兒の發育と生活四卷 旅路十卷

四、兒童遊園

三重塔を中心とする寶仙寺飛地境内三千坪は、そのまゝ四季を通じて附近の子供のよき遊場になつてゐる。

これに昭和五年四月創立五周年記念として、滑臺、鞆、砂場等を設備し、兒童遊園と名づけた。一年を通じて一日平均百名から三百名の子供が遊んでゐる。

年々交通が頻繁になり空地がなくなつて行く當區の子供に取つて、今は無くてはならぬ存在である。

五、夏期學園并に映畫の集ひ

酷暑に悩む都會の子供程みじめなものはない、せめてこれ等の子供達に寶仙寺の森と幼稚園のプールを開放して、規律ある生活を與へ健康の増進を計つてやりたいと云ふ趣旨の下に、昭和十一年八月一日より十日迄第一回夏期學園を開催して以來本年で三回の學園を開園した。その要項を示すと次の如くである。

期	昭和十一年	同	十二年	同	十三年
場	八月一日ヨリ十日	八月一日ヨリ十五日	同上	八月一日ヨリ十五日	同上
入園資格	感應幼稚園	同上	同上	同上	同上
入園資格	七歳ヨリ尋一、二年マデ	同上	同上	同上	同上
園費	七〇錢	一圓	一圓	一圓	一圓
文藝映畫の集ひ	昭和四年九月七日午後七時より中野高女校庭に於て行ふ、來會者約一五〇〇名震災映畫二卷 恩讐の彼方へ八卷	同上	同上	同上	同上
納涼盆踊りの夕	昭和八年七月十九日午後七時より三日間、中野高女校庭に催した、盆踊の魁で、新作の盆踊りの歌少女盆踊の歌	同上	同上	同上	同上
を難に合はせて誦すが、意外の好評を博し、三日間に五千名以上の人が來て踊つた。					
オリンピック映畫の夕	昭和十一年八月二十六日午後七時より中野高女校庭で催した。朝日新聞の世界ニュース二卷 オリンピック大會	同上	同上	同上	同上
十卷で來會者は約貳千名であつた。					
映畫の夕	昭和十二年七月二十一日午後七時より中野高女校庭で催した。同盟ニュース二卷 乙女橋八卷で、來會者は約貳千名であつた。	同上	同上	同上	同上
出征軍人家族慰安の集ひ	昭和十三年三月二十一日午後一時より中野高女講堂にて催した。富田敬純師の挨拶に始まり、中野高女生徒に依つて箏曲并にマンドリンの合奏は演ぜられ、續いて五人の斥候兵七卷 事變ニュース一巻が上映され、出征軍人家族子供連れで約五百名が半日の歡を盡した。	同上	同上	同上	同上
映畫の夕	昭和十三年六月十七日午後七時より中野高女體操場で軍神乃木さん八卷 其他五巻が上映され、約六百名の觀覽者があつた。	同上	同上	同上	同上

密教文庫 附 兒童圖書館

二ヶ月の試み

最初の豫定では中野高等女学校の第一回の卒業生を出す頃、即ち昭和七年頃には密教文庫を建設する豫定で、中野高女を設計して頂いた柴垣君に依頼して、各専門學校で建て、居る書庫の設計圖まで作つて頂いた。併し世の中の不景氣で思ふに任せず荏苒して居つた、昨年に到つて中野區役所の建物を貰つたので、名ばかりの石倉の書庫と閲覧室とを建てた、閲覧室の建物の總坪數六十四坪餘あり、圖書庫も拾坪あるから、事務員の經費さへあれば、何とか方法が立たぬでもないが。其移轉建築費すらなく、私が個人で借金して、四千圓を支出したと云ふ情けない状態で、どうすることも出来ぬ。漸く中野喜咲君が弘徳院殿喜研淨實居士即ち父親の菩提の爲に金壹千圓を寄附して頂いたので、兒童圖書并に器具を購入し。尋常小學校の三年生以上に對して本夏の暑中休暇中之を開館し、其後は土曜と日曜とに開館閲覧せしむることにした。所が思つたより閲覧者が多いので、時には滿員で閲覧を御斷りすることすらあつた。本年八月中即ち三十一日間の閲覧人員總數は五千四百四十一人で、之を日數で割れば一日平均が百七十人弱となる、九月中の土曜日の午後と日曜日全日と八日間である。閲覧人員總數は九百七十八人で、男が七百三十名、女が二百四十八名である。暇に土曜日は半日だから二日を一日と計算すれば、四日か二日となり、日曜の四日と合計すれば六日となる、九百七十八人を六分すれば一日平均百六十三人に當る。而して増すとも減する傾向はない、閲覧者は尋常四年生が一番多い、始めの間は繪本講談を盛んに讀んで居つたが、近頃では兒童文學理科方面のものを讀み出して來た、讀書の趣味を養ふ爲には非常に有効であることとを信するのである。

會計報告

一、四拾貳萬圓

或人が我が寶仙寺檀徒總代の一人を訪問して、寶仙寺から金を拾萬圓借りたいから頼むと云ふたのである。檀徒總代吃驚して、冗談じやない寶仙寺は目下借金が五六萬圓あつて返済に苦んで居る、どこからそんなに寶仙寺が金持だと聞いて來たと聞返した。或人は一つの女學校に何十萬圓と云ふ堂々たる西洋建築をして、夫で年々損をすると云ふ位だから、金などは餘つて困る程あるに相違ないと思つて來たのだと云ふた。見様に依ては寶仙寺は金持のやうであるが、其の實は随分苦しいことをして居る。併し表面の數字に顯はれた金が四十貳萬餘圓で、別途會計の地代から出した金が九萬餘圓、通常會計から工面して出した金が五萬餘圓であるから二口の計金は拾四萬餘圓である。此の金を約十年間に搾り出したのであるから容易でない。勿論帳簿に載らぬ寶仙寺からの物品の提供もあるから、毎年平均して壹萬五千圓以上を出したものと見なければならぬ。又一面から觀察すれば、四十二萬餘圓の中寄附金が拾貳萬餘圓であるから、約三十萬圓は寺から出した金で、其の中の拾壹萬餘圓が土地や立木を賣つた金、餘る拾九萬圓は寺の收入から出したものとも云へる。而して現在女學校や幼稚園に使用してある五千坪近い土地を若し貸地するとしたならば、坪當り金二十錢として月に約壹千圓となる、一ケ年には壹萬貳千圓、之を十年間積めば拾貳萬圓と云ふ大金になる。こんな鹽梅に勘定すると拾九萬圓の支出と、使用地の賃金とを合せて三十一萬圓の大金を社會奉仕の爲に使つたと云ふことになる。是れも皆本尊不動明王様の賜である、以下に列記する決算は固より概算であつて細かく勘定したらば尙此の上に有るのかも知れぬ。

一、寶仙寺別途會計決算

公共事業全般

昭和三年度より昭和十二年度迄

收入

一金參拾五萬五千四百五拾四圓三十八錢

内譯

金拾貳萬七千六拾九圓拾錢

寄附金

金拾壹萬五千八百四拾九圓十八錢

土地並立木賣却代金

壹萬七千八百三拾六圓三十九錢

貸地設備費收入

金九萬三拾九圓四錢

公共事業部に繰入たる土地々代

金三千二百三拾九圓三十二錢

預金利息

金貳千四百貳拾壹圓三十五錢

雜入

支出

一金參拾五萬五千八百八拾二圓六十錢

内譯

金貳拾九萬五千九百六拾六圓七十二錢

中野高女、幼稚園、養成所建築並設備費

金七千七百三拾四圓五十五錢

土地家屋買入

以上直接經費

金六千貳百四圓九十錢

寄附金募集費

金九千六百四圓三十錢

貸地工事費

金參萬六千壹百九拾七圓七十三錢

借金利息

金壹百七拾四圓四十錢

雜費

以上間接經費

不足額

一金四百貳拾八圓二十二錢

寶仙寺支出決濟了

感應幼稚園舎改築工事決算

昭和十三年九月十五日

收入

一金九千五百拾圓五拾錢

内譯

金四千圓也

寶仙寺通常會計より支出

金參千九百八拾六圓五十錢

幼稚園關係者寄附

金五百五拾五圓

保姆養成所關係者等寄附

金九百五拾八圓六十五錢

臨時積金

支出

一金壹萬九百參拾圓八十四錢

内譯

金壹萬六千六百六十參圓五十九錢

改築工事費

金貳百貳拾貳圓廿五錢

設備費

金四拾五圓

借金利息

差引不足金

一金壹千四百貳拾圓六十九錢

富田園長立替

密教文庫附屬兒童圖書館移轉工事決算

昭和十三年九月廿日

收入

一金壹千圓也

内譯

金壹千圓也

中野喜咲殿寄附

支

一金四千九百四十七圓拾五錢

内譯

金參千九百四十九圓九十八錢

移轉工事費

金九百九十七圓拾七錢

設備並圖書購入費

差引不足金

一金參千九百四十七圓拾五錢

富田文庫長立替

三、寶仙寺通常會計支出金

昭和二年度ヨリ昭和十二年度マデ

支 出

一金五萬壹千三百拾七圓也

内 譯

金參萬貳千五百五拾六圓八十錢

中野高等女學校經常費不足金補助

金壹萬六百貳拾五圓三十六錢

兒童健康相談所經費不足金支出

金參千七百貳拾七圓貳拾錢

感應幼稚園經常費不足金補助金

金四千四百七圓六十四錢

佛教保育協會保母養成所經常費不足額補助

但し實際の不足額は金五千八百八十六圓

四十一錢なるも本所は感應幼稚園と同所

に經營せらるゝものなれば幼稚園の剩餘

と相殺して其の不足額のみを計上す

以 上

以上四口累計 金四拾貳萬參千七拾七圓五十九錢

編輯後記

時局柄であるから十年記念會などは延期しては如何にやと云ふ人もあつた、或は日露開戦にはなりやせまいかと杞憂する向もあつたので、愚圖くして居る間に、日は迫つてしまつた、そこで足元から鳥の立つやうに本誌を編輯した。

中野高女の教授訓練に関する諸項は其の擔任の先生が各々に筆を揮ひ、宗教行事と各學年記事は赤沼教頭が記した、感應幼稚園と保母養成所は青柳主事が執筆し、兒童健康相談所は田中賢主任が纏めた、こんな譯合で、記事に自ら繁簡其の宜しき得ず、文章も各々の特長を出して居るは止むを得ないことである、總元締の富田大僧正も昨春髯を蓄えた其の蓄髯記に於ける告白の通り、無頓着になつたのも本誌の間に其の佛がありくと見ゆる。

一體九月や十月と云ふのは一般の行事も多い月ではあり校正擔當の人々も、種々の差支等で一人で全部へ目を通して行くのが却々難儀であつた。自然統一的な組み方を心がけつゝも脱漏の多いのも仕方がない。強ひて吾々はこの多忙の間に何を好んでこのアルバイトを敢てなしたかは知つて下さる方は知つて下さるだらうと云ふ外ない。二校終る期廣東は落ち、三校終る頃漢口の陥ち、製本終るの頃事變の區切りつくことを夢みつゝ校正の筆を擱く、(校正子)

384
506

昭和十三年十月廿一日印刷
昭和十三年十月廿九日發行

編輯
人兼

東京市中野區宮前町五〇
富田 敦 純

印刷
人

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
寺井 藤 左 衛 門

印刷
所

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
大日本印刷株式會社

終

